

第2節 平成29年度 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 福利厚生施設新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内M-17・18区

調査面積 149㎡

調査期間 平成30年1月15日～1月31日

調査担当 横山成己

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真39・40)

平成29年度第4回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成29年11月8日(火)開催)において、総合図書館南側の中央広場東側を対象地とした福利厚生施設の新営計画が提出された。

工事計画地周辺については、本学吉田地区移転時に、総合図書館1号館および農学部・共同獣医学部校舎、理学部校舎がいずれも埋蔵文化財調査を実施しないまま建設されたため、計画地の地下の様相も予測の付かない状況であった。その一方で、やや距離が離れるものの、総合図書館2号館・3号館^{註1}、獣医学研究科棟建設時の調査では自然河川が検出されており、その延長部分が予定地まで延びている可能性も考えられた。また、開発における基礎掘削が地下1.5mと深く、遺構面に抵触することも十分予測されることから、初期対応として予備発掘調査を実施し、当該地の地下の状況を確認することが提案され、承認された。

【註】

- 1) 河村吉行(1985)「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』, 山口
- 2) 横山成己(2016)「図書館改修工事及び環境整備(図書館周回道路迂回)工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成24年度—』, 山口
- 3) 豆谷和之(1994)「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅡ』, 山口



図4 調査区位置図



写真 39 調査地点遠景(北西から)



写真 40 平成18年(2006)当時の中央広場(南から)

(2) 調査の経過

平成30年1月15日(月)から16日(火)にかけて、調査区域の仮囲いおよび仮設ハウスの設置を行った。19日(金)に広場北東部の東屋を撤去し、23日(火)に開発予定地の北端と東端で、南北と東西方向に幅2.5mの調査区をL字形に配し、調査を開始した。重機掘削を23日(火)から25日(木)の3日間で行い、26日(金)から31日(水)の4日間で調査区断面を精査し、遺構の検出を行った。

(3) 調査の成果(写真41～49)

調査の結果、南北トレンチでは現地地表下1mにて、東西トレンチでは西端部で現地地表下1.3mにて多数の遺構を確認した。開発予定地全域に遺構が埋存する可能性が高く、予定建物基礎掘削深度より浅い位置での検出であったため、記録作業を開始する前に埋蔵文化財資料館専門委員会(第6回 2月8日(木)開催)を開催し、今後の埋蔵文化財保護対応について審議することとなった。専門委員会では、以下の成果を報告した。

1. 旧地形について

当該地の旧来の地形は、南東方向に高く、北西方向に向かい降下している可能性が高い。

基本層序を見ると、南北トレンチ南側は旧耕土直下が地山であり(写真44)、耕地化に際し大きく削平を受けていることが分かる。北西に向かうほど地山は降下しており、耕土下に敷く床土の厚みを増加させることにより水田面の水平を保っている。ただし、東西トレンチ(長さ30m)で東端部と西端部の高低差が約30cmであることから、1%勾配程度の緩傾斜で地山が降下しているものと推測される。

2. 遺構面について

上記の通り、開発予定地の南東部は大きく削平を受けていることから、黄褐色シルト質の地山が遺構検出面となる(写真46)が、南北トレンチ北端部から東西トレンチ全域にかけて地山上に褐色シルト質の堆積層が遺存しており(写真45)、遺構は褐色層の上面から掘り込まれている(第1遺構面 写真47)。東西トレンチ北壁側にサブトレンチを設け、地山までの深さを確認したが、褐色シルト層上面からでなく、地山上面から掘り込まれた遺構も確認されることから、その多寡は不明であるものの、地山を検出面とする遺構も存在することは確実である(第2遺構面)。

3. 遺構について

遺構は調査区全域に分布するが、大きく削平を受けている開発予定地の南東部は比較的少ない。

遺構の性格に関しては調査区幅が狭小であること、また遺構を掘削していないことから断定はできないが、南北トレンチ中央北よりに検出した遺構は方形プランの竪穴式住居跡である可能性が高い(写真48)。径15～20cmの円形ピットは柱穴である可能性を指摘できる。径5cm程度の円形遺構(杭跡か)は東西トレンチの第1遺構面に顕著に認められる。

4. 遺構の時期について

上記の竪穴式住居跡の可能性のある遺構より、古墳時代前半期と見られる土師器甕が確認されている(写真49)。当遺構は、第1遺構面が遺存しない地点であることから、元来第1・第2遺構面のどちらに所属していたか不明であるが、遺構面を覆う床土に含まれる遺物の多くが弥生時代から古墳時代にかけてのものであることから、遺構の大多数は当該期に所属するものと予想される。

審議では併せて吉田遺跡の中でも重要な地点となることが予想されること、周辺が文化財保護対応無しに破壊されているため、残された数少ない遺構群であることを伝えた上で、以下の選択肢を提示した。

A. 計画地に80cmから100cmの盛土を施す→本発掘調査不要で遺構群を完全に保存できる

- B. 構内で埋蔵文化財調査の必要ない場所に計画地を変更→本発掘調査不要で遺構群を完全に保存できる
- C. 計画地を中央広場の西側にずらす→既設の噴水プールによりすでに遺跡が破壊されている部分が多いと推定されるため、本発掘調査が比較的小規模で済み、遺構の破壊範囲も減少する
- D. 当初計画地の本発掘調査を行い、遺構群を記録保存する→計画どおり開発できるが、遺構群は完全に破壊される

当館および本学考古学専門委員は現地保存可能なA・B案、最低限でもをC案を支持したが、新営施設の建設・運営を担う山口大学生生活協同組合(陪席員)はD案を支持したことから、当委員会としては遺跡の保護を働きかけるが、最終的な判断は本学執行部に委ねられることとなった。



写真 41 予備発掘調査区全景 (北から)



写真 42 南北トレンチ全景 (北から)



写真 43 東西トレンチ近景 (南東から)



写真 44 南北トレンチ中部土層断面 (東から)



写真 45 東西トレンチ東部土層断面 (南から)



写真 46 南北トレンチ中部遺構検出状況 (西から)



写真 47 東西トレンチ西部遺構検出状況 (東から)



写真 48 方形竪穴式住居跡か (西から)



写真 49 遺物出土状況 (東から)

2. 福利厚生施設新営工事に伴う本発掘調査

調査地区 吉田構内M-17・18区

調査面積 1,100㎡

調査期間 平成30年2月22日～
令和元年10月25日

調査担当 横山成己 田畑直彦
水久保祥子

調査結果

(1) 調査の経緯(図5)

2月8日(木)に開催された平成29年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会の審議を受け、2月20日(火)に本学臨時役員会が開催されることとなった。

臨時役員会では、専門委員会委員長(当館館長: 学術情報担当副学長)より専門委員会の審議報告とともに遺跡を最大限保護するよう提言があったが、審議の結果、開発を予定通り進めること、工事により破壊される遺構群については、本発掘調査により記録保存を行うことが決定された。臨時役員会の開催はわずか5分であったと伝え聞く。

以上の経緯を経て、工事計画地全域(約1,100㎡)を対象に本発掘調査を実施する運びとなった。

(横山)

(2) 調査の経過(写真50・51)

臨時役員会の決議内容は事前に予想されたことから、直ちに遺跡の記録保存を目的とした本発掘調査

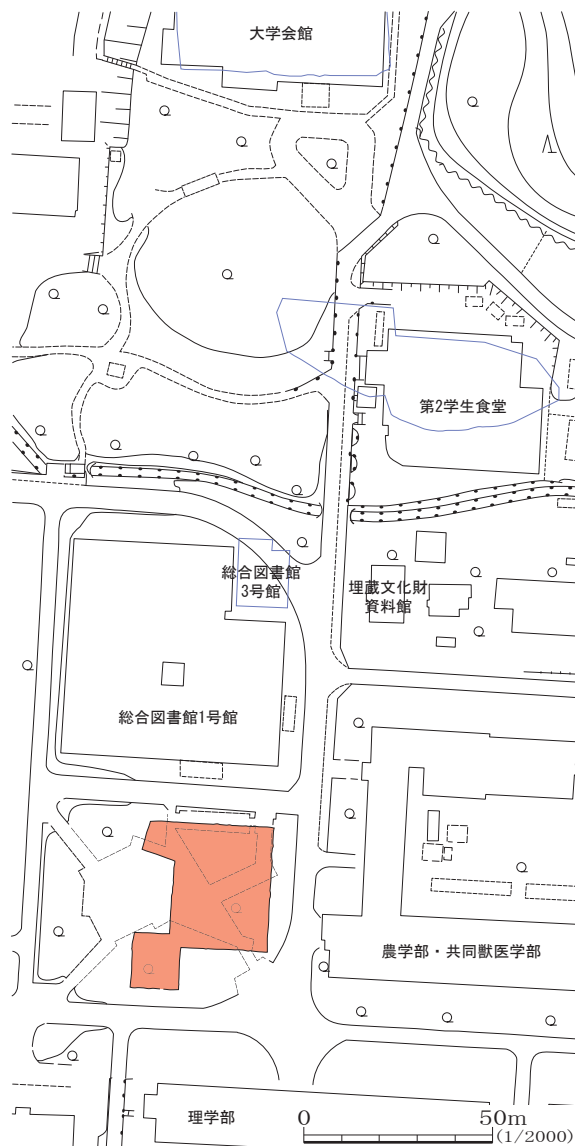


図5 調査区位置図



写真 50 予備発掘調査残土排出作業(南西から)



写真 51 本発掘調査重機掘削(北から)

査に移行できるよう準備を行っていたこともあり、2月22日(木)には本発掘調査に移行した。以後、調査終了までのスケジュールは以下の通りであった。

- 2月22日(木)～2月23日(金) 仮囲い(安全フェンス)の付け替えと仮設事務所の移転
- 2月27日(火) 予備発掘調査の残土を正門横臨時駐車場に搬出(写真50)
- 2月28日(水)～3月1日(木) 調査範囲の芝生除去・マウンド状の高まりの根切り
- 3月2日(金)～3月30日(金) 重機掘削と排土の搬出(写真51)
- 3月26日(月) 第7回埋蔵文化財資料館専門委員会にて調査状況を説明(写真84)
- 4月2日(月)～4月10日(火) 遺構検出
- 4月12日(木)～5月8日(火) 調査区南西部整地土・暗渠等攪乱坑掘削。
- 5月9日(水)～5月11日(金) 遺構検出
- 5月12日(土) 遺構検出写真撮影
- 5月14日(月)～5月16日(水) 調査区北部遺物包含層掘削・遺構掘削開始(調査区南西部から)
遺構配置図(平板測量 S=1/50)作成開始
- 5月17日(木) 調査区北部遺物包含層下の遺構検出写真撮影(第1遺構面)
- 5月21日(月)～6月5日(火) 調査区北部第1遺構面遺構掘削
- 6月7日(木)～6月12日(火) 第1遺構面平面図(S=1/20)作成・第1遺構面清掃(写真85)
- 6月13日(水) 第1遺構面完掘写真撮影
- 6月14日(木)～6月21日(木) 第1遺構面基盤層掘削・第2遺構面検出
- 6月22日(金) 第2遺構面検出写真撮影(写真86)
- 6月25日(月)～7月25日(水) 竪穴住居跡4棟をはじめとする遺構掘削(写真87)
- 7月9日(月)より第2遺構面平面図(S=1/20)作成開始
- 7月26日(木)～7月27日(金) 現地説明会準備
- 7月28日(土) 10時より現地説明会開催 ※参加者60名(写真88・89)
- 7月30日(月)～8月10日(金) 全遺構掘削完了
- 8月20日(月)～8月24日(金) 完掘写真撮影準備 ※撮影は台風のため翌週に延期
- 8月27日(月)～8月30日(木) 完掘写真撮影(写真55・56)
- 8月31日(金)～9月14日(金) 各種測量(平面図・調査区断面図等)
- 9月18日(火)～10月25日(木) 埋め戻し・仮囲い(安全フェンス)と仮設事務所撤去

(横山)

(3) 本学移転前の地形と基本層序(図6・7、写真52～83)

予備発掘調査により当地は大きく削平を受けていることが判明したが、ここで本学移転前の地形について確認しておく。

吉田構内の地形は、北部から南東部にかけての低丘陵地と、北西部から南部にかけての沖積低地とに大別される。本学移転前は総合図書館北側(大学事務局1・2号館)周辺などにやや家屋が集中(坂本集落)するのみで、低丘陵地には棚田が、沖積低地部には区画された水田が整然と設けられていた(写真53)。今回開発予定地となった中央広場および総合図書館は、低丘陵地から沖積低地へと変換する境界部、水田区画のやや乱れた場所に位置する(写真52)。総合図書館3号館(総合図書館北東部)新営に伴う発掘調査では、東から西に走る河川が確認されていることから、東南から北西に派生する^{註1}



写真 52 本学吉田地区統合移転時の状況（上空から ※上が北西）

農学部・共同獣医学部本館、共通教育棟、理学部3号館、第1体育館が竣工しており、動物医療センター、榎野寮1期建物が建設中のように、農学部附属農場本館が整地状態であることから、昭和41年（1966）夏～秋頃の写真と推定される。総合図書館および中央広場は未整備で、工事用地として使用されている。



写真 53 本学吉田地区移転前の地割状況（上空から ※上が北西）

動物医療センターが立地する丘陵、もしくはその南に派生する農学部附属農場飼料園や榎野寮(女子学生寮)が立地する丘陵端部に位置するものとみられる。

発掘調査により確認された水田痕跡を見ると、調査区の中央やや南西側で、南東から北西に走る段差が検出されたことから、元来は小区画棚田であったことが分かる。その後低地側の水田は整地土により埋め立てられ、1枚の水田区画に造り直されている。調査区南東端部を北東-南西に、南拡張区を北西-南東に、北拡張区を北東-南西に走る粗朶暗渠は、水田区画に伴うものであろう。南西拡張区に南東-北西に走る畦畔は、統合移転前航空写真に写る水田境界部と見なされる。

一方、水田区画に対し斜交して走る暗渠には土管(有孔陶管)が用いられている。これは昭和52年度末に計画された環境整備工事の一環として中央広場に噴水プールが設けられた際に、水捌け改善のため埋められたものである。噴水プールにより4号竪穴式住居跡の一部が、土管暗渠により1号竪穴式住居跡の一部と縄文時代から弥生時代の遺物を含む自然河川(NR1)の一部が破壊されている。山口大学吉田遺跡調査団の統合移転に伴う調査終了から、当館に人員が配置され、構内遺跡調査を担い始めるまでの期間に実施された工事であり、慚愧の念に堪えない。

基本層序については、調査区東壁は共同溝埋め戻し土のため記録できなかったが、最上部の盛土は土地の水平を保つため、東部に薄く(約60cm)、西部に厚く(約100cm)施されている。盛土の下位には旧耕土と旧床土があり、調査区南西部から南西拡張区の棚田が下がる部分には整地土が盛られている。調査区北部中央から北西拡張区にかけては遺物包含層が遺存し、上下に分層可能である。上層(北側遺物包含層1)は黄褐色(2.5Y5/4)シルトで、調査区北部中央にしか遺存していない(写真62の左下の白色土部分)。下層(北側遺物包含層2)は黒褐色(10YR3/2)砂質シルトで、北部中央から北西拡張区まで遺存する。当包含層は南東から北西方向に延びる低丘陵の北東部、総合図書館3号館敷地を西に走る自然河川に向かい降下する傾斜面に堆積したものである。上下層に含まれる遺物はいずれも弥生時代から古代にかけての土器で、上層には少量の陶器が見られたが上位の旧床土に由来する可能性が高く、明確な時期差は見いだせない。南西拡張区南西部にも褐灰色(10YR4/1)極細砂混シルトの遺物包含層が形成されていた。これは縄文時代からの河川がほぼ埋没し、窪地となった地点に堆積したものであり、河川埋土最上層と呼び変えても差し支えないものだが、含まれている遺物は北側遺物包含層同様であり、両者をまたぎ接合した須恵器もあった(図32の83)ことから、ここでは遺物包含層として識別した。

予備発掘調査成果でも述べたが、調査区北部の地山上に層厚15~20cmのシルト層(黄褐色(2.5Y5/3)極細砂混粘土質シルト)が堆積しており、第1遺構面の基盤層となっていた。この堆積層に含まれていた遺物は弥生土器で、堆積の下限時期の一端を示している。以南は削平により地山上面が遺構検出面(第2遺構面)となっているが、遺構検出状況を見ると、4号竪穴式住居跡が上層から掘り込まれた遺構であり、下層遺構が希薄であること、明確な遺物が^{註2}ほぼ出土していないことから、検出された人為的遺構の大多数は第1遺構面に所属するものと推定される。このため、発掘調査では第1遺構面下の地山検出遺構と以南の地山検出遺構を「第2遺構面の遺構」として取り扱ったが、混乱を来す恐れがあることから、調査区遺構平面図では北部の下層遺構のみを下層遺構として赤線で示した(図6)。 (横山)

【註】

- 1) 横山成己(2016)「図書館改修工事及び環境整備(図書館周辺道路迂回)工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成24年度-』, 山口
- 2) Pit203は下層遺構であり、土器底部片が出土しているものの、第1基盤層の土質が遺構埋土と酷似しており(写真58・59、写真61・62)、遺構検出が困難であったことから、上層遺構の見逃しである可能性が高いと考えている。

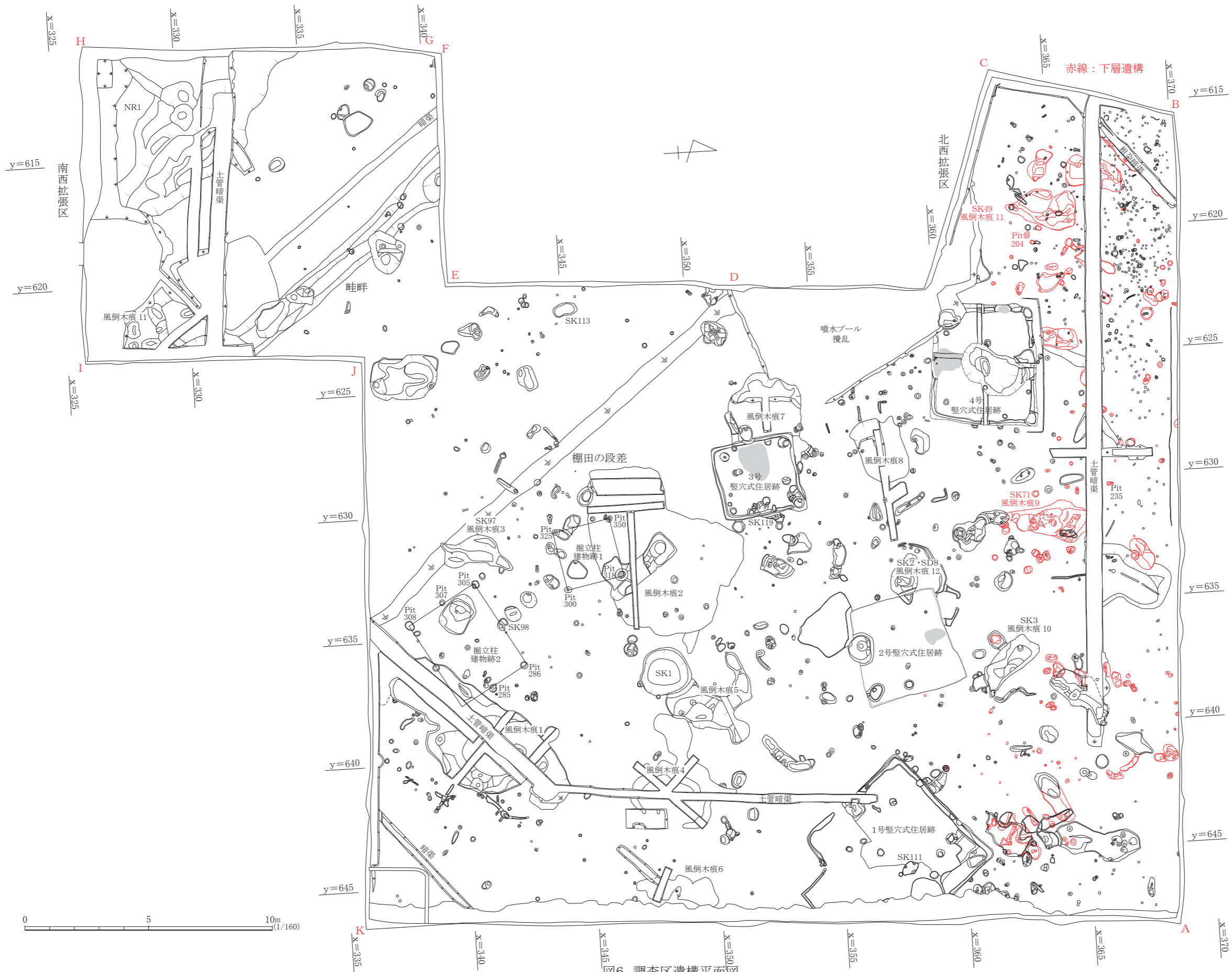


図6 調査区遺構平面図



写真 54 遺構完掘状況 (上空から ※上が北)



写真 55 ドローンによる撮影①(南東から)



写真 56 ドローンによる撮影②(南から)



写真 57 遺構検出状況 (北から)



写真 58 調査区北東部遺構検出状況 (北東から)



写真 59 調査区北西部遺構検出状況 (南東から)



写真 60 調査区南西部遺構検出状況 (北東から)



写真 61 調査区北西部遺構検出状況 (南から)



写真 62 調査区北部遺構検出状況 (南西から)



写真 63 調査区中央部遺構検出状況 (北西から)



写真 64 調査区東部遺構検出状況 (南西から)

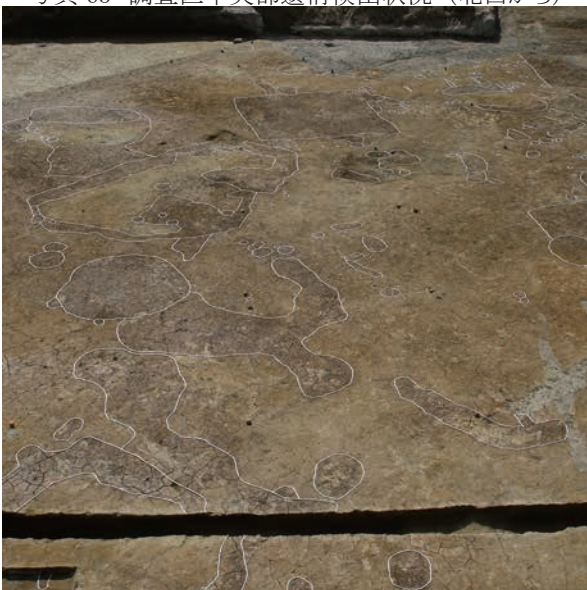


写真 65 調査区中央部遺構検出状況 (東から)



写真 66 南西拡張区遺構検出状況 (北から)



写真 67 調査区北部第1遺構面遺構完掘状況 (南西から)



写真 68 調査区北部第1遺構面遺構完掘状況 (南西から)



写真 69 遺構完掘状況 (北西から)



写真 70 遺構完掘状況 (北から)



写真 71 遺構完掘状況 (南から)



写真 72 遺構完掘状況 (南東から)

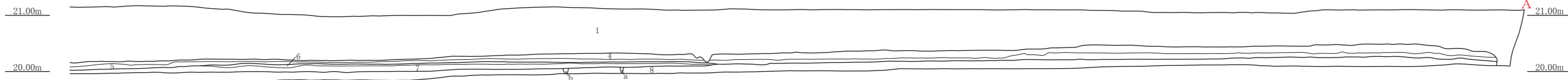


写真 73 遺構完掘状況 (北西から)



写真 74 南西拡張区遺構完掘状況 (東から)

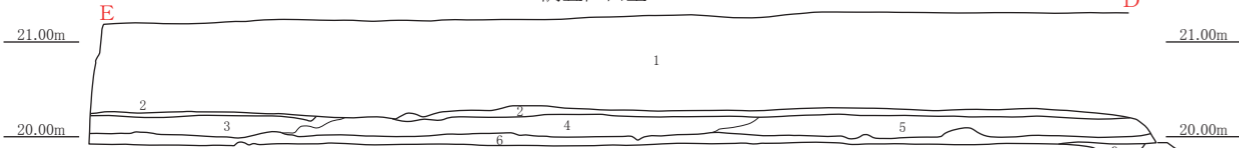
調査区北壁



- 1 盛土
- 2 灰オリブ色(5Y4/2)細砂混砂質シルト・暗緑灰色(10G4/1)砂質シルト…旧耕土
- 3 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルト…粗雑暗渠埋土
- 4 褐灰色(7.5Y5/1)細砂混砂質シルト…旧耕土
- 5 にぶい黄色(2.5Y6/3)細砂混砂質シルト…旧床土
- 6 黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト…遺物包含層
- 7 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト…遺物包含層2
- 8 黄褐色(2.5Y5/3)極細砂混粘土質シルト…上層遺構基盤層

- a・b・d・h・i 黒褐色(10YR3/2)砂質シルトに明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質シルトのブロックが混じる
- c 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
- e・e1 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト
- f 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルトに明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質シルトのブロックが混じる

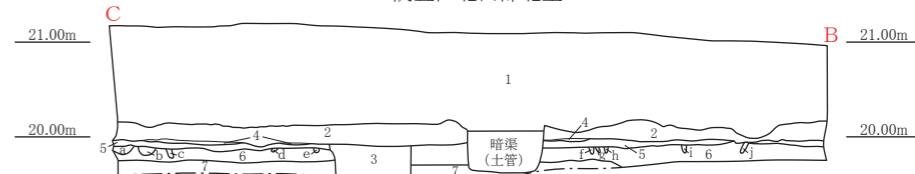
調査区西壁



- 1 盛土
- 2 にぶい黄色(2.5Y6/3)中砂混砂質シルト…旧耕土
- 3 明黄褐色(10YR6/8)砂質シルトと灰褐色(7.5YR3/2)シルトがまだらに混じる…整地土
- 4 にぶい褐色(7.5YR5/3)砂質シルトとにぶい黄褐色(10YR6/3)シルトと褐灰色(7.5YR4/2)シルトがまだらに混じる…整地土
- 5 にぶい黄色(2.5Y6/4)砂質シルトと暗褐色(7.5YR3/3)シルトのブロック、にぶい褐色(7.5YR5/4)シルトのブロック、明黄褐色(10YR6/8)砂質シルトのブロック混じる…整地土
- 6 灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト…旧耕土

a 灰褐色(7.5Y5/2)シルトに明黄褐色(10YR6/8)シルトのブロックが混じる…SK116 埋土

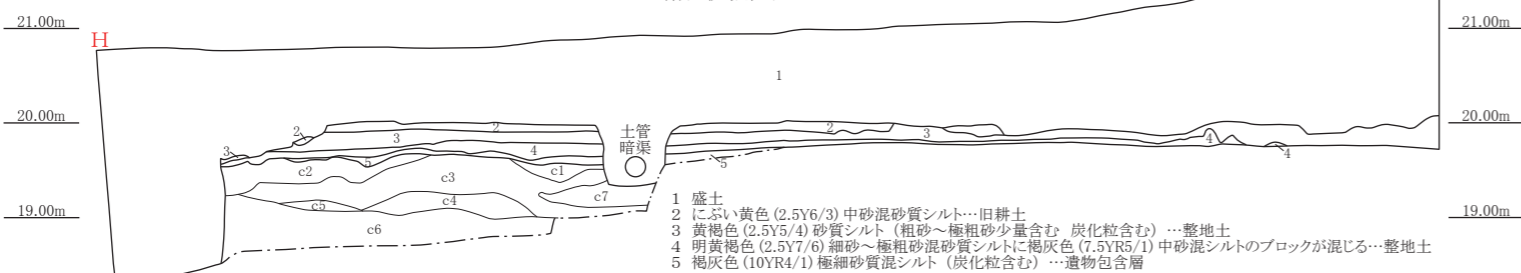
調査区北西部北壁



- 1 盛土
- 2 灰オリブ色(5Y4/2)細砂混砂質シルト・暗緑灰色(10G4/1)砂質シルト…旧耕土
- 3 にぶい黄色(2.5Y6/4)粘土質シルト…粗雑暗渠埋土
- 4 オリブ黄色(5Y6/3)細砂～中砂混砂質シルト…旧床土
- 5 黒褐色(10YR3/2)砂質シルト…遺物包含層2
- 6 黄褐色(2.5Y5/3)極細砂混粘土質シルト…上層遺構基盤層
- 7 明黄褐色(2.5Y6/6)粘土質シルト…地山

- a 灰黄褐色(10YR4/2)シルト
- b・c・d・e 褐灰色(10YR4/1)シルト
- f・h 褐灰色(10YR4/1)細砂混シルト
- g 褐灰色(10YR4/1)細砂混シルトににぶい黄色(2.5Y6/4)シルトのブロックが混じる
- i 褐灰色(7.5YR5/1)細砂混シルト
- j 褐灰色(7.5YR4/1)シルトににぶい黄色(2.5Y6/4)シルトのブロックが混じる

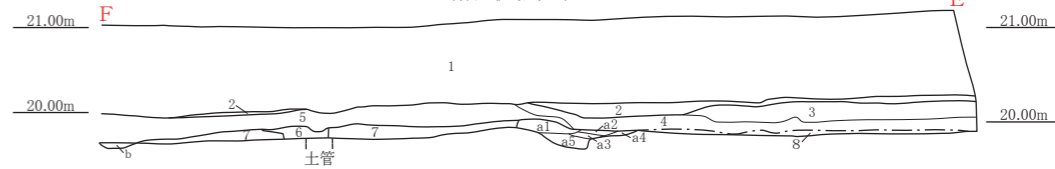
南西拡張区西壁



- 1 盛土
- 2 にぶい黄色(2.5Y6/3)中砂混砂質シルト…旧耕土
- 3 黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト(粗砂～極粗砂少量含む 炭化粒含む) …整地土
- 4 明黄褐色(2.5Y7/6)細砂～極粗砂混砂質シルトに褐灰色(7.5YR5/1)中砂混シルトのブロックが混じる…整地土
- 5 褐灰色(10YR4/1)極細砂質混シルト(炭化粒含む) …遺物包含層

- c1 灰白色(2.5Y7/1)粗砂極細砂…河川埋土
- c2 明オリブ灰色(2.5GY5/2)シルト～極細砂(炭化粒含む) …河川埋土
- c3 灰白色(5Y7/1)極細砂～細礫の互層…河川埋土
- c4 灰白色(5Y7/2)中砂～細礫と明黄褐色(10YR6/8)粗砂～大礫の互層…河川埋土
- c5 灰白色(5Y7/2)中砂～大礫…河川埋土
- c6 灰色(N6/7)中砂～大礫…河川埋土
- c7 黄灰色(2.5Y6/1)シルト～細砂…河川埋土

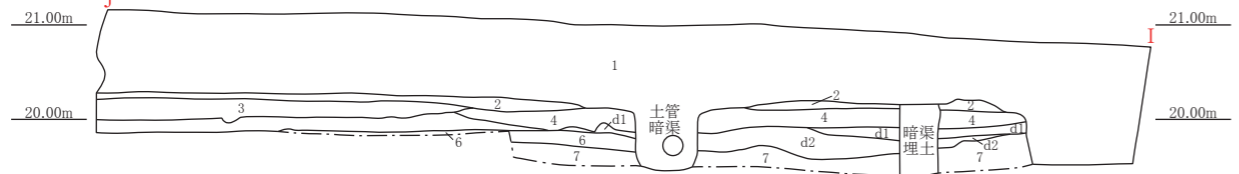
南西拡張区北壁



- 1 盛土
- 2 にぶい黄色(2.5Y6/3)中砂混砂質シルト…旧耕土
- 3 明黄褐色(10YR6/8)砂質シルトと灰褐色(7.5YR3/2)シルトがまだらに混じる…整地土
- 4 灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルト(炭化粒含む) …整地土
- 5 黄褐色(2.5Y5/4)砂質シルト(粗砂～極粗砂少量含む 炭化粒含む) …整地土
- 6 明黄褐色(10YR6/6)中砂～粗砂混シルトに灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルトのブロックが混じる…整地土
- 7 明黄褐色(2.5Y7/6)細砂～極粗砂混砂質シルトに褐灰色(7.5YR5/1)中砂混シルトのブロックが混じる…整地土
- 8 灰黄色(2.5Y6/2)極細砂混シルトに明褐色(7.5YR5/6)細砂混シルトのブロックが混じる…整地土
- 9 明黄褐色(10YR6/8)細砂混シルト(粗砂少量含む) …地山

- a1 褐灰色(5YR4/1)シルト…SK132 埋土
- a2 灰褐色(7.5YR2/2)シルト…SK132 埋土
- a3 にぶい褐色(7.5YR5/3)極細砂混シルト…SK132 埋土
- a4 にぶい黄褐色(10YR6/4)極細砂混シルト…SK132 埋土
- a5 にぶい黄褐色(10YR5/3)極細砂混粘土質シルト…SK132 埋土
- b 灰褐色(7.5YR4/2)極細砂混シルト…Pit520 埋土

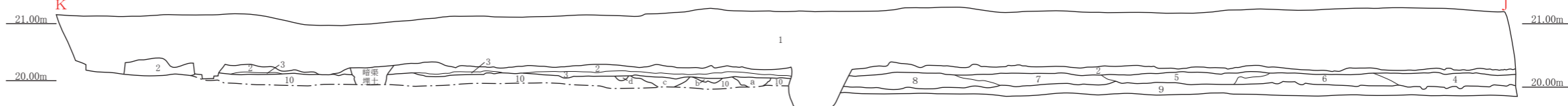
南西拡張区東壁



- 1 盛土
- 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)中砂混砂質シルト…旧耕土
- 3 にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト混細砂～極粗砂に褐灰色(7.5YR5/1)中砂混シルトのブロックが混じる…整地土
- 4 黄褐色(2.5Y5/3)細砂混シルト(極粗砂～細礫含む) …整地土
- 5 灰黄色(2.5Y6/2)極細砂混シルト(粗砂少量含む) …旧耕土
- 6 にぶい褐色(7.5YR6/4)シルト…地山
- 7 明黄褐色(2.5Y7/6)砂質シルトに灰白色(5Y7/1)砂質シルトが混じる…地山

- d1 褐灰色(7.5Y4/1)シルト…風倒木痕か
- d2 褐灰色(7.5Y4/2)シルトに明黄褐色(2.5Y6/6)シルトのブロックが少量混じる…風倒木痕か

調査区南壁



- 1 盛土
- 2 暗灰黄色(2.5Y5/2)中砂混砂質シルト(細礫少量含む) …旧耕土
- 3 灰黄色(2.5Y6/2)極細砂混シルトに褐灰色(7.5YR5/1)砂質シルトのブロックが少量混じる
- 4 にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト混細砂～極粗砂に褐灰色(7.5YR5/1)中砂混シルトのブロックが混じる…整地土
- 5 明黄褐色(10YR6/8)シルト混細砂～極粗砂に灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルトがまだらに混じる…整地土

- 6 明黄褐色(10YR6/6)中砂～粗砂混シルトに灰黄色(2.5Y6/2)砂質シルトのブロック、褐灰色(7.5YR5/1)砂質シルトのブロックが混じる…整地土
- 7 明黄褐色(2.5Y7/6)細砂～極粗砂混砂質シルトに褐灰色(7.5YR5/1)中砂混シルトのブロックが混じる…整地土
- 8 灰黄色(2.5Y6/2)極細砂混シルトに明褐色(7.5YR5/6)細砂混シルトのブロックが混じる…整地土
- 9 灰黄色(2.5Y6/2)極細砂混シルト(粗砂少量含む) …旧耕土
- 10 明黄褐色(10YR6/6)細砂混粘土質シルト…地山

- a にぶい褐色(7.5YR5/3)極細砂混シルト…風倒木痕
- b 褐灰色(7.5YR4/2)細砂～中砂混シルト…遺構埋土
- c 褐灰色(7.5YR5/2)細砂～中砂混シルトに明黄褐色(10YR7/6)砂質シルトのブロックが混じる…SK137 埋土
- d にぶい褐色(7.5YR5/3)細砂～中砂混シルト…遺構埋土



図7 調査区断面図



写真 75 調査区北壁土層断面 (南東から)



写真 76 調査区北壁土層断面 (南西から)



写真 77 北西拡張区西壁土層断面 (東から)



写真 78 調査区西壁土層断面 (東から)



写真 79 南西拡張区北壁土層断面 (南から)



写真 80 南西拡張区西壁土層断面 (北東から)



写真 81 南西拡張区東壁土層断面（西から）



写真 82 調査区南壁土層断面（北西から）



写真 83 調査区南壁土層断面と博物館実務実習の様（北東から）

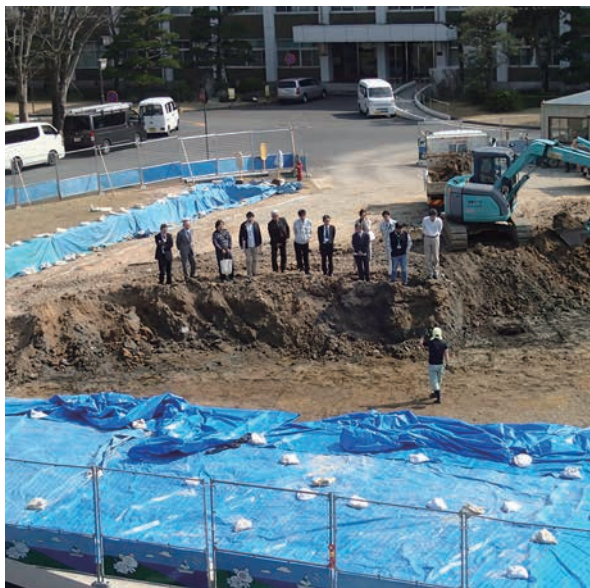


写真 84 第7回埋蔵文化財資料館専門委員会(北から)



写真 85 6月12日作業風景(西から)



写真 86 6月22日作業風景(北西から)



写真 87 7月20日作業風景(東から)



写真 88 7月28日現地説明会の模様(東から)



写真 89 7月28日現地説明会の模様(南西から)

(4) 遺構

調査区全域で検出した遺構の総数は、竪穴式住居跡4棟、掘立柱建物跡2棟、土壇137基、ピット525基、溝48条、自然河川1条、風倒木痕13箇所である。ここでは、代表的な遺構を取りあげる。

[竪穴式住居跡]

1号竪穴式住居跡(図8～10、写真90～106)

検出された4棟の竪穴式住居跡は調査区の中央から北側に偏在する。その中で1号竪穴式住居跡は最も東に立地しており、予備発掘調査時に部分的に検出されていたが(北東壁部分:写真48・49)、推定通り竪穴式住居跡であることが確認された。南東部が大きく削平を受けており、住居内埋土は遺存せず、わずかに地山に壁溝と柱穴(Pit)が遺存する状態であった(写真90・91)。この内SK111とPit349、523、524は住居に伴わない遺構で、SK110とPit435、436は不明であるが住居に伴わない可能性が高い。北西部に残る埋土は薄く、2～5cmほどであり(図9、写真92)、遺物は主にその上面にて出土した。

住居の平面形に関しては、削平を受けている南東部の解釈が問題となる。住居内土壇SK3の南東に続く溝は位置と方向から1号竪穴式住居跡の壁溝と考えられるが、その東に位置するSD43はそれに連続していない。遺構の重複(住居の建て替え)とも考えられるが、明確な切り合い関係を示しておらず、他に対応する溝等が確認できないこと、埋土の土質も共通することから、ここでは南東側を拡張させた方形竪穴式住居跡と見なしておきたい。

住居の規模は、壁溝外端間の距離で北東-南西は572cm、北西-南東は520cm、拡張部を含めると672cmを測る。住居の方向を見ると、検出された他の3棟の南北軸はほぼ真北を向くか、北を軽く東西に振るのに対し、1号住居址はN40° Wとなっている。

住居の構造に関しては、住居平面形を掘り込んだ後に壁溝を設けたのであろうが、住居北部については何らかの理由で一度地山を削った後に埋め戻して床面を整え、壁溝を掘り込んでいる(写真100)。北西壁溝と南西壁溝の内部外端には壁板を立てたとみられる溝が設けられていた(写真96)が、他の壁溝内には確認できなかった。住居内Pit5・6はその側柱であろう。支柱は4本であり、支柱穴1-2間は28cm、支柱穴1-3間は263cmを測る。支柱穴4は共同溝の掘削により一部を残し大破している(写真99)。支柱穴の深さは1が53cm(写真93)、2が54cm(写真94)、3が51cm(写真95)を測る。径は1が上部で15cm、下部で9cm、2が上部で14cm、下部で9cm、3が上部で18cm、下部で8cmを測る。抜き取り痕は見られず、柱は住居廃棄時に上部で切断されたのだろう。床面の標高は20.15mを測る。なお、住居内に造り付け竈や地床炉などは確認されていない。

SK3は南西壁の中央やや南東よりに設けられた住居内土壇である。中央広場整備のための土管暗渠埋設工事により遺構の西側が破壊されており、北西側壁溝との関係が不明確となっているものの、遺存部を見ると壁溝を掘り込んで設けられているように思われる。南東側壁溝とは接続および切り合い関係にないことから、建物入り口に設けられた住居廃棄時の祭祀遺構である可能性が考えられる。一辺68cm程度の平面隅丸方形土壇であったようで、内部から完形の土師器甕および脚柱部を人為的に欠失させた土師器高坏、高坏坏部に載せられた状態で口縁を欠失した土師器壺^{註1}が出土した(図9、写真98)。遺構の深さは最深部で28cmを測る。なお、甕の上位には土師器高坏が横倒しの状態で出土したが(写真97)、削平時に上半部が削られており、風化が著しかったこともあり、取りあげ洗浄後の器形復元が不能であった。

他の遺物は主に住居跡北部から出土している(写真91右上)。土師器甕(図8の8)は全周する口縁部のみ倒置状態で遺存しており、体部は一部を残し(図8の9)削平時に失われたと推定される。また、土師

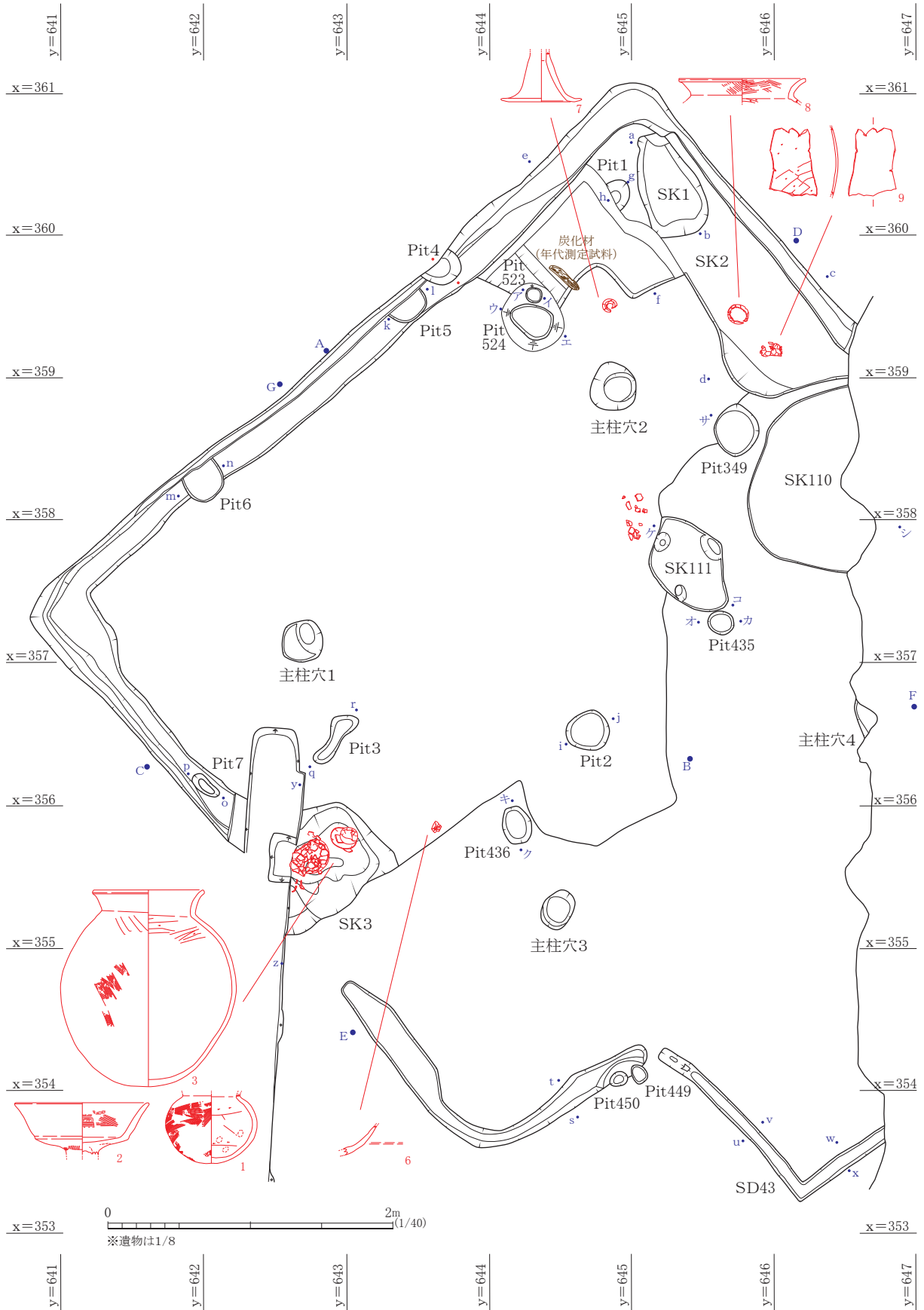


図8 1号竪穴式住居跡平面図

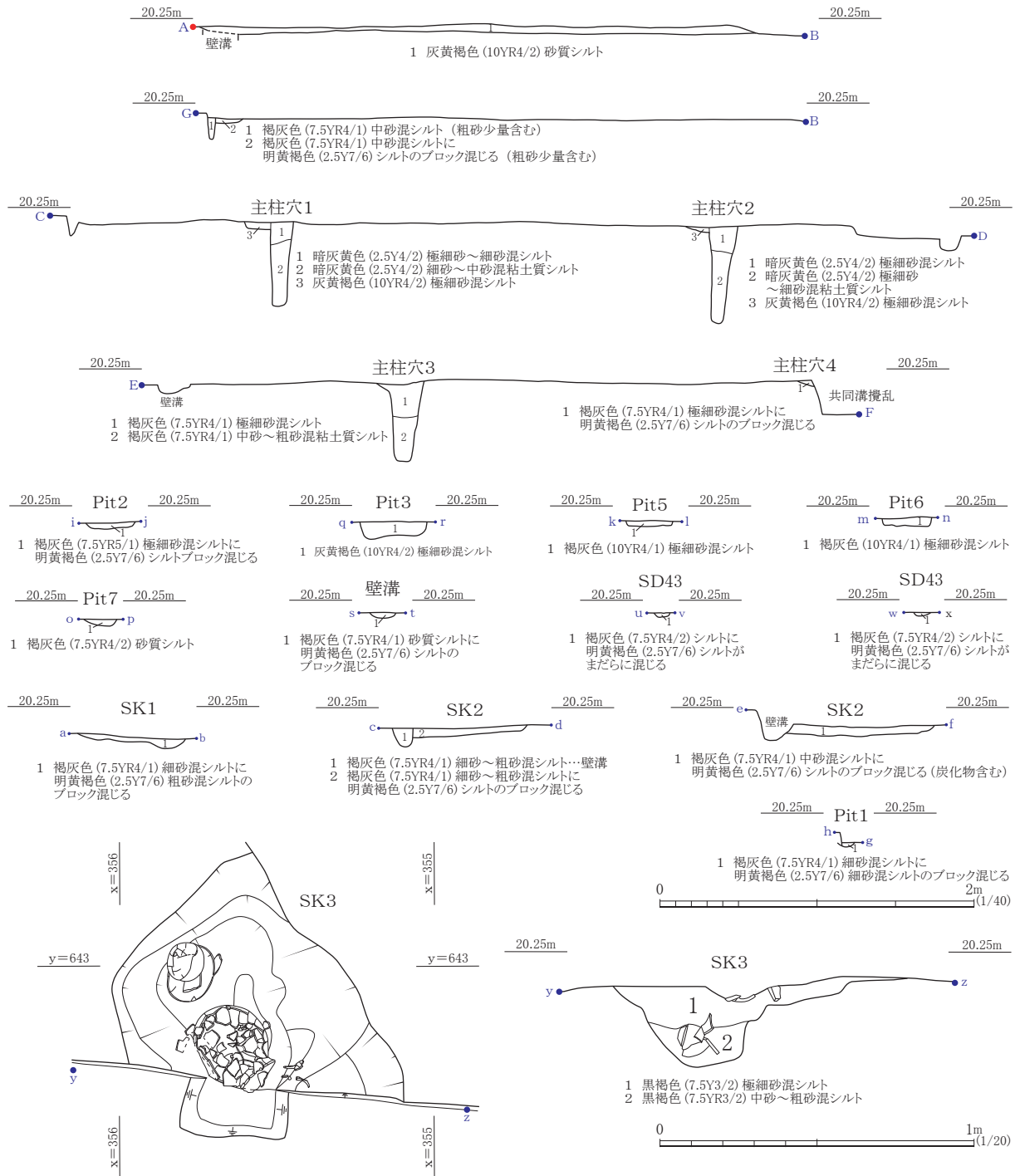


図9 1号竪穴式住居跡遺構平面図・断面図

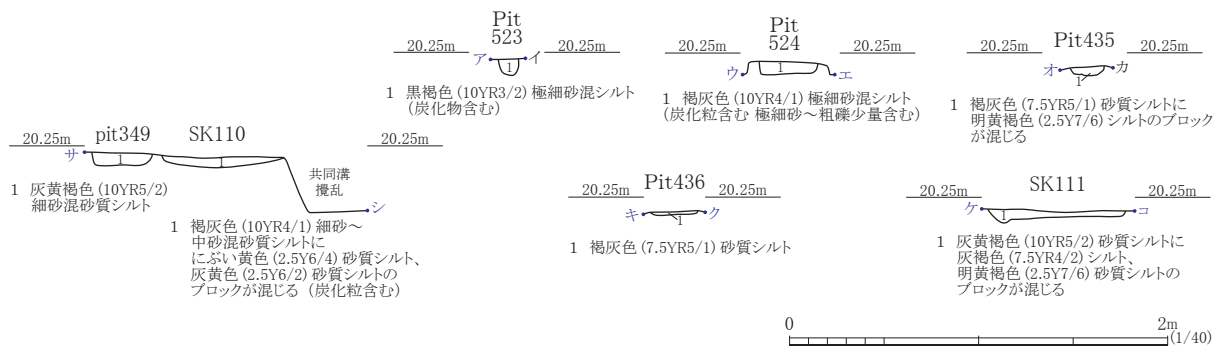


図10 1号竪穴式住居跡に伴わない遺構断面図

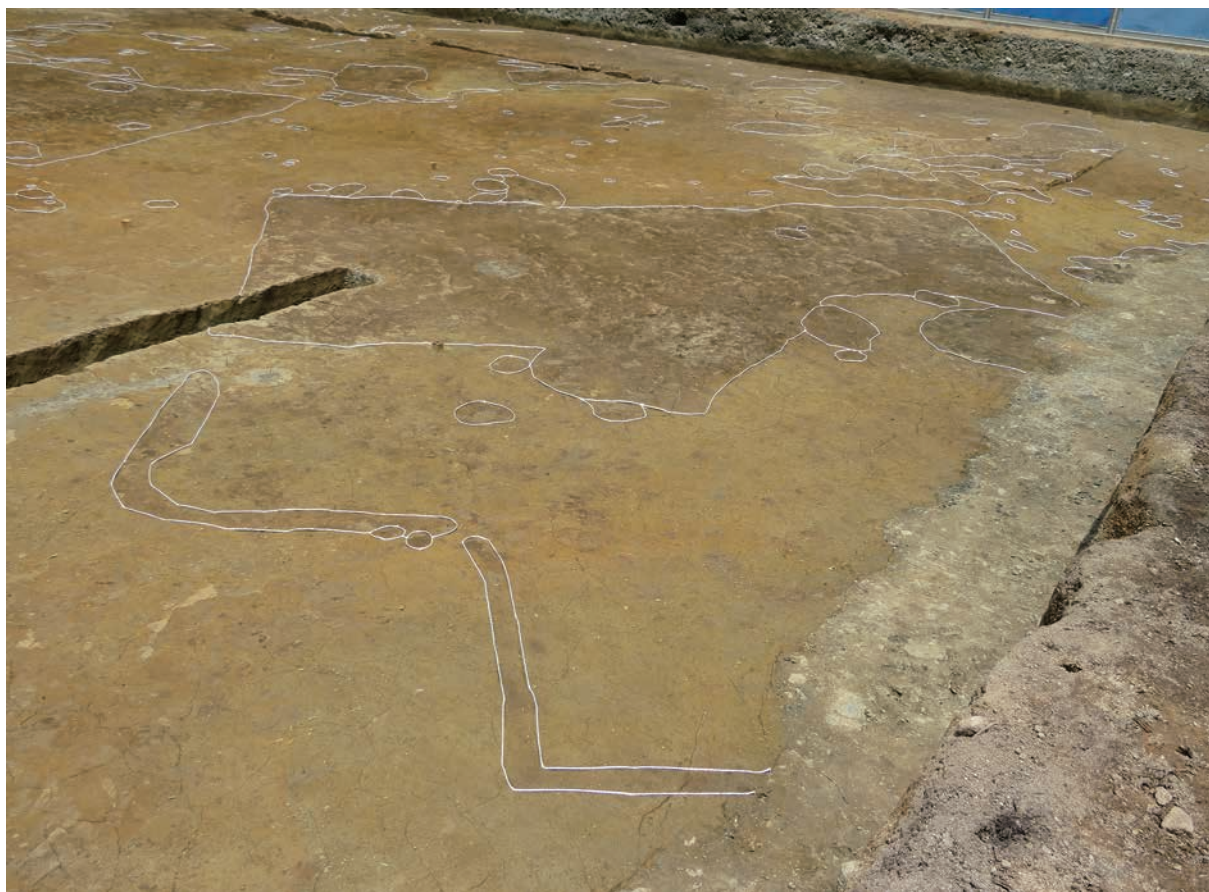


写真90 1号竪穴式住居跡検出状況(南東から)



写真91 1号竪穴式住居跡遺物出土状況(南東から)



写真 92 1号竪穴式住居跡埋土半裁状況(南西から)



写真 93 主柱穴1半裁状況(南東から)



写真 94 主柱穴2半裁状況(南東から)



写真 95 主柱穴3半裁状況(南東から)



写真 96 北西面壁溝断面(南西から)



写真 97 SK3土層断面(西から)



写真 98 SK3遺物出土状況(南東から)



写真 99 支柱穴4半裁状況(南東から)



写真 100 SK1・2半裁状況(南西から)



写真 101 Pit2半裁状況(南東から)



写真 102 Pit3半裁状況(南東から)

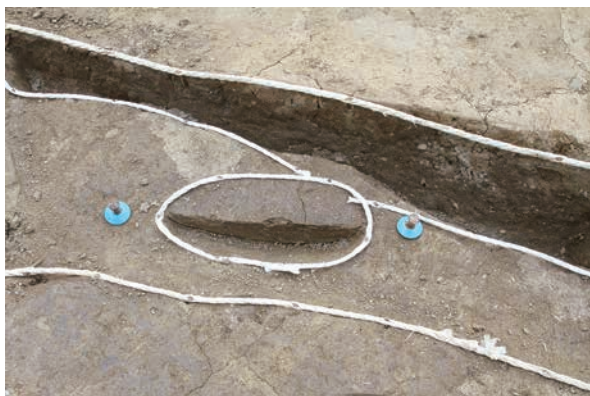


写真 103 Pit7半裁状況(南東から)



写真 104 SK110 半裁状況(南西から)



写真 105 1号竪穴式住居跡完掘状況(南東から)



写真 106 1号竪穴式住居跡完掘状況(北東から)

器高坏脚柱部(図8の7)の西隣に炭化材が出土したことから、渡邊正巳氏(文化財調査コンサルタント株式会社)に年代測定と樹種同定を委託した。結果については、本書の付篇に掲載している。

2号竪穴式住居跡(図12、写真107～118)

1号竪穴式住居跡西角部の東約2.4mに検出された住居跡である。検出時に住居内埋土と推定される土(暗褐色(10YR3/3)シルトに部分的に地山土(黄褐色(10YR5/4)シルトが混ざる)が認められたため(写真58・59)、四分法にて掘削を行ったが、結果的に埋土や張床ではなく、荒れた地山(床面)と認定されるもので、後世の削平により床面だけが遺存した住居跡であることが判明した。南壁の中央やや西側がSK4により切られているほかは遺存状態が良好である。

平面形は北東隅部が不整形にやや北に拡張した方形を呈しており、南北軸はN14° Wである。規模は西壁で347cm、東壁で405cm、南壁で398cmを測り、やや小型の住居跡である。

住居の構造に関しては、壁溝を設けていないことが他の住居跡と異なる特徴と言える。支柱は住居のほぼ中央、東西2箇所(支柱穴1・2)に設けられている。支柱穴1-2間は168cmを測り、深さは1が59.5cm、2が49cmを測る(写真110・111)。径は1が上部で16cm、下部で8cm、2が上部で17cm、下部は掘削時に壁が崩落したらしく不整形円形となっており、18cmを測る。支柱穴1の底面に土器(土師器壺:図11の11)が存在したことから、2とともに地山ごと半裁して記録を行った(写真112・113)。1号竪穴式住居跡同様抜き取り痕は見られず、柱は住居廃棄時に上部で切断したのであろう。床面の標高は、1号竪穴式住居跡と変わらず20.15mを測る。その他の住居内遺構(SK1及びPit1～4)は、住居に伴うものかどうか不明であり、遺物も出土していない(写真114～117)。

北壁側のほぼ中央には長さ86cm、幅62cmの楕円形状に焼土が遺存していた。平面的な広がりであり、炉石なども確認されなかったが地床炉とみておく。明確な建物の入り口施設は検出されなかったが、地床炉の位置、支柱穴の配置から、南壁側に入り口が存在したのであろう。

大きく削平を受けているためか、遺物の遺存状況は極めて不良で、住居跡北西部に散漫に検出されるに止まった。いずれも小破片となっていたが、器種の分かるものとして土師器高坏(図11の13)と土師器甕(図11の14)が存在する。

3号竪穴式住居跡(図13・14、写真119～144)

2号竪穴式住居跡の南西約5.2mに検出された住居跡である。1・2号同様に大きく削平を受けており、住居内埋土はわずかに2～6cmが遺存するのみであった(写真119・120)。遺跡の重複関係を見ると、西壁の中央やや南側で一部SK4に切られている他は、いずれも住居跡が他遺構を切る状況であった。

住居の平面形は北東隅をやや拡張させているがほぼ長方形を呈しており、南北軸はN8° Wである。規模は南北で332cm、東西で312cmを測り、4棟の中では最も小型の建物となる。

住居の構造に関しては、北壁から東壁にかけ、断面逆台形で深さが5～8cm程度の壁溝が巡らされているが、北東隅で途絶しており、間に柱穴が配されている。壁溝埋土からは土師器高坏など土器が少量出土している。住居内からはピットが多数検出されているものの、1・2号竪穴式住居跡とことなり、深い柱穴は存在しないことから、住居四隅に検出されたピットを支柱穴と判断した(図13の支柱穴1～4)。支柱穴1-3間は246cm、支柱穴2-3間は254cm、支柱穴2-4間は220cm、支柱穴1-4間は262cmを測る。支柱穴1の平面形は径40cmの円形を呈しており、深さ8～10cmを測る(写真125)。支柱穴2は二段掘りされたもので、上段の平面形は長軸39cm、34cmの楕円形を呈しており、下段も長軸11cm、短軸8cmの楕円形を呈している。深さは12cmを測る(写真126)。支柱穴3は住居廃棄(柱抜き取り)時に祭祀行為が行われたようで、平面形は径43cmの不整形円形を呈しており、内部からは破砕した状態で1個体の土師器甕(図13

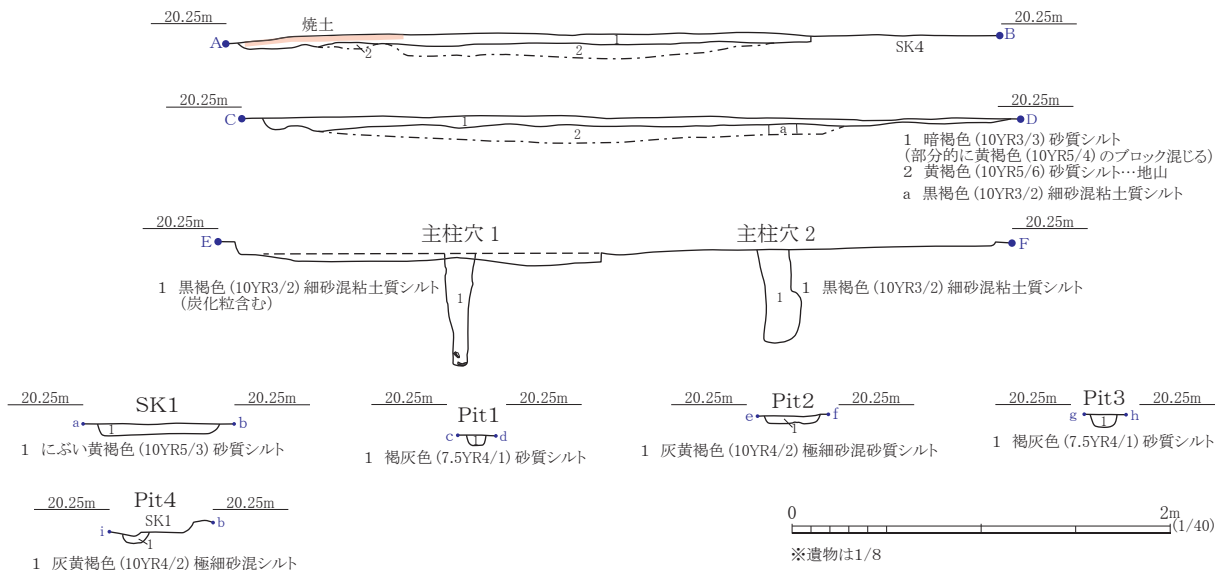
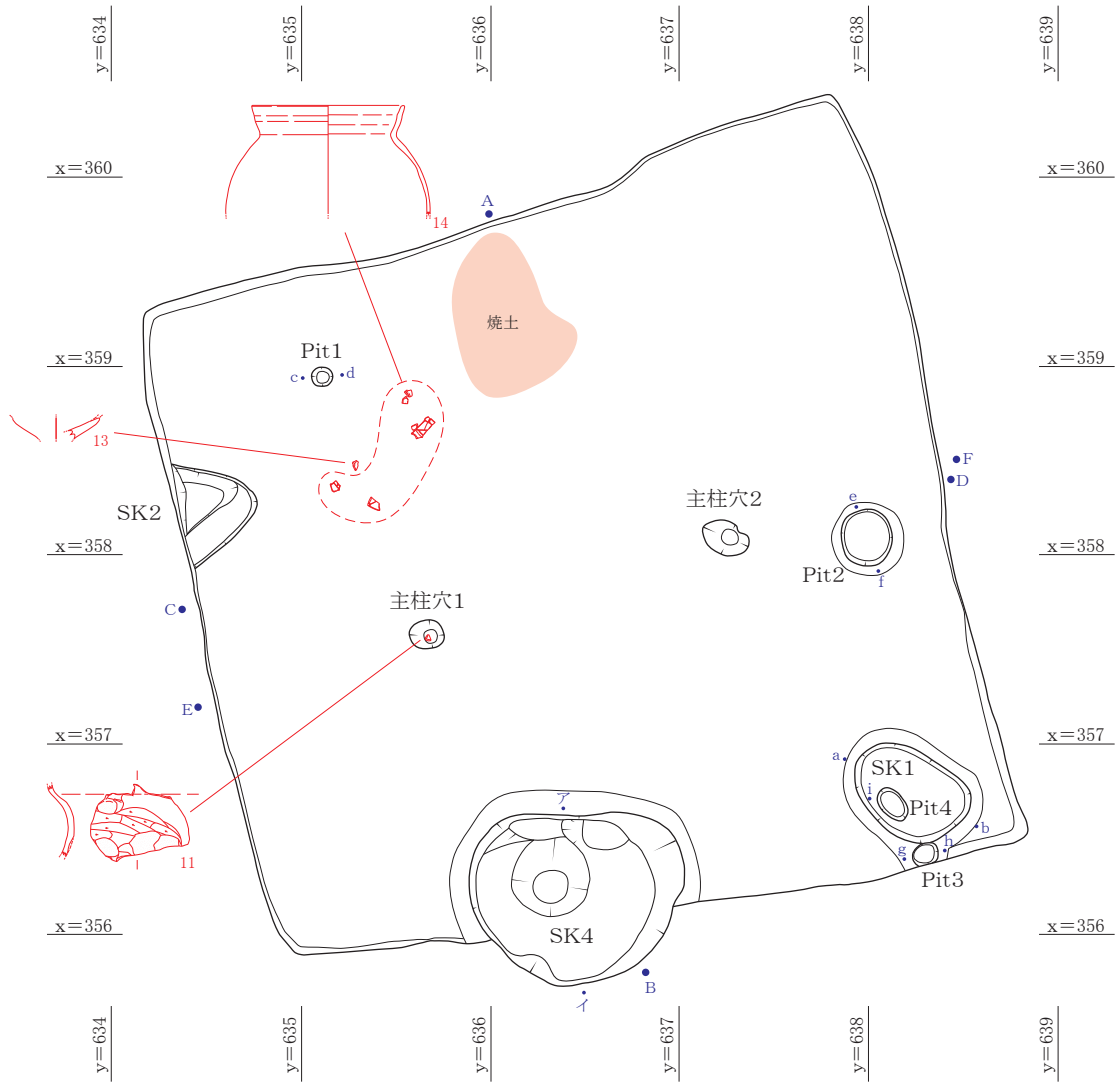


図 11 2号竪穴式住居跡平面図・断面図

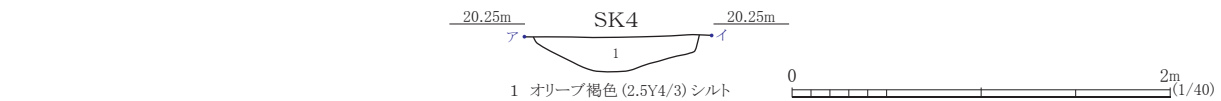


図 12 2号竪穴式住居跡に伴わない遺構断面図



写真 107 2号竪穴式住居跡床面断面 (南西から)



写真 108 2号竪穴式住居跡床面断面 (北東から)



写真 109 2号竪穴式住居跡遺物出土状況(北西から)



写真 110 主柱穴1半掘状況(南から)



写真 111 主柱穴2半掘状況(南から)



写真 112 主柱穴1完掘状況(南から)



写真 113 主柱穴2完掘状況(南から)



写真 114 SK1・Pit4半裁状況 (南西から)



写真 115 Pit1半裁状況 (南から)



写真 116 Pit2半裁状況 (西から)



写真 117 Pit3半裁状況 (南から)



写真 118 2号竪穴式住居跡完掘状況 (南東から)

の15)が出土した(写真122・123)。遺構深度は27cmを測る。主柱穴4の平面形は長軸28cm、短軸25cmの楕円形を呈しており、深さは5cmを測る(写真127)。床面の標高は、1・2号竪穴式住居跡よりわずかに低下し、20.05～20.10mを測る。

西壁のほぼ中央から床面中央にかけて、最大長152cm、最大幅118cmの範囲で焼土が遺存していた。2号竪穴式住居跡同様平面的な広がり、掘り込みや炉石などの構造物は確認されなかったが、地床炉とみておく。焼土は西壁溝にかかっていないことから、壁溝と炉の間に何らかの構造物が存在したと推定される。Pit10(写真137)とPit13(写真140)は焼土を挟み設けられていることから、炉に関係する支柱と思われる。東壁中央部には遺構が密集しているが、建物入り口に関連する施設の可能性がある。

住居跡内遺物は希薄であったが、主柱穴1周囲の埋土中にやや集中を見せており、土師器の小型壺(図13の20)と石英塊(図13の98)が出土している(写真124)。

そのほか、発掘調査終了直後に屋内作業として焼土(炉跡)サンプルの洗浄を実施していたところ、径3mmの風化ガラス(風化滑石^{註3}か)を確認した。3号竪穴式住居跡はすでに埋め戻しが進行していたが、重機により再掘削を行い、焼土全体を土嚢詰めして持ち帰り、洗浄を行った。その結果、新たに小玉2点が確認された(図33、写真204)。

当住居跡については、その平面積の小ささ(10.36㎡)から、検出当初より一般家屋ではなく、作業場、工房などの可能性が考えられた。調査の結果、床面西部に平面積の大きな地床炉(約1.5㎡)と、他の住居跡と異なる柱構造が確認された。他の住居内遺構の配置を見ても、日常生活は困難と推定されることから、やはり住居以外の施設を想定しておきたい。

4号竪穴式住居跡(図15・16、写真145～169)

3号竪穴式住居跡の北北西約5.8mに検出された住居跡である。南西隅が噴水プール設置時に破壊されているものの、丘陵の下位に設けられていたため、他の住居跡に比べると遺存状態が良く、住居壁肩部から8～15cmの深さに床面が遺存していた(写真147・148)。遺構の北半部は遺物包含層に覆われていた(写真59・62)ことから、仮に上部が削平を受けているのであれば、8世紀以降の早い段階であったと推察される。また、住居跡中央には埋土を掘り込む形でSK44が形成されている。この遺構により住居床面が大破しているのであるが、埋土に含まれていた時期の比定が可能な遺物には、当住居跡に所属していたと推定される遺物しか存在しなかったことから、住居廃絶からあまり時期をおかずの所業と考えられる。その他の周辺遺構(Pit137・138など)は、いずれも当住居が切り込む状態で検出された(写真145～147)。

住居の平面形は長方形を呈しており、南北軸はほぼ真北を向いており、N4° Eである。規模は南北で424cm、東西で489cmを測り、1号竪穴式住居跡に次ぐ大きさの建物である。

住居の構造に関しては、南壁中央と西壁の中央北側に焼土を確認した。南壁焼土は北端がSK44により削られているものの、残存長120cm、最大幅108cmの範囲に遺存しており、浅い掘り込みしか確認されなかったが地床炉とみておく。西壁焼土は南北46cm、東西35cmの楕円形を呈している(写真154)。

破壊された南西部は不明であるが、四方の壁は上端幅20～30cm、深さ5cm程度の断面逆台形の浅い壁溝に取り囲まれている。3号竪穴式住居跡と異なり、南壁中央の炉石や西壁の焼土は、壁溝を覆う形で壁際にまで及んでいる。南北方向の断ち割りでは、断面に壁溝を確認することができなかったことから、壁溝は炉の手前で途絶していたものと思われる。また、SK44により半壊しているが、北壁中央には壁溝と連結する住居内土壌(SK1)が設けられている。埋土からは高坏脚柱部片(図15の21)をはじめとする土師器小片が出土している。壁溝埋土からは土師器甕口縁部など少量の土師器が出土している。

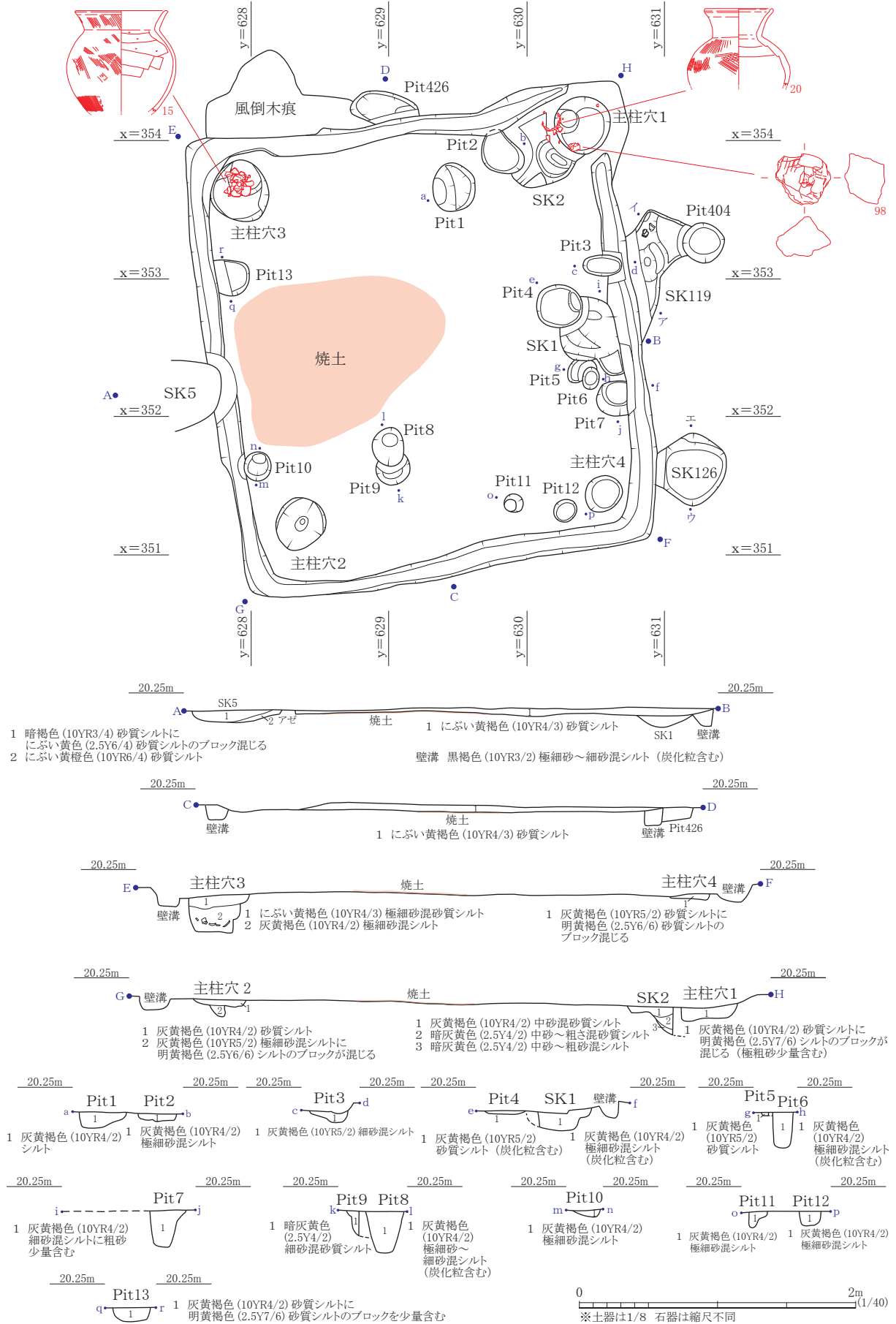


図 13 3号竪穴式住居跡平面図・断面図

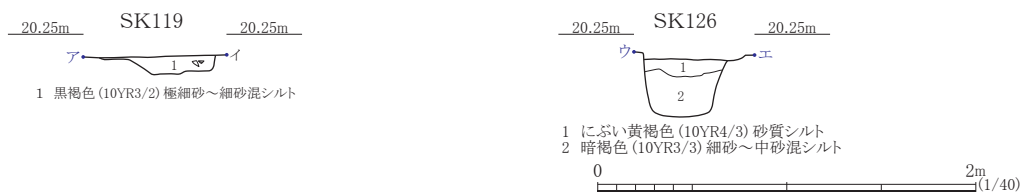


図 14 3号竪穴式住居跡に伴わない遺構断面図



写真 119 3号竪穴式住居跡埋土断面(南西から)



写真 120 3号竪穴式住居跡埋土断面(北東から)



写真 121 3号竪穴式住居跡住居内遺構検出状況(西から)



写真 122 主柱穴3半裁状況 (南西から)



写真 123 主柱穴3遺物出土状況 (南東から)



写真 124 住居跡北東部遺物出土状況 (北東から)



写真 125 主柱穴1半裁状況 (南東から)



写真 126 主柱穴2半裁状況 (南東から)



写真 127 主柱穴4半裁状況 (南西から)



写真 128 SK1半裁状況 (南東から)



写真 129 SK2半裁状況 (南西から)



写真 130 Pit1半裁状況 (南東から) 写真 131 Pit2半裁状況 (南東から) 写真 132 Pit3半裁状況 (南から)



写真 133 Pit4半裁状況 (南西から) 写真 134 Pit6半裁状況 (南から) 写真 135 Pit7半裁状況 (西から)



写真 136 Pit8・9半裁状況 (西から) 写真 137 Pit10 半裁状況 (東から) 写真 138 Pit11 半裁状況 (南から)



写真 139 Pit12 半裁状況 (南から) 写真 140 Pit13 半裁状況 (東から) 写真 141 SK119 完掘状況 (東から)



写真 142 3号竪穴式住居跡完掘状況 (北東から)



写真 143 3号竪穴式住居跡完掘状況 (南西から)



写真 144 3号竪穴式住居跡完掘状況 (北西から)

なお、当住居跡の調査途中に、山口大学生協同組合(以下「山大生協」)より設計変更による当住居跡の埋め戻し保存が提案されたことから、南西側の壁溝の一部や壁溝内遺構(Pit8)などは未掘削のまま残すことにした。

当住居の主柱は、住居中央に東西に並んでいる。主柱穴1は南東端部をSK44により破壊されているものの、長軸40cm、短軸26cmの隅丸方形を呈しており、深さ23cmを測る(写真155)。埋土から土師器甕の体部片が出土している。主柱穴2もSK44により上部を破壊されている。遺存部は径18cmの円形を呈し、残存深度は13.5cmであるが(写真156)、穴底の標高は両者ともに19.65mを測る。主柱穴1-2間は182cmであり、床面の標高は、3号竪穴式住居跡よりわずかに低下し、19.9~19.95mを測る。

住居北東および北西の壁溝内に配されたPit1・3(写真157・159)や壁溝近くに配されたPit4~7(写真160~163)は副柱穴と思われる。一方で噴水プールにより破壊された住居南西部にて検出された土壙(調査では住居の副柱穴である可能性を考慮して住居内Pit2とした)は、果たして住居に伴うものであるか。破壊により平面形態は不明瞭となっているものの、一辺80cm程度の隅丸方形を呈していたと推定され、住居床面からの深さは49cmを測る。1号竪穴式住居跡SK3や3号竪穴式住居跡主柱穴3と同様に、住居廃棄時の祭祀に関連する遺構である可能性も残すが、遺物は土師器体部片1点を見るに止まっている。

住居跡内の遺物には土師器甕と高坏、そして初期須恵器甕と高坏、石器が見られ、小破片で散乱する状態であった(図15、写真148~154)。前述したようにSK44埋土の遺物は元来4号住居跡に所属していたとみられ、複数の個体と接合した。そのような状況下においても、遺物分布の状況を見ると、土器は南半部の炉跡付近から南西部に集中を見せており、東半部は希薄であることが分かる。中でも土師器甕は南半部に集中的に出土している。初期須恵器に関しては、甕が住居跡の北西部床面(図15の45-4)に、高坏が北東部の東西トレンチ(断ち割り)から出土しているが、多くの破片はSK44埋土から出土していることから、元来は住居跡の中央部付近に残されていたのであろう。

山口県内で竪穴式住居跡からの初期須恵器出土は希有の事例であり、前述のごとく調査中に山大生協より当住居跡の現地埋め戻し保存の申し出があったことから、埋め戻し時に4号住居跡を高さ50cmまで真砂土で埋め、遺構を保護することになった(写真167・168)。4号住居跡上は現在福利厚生施設の西側通路となっており、通路には建物跡の外郭線がマーキングされ、その横には吉田遺跡とともに当地で発見された竪穴式住居跡群を解説する看板が設置されている(写真169)。

[調査区南西部の遺構群]

調査区全域で137基の土壙、525基のピットを検出した。大多数は掘り込みが浅く、埋土に遺物を含んでいない遺構であったが、調査区南西部にて注意すべき遺構が確認されていることから、報告しておく。

[掘立柱建物跡]

掘立柱建物跡1(図18・19、写真71・171・172)

1間×1間からなる建物跡で、Pit300・318・325・350で構成される。南北軸はN10°W、柱間の距離はおよそ230cmで正方形を呈している。比較的深い柱穴で構成されており、Pit300は16.5cm、Pit318二段掘りで23cm、SK106を切るPit325は41cm(写真172)、Pit350は二段掘りで28cmの深度を測る(写真171)。Pit300埋土からは土師器小片が出土しており、Pit325からは土師器鉢の口縁部片が出土している(図30の48)。Pit318とPit350は風倒木痕2を掘り込んでいる。

掘立柱建物跡2(図18・20、写真173~177)

調査区南壁付近、掘立柱建物跡1の南南西3.1mに検出された建物跡である。桁行2間、梁間2間の

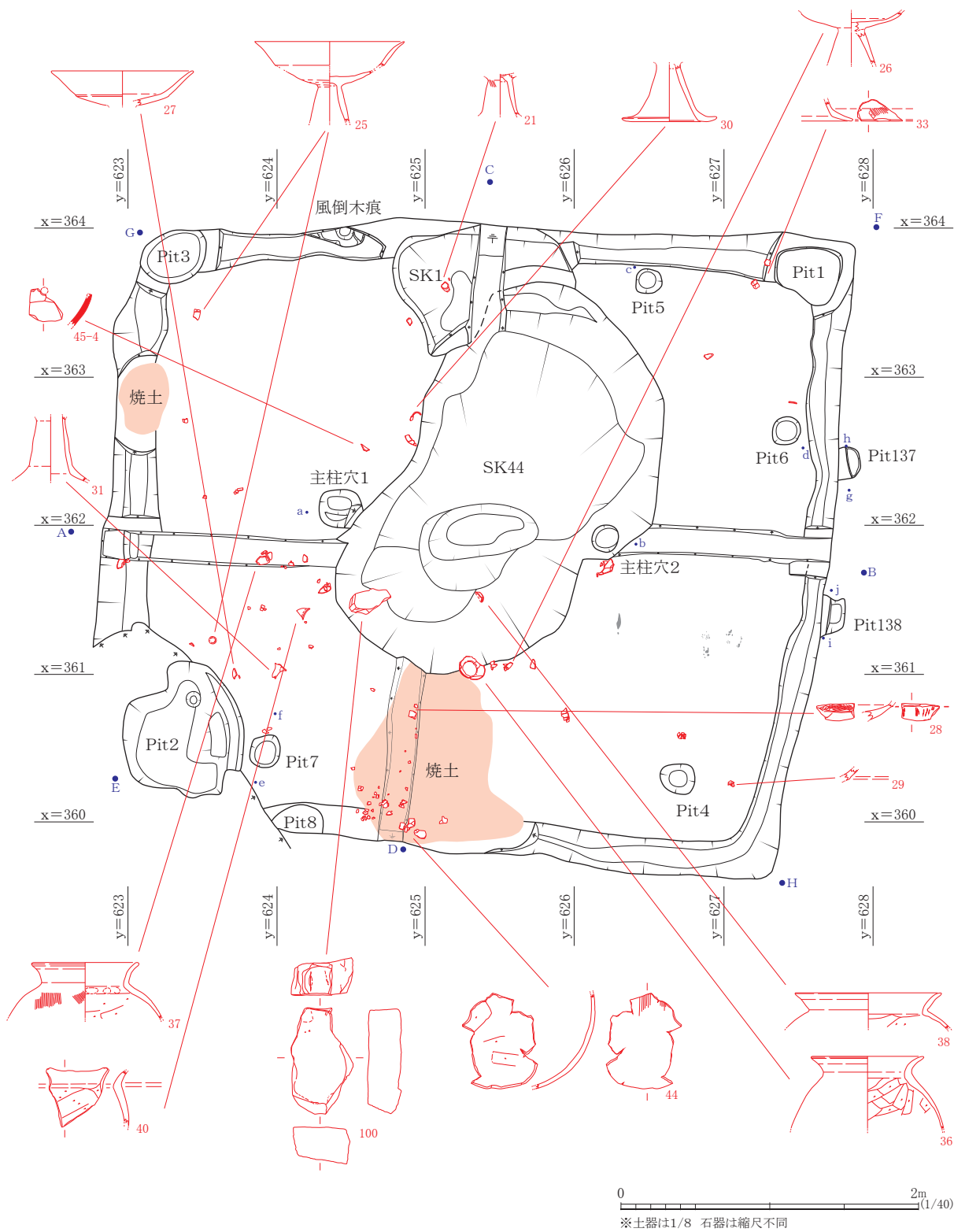


図 15 4号竪穴式住居跡平面図

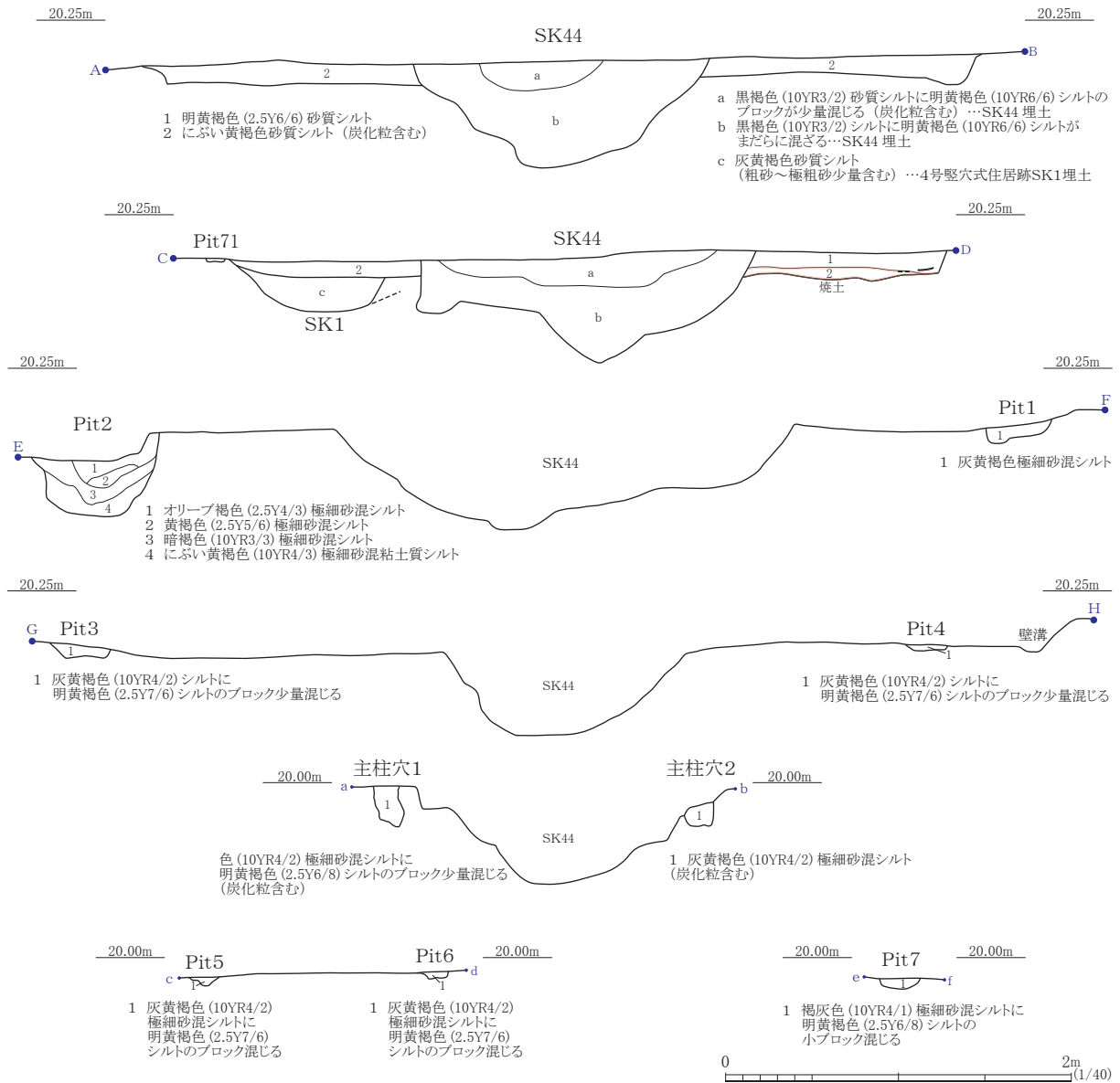


図 16 4号竪穴式住居跡断面図

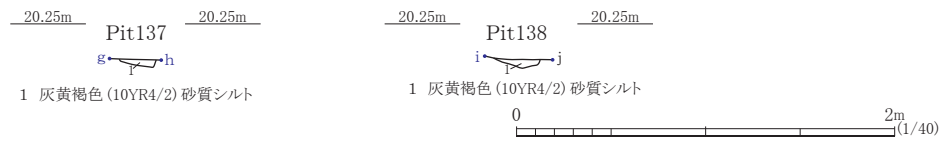


図 17 4号竪穴式住居跡に伴わない遺構断面図

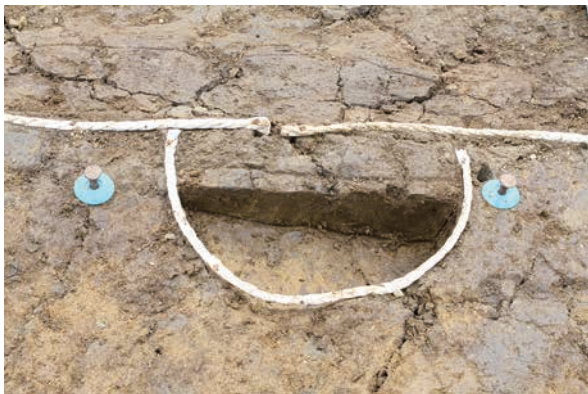


写真 145 Pit137 半裁状況 (東から)



写真 146 Pit138 半裁状況 (東から)



写真 147 4号竪穴式住居跡検出状況 (南西から)



写真 148 4号竪穴式住居跡埋土断面 (西から)



写真 149 4号竪穴式住居跡埋土断面 (北東から)



写真 150 4号竪穴式住居跡遺物出土状況（北西から）



写真 151 南西部遺物出土状況（南から）



写真 152 南西部遺物出土状況（西から）



写真 153 南東部遺物出土状況（東から）



写真 154 北西部焼土・遺物出土状況（西から）



写真 155 支柱穴1半裁状況(北から) 写真 156 支柱穴2半裁状況(北から) 写真 157 Pit1半裁状況(南東から)



写真 158 Pit2半裁状況(南東から) 写真 159 Pit3半裁状況(南西から) 写真 160 Pit4半裁状況(南西から)



写真 161 Pit5半裁状況(南西から) 写真 162 Pit6半裁状況(南西から) 写真 163 Pit7半裁状況(東から)



写真 164 4号竪穴式住居跡完掘状況(南西から)



写真 165 4号竪穴式住居跡完掘状況 (北東から)



写真 166 4号竪穴式住居跡完掘状況 (北西から)



写真 167 4号竪穴式住居跡埋め戻し保存作業状況 (南西から)



写真 168 4号竪穴式住居跡埋め戻し保存作業状況 (西から)



写真 169 4号竪穴式住居跡の現状 (南西から)

総柱建物跡とみられ、Pit285・286・299・305・307・308・525とSK98で構成される。南北軸はN28° Wで、桁行を東北東-西南西に向けており、桁行1間が194cm、梁行1間が156cmを測る。建物跡の東隅は中央広場整備時に埋設された土管暗渠により消滅している。また、Pit525は風倒木痕1により見落としており、風倒木痕掘削時に検出したものである。こちらは浅深混合の柱穴で構成されており、最も浅いPit286は10cm(写真175)、最も深いPit299は48cmを測る。Pit305(写真173)から土師器小片1点が、SK98(写真174)から土師器小片4点が出土しているが、器種及び部位ともに不明である。

[土壌]

土壌(SK)1(図18・21、写真178・179)

掘立柱建物跡1の東北東3.6mにて検出された遺構である。平面形は径約200cmの円形で、検出当初より弥生時代の貯蔵穴と推察していたことから(写真178)、遺構掘削最初期に調査の手を加えた。その結果、上部の削平が著しいことが判明し、底面付近しか遺存していないことが明らかとなった。底面は緩やかに播鉢状に降下しており、最深部で深さ12cmを測る。埋土は上下2層に分層可能で、上層は炭化粒を含む暗褐色(10YR3/4)砂質シルト、下層はにぶい黄橙色(10YR6/4)シルトである(写真179)。埋土からは少量の弥生土器が出土するに止まった(図30の19・50)。

土壌(SK)99~101(図18・21、写真180~182)

掘立柱建物跡1と2の間に位置するやや大型の土壌群で、北西-南東に並んでいる。平面形態はいずれも長軸が北東-南西を向く楕円形を呈している。SK99は長軸66cm、短軸56cmで、二段掘りに掘り込まれて深さは25cmを測る。検出時、遺構中央に径20cmで埋土が変色していたことから、柱痕の遺存が期待されたが、複雑な埋土堆積の結果であることが判明した(写真182)。SK100は長軸70cm、短軸60cmで、深さは最深部で24cmを測る。埋土は底面に張り付くにぶい黄褐色(10YR4/3)シルトと、上部に埋積する灰黄褐色(10YR4/2)極細砂混シルトに分層される(写真181)。SK101は長軸68cm、短軸48cmを測る。南西から北東への二段掘りを呈しているが、遺構の重複の可能性がある。最深部で深さ8cmを測る。いずれも埋土に遺物は含まれていなかった。

土壌(SK)96(図18・21、写真187)

掘立柱建物跡2の南東内部に位置しており、平面形は長軸164cm、短軸117cmの不整長方形を呈している。南東から北西方向に二段掘りとなっており、浅い一段平坦面から急傾斜で二段底面に降下する。埋土4・5層のみ土壌化が進行していたことから(写真187)、柱材などが埋没していた可能性を残す。最深部で深さ29cmを測る。

土壌(SK)97(図18・21、写真188)

掘立柱建物跡2の北西に隣接しており、全長308cm、最大幅113cmで北北東-南南西に溝状に延びる。半裁掘削を行ったところ、埋土は上下に分層可能(上層:灰褐色(7.5YR4/2)細砂混粘土質シルト、下層:にぶい褐色(7.5YR5/3)細砂混粘土質シルト)であるものの明確な底面が現れず、下層がさらに東方下位に入り込んでいくことから風倒木痕と判断し(写真97)、掘削を中止した。

土壌(SK)113(図22、写真170)

調査区南西部、棚田形成により大きく削平されている範囲の調査区西壁付近で検出された遺構である(図6)。平面は長軸96.5cm、短軸50cmの長楕円形を呈しており、上面が強く削平されたため、検出時には遺構内の土器が露出していた。底面までの深度はわずか5cmで、埋土は褐灰色(7.5YR4/1)の均一な細砂混シルトであったが、遺構北端付近に円筒形状に地山質土(明黄褐色(10YR7/6)砂質シルト)がブロックで確認された(写真170)。土壌内からは土師器鉢(図22の52)と土師器甕(図22の53)が出土し

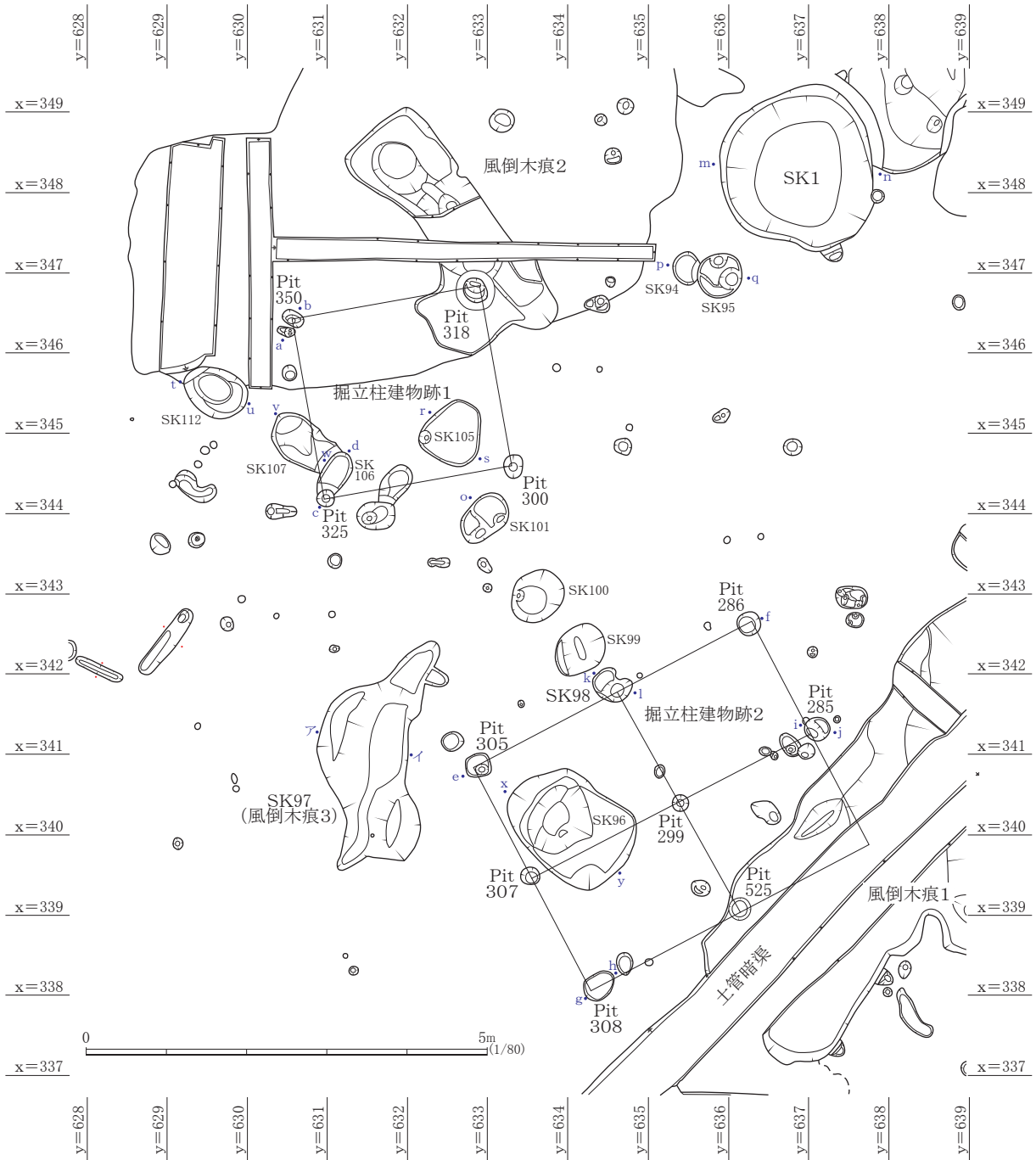


図18 調査区南西部遺構平面図

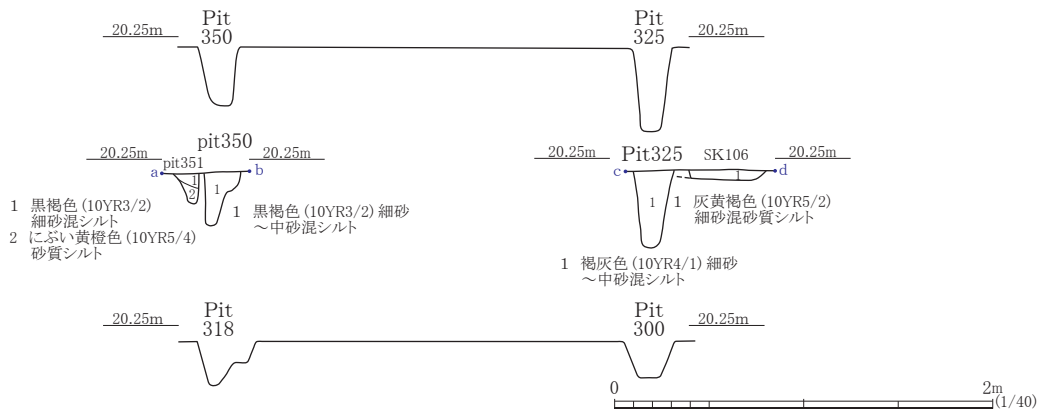


図19 掘立柱建物跡1断面図

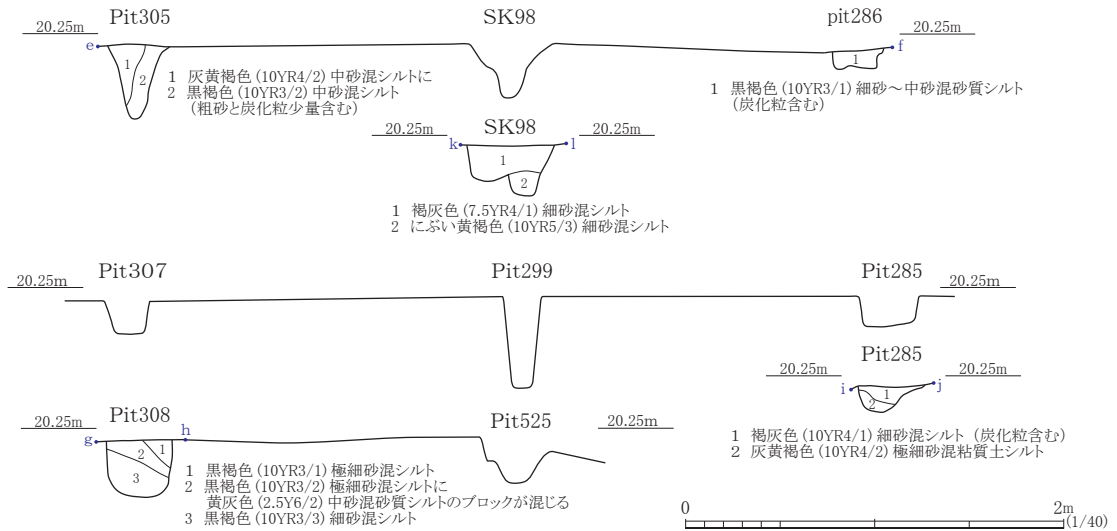


図20 掘立柱建物跡2断面図

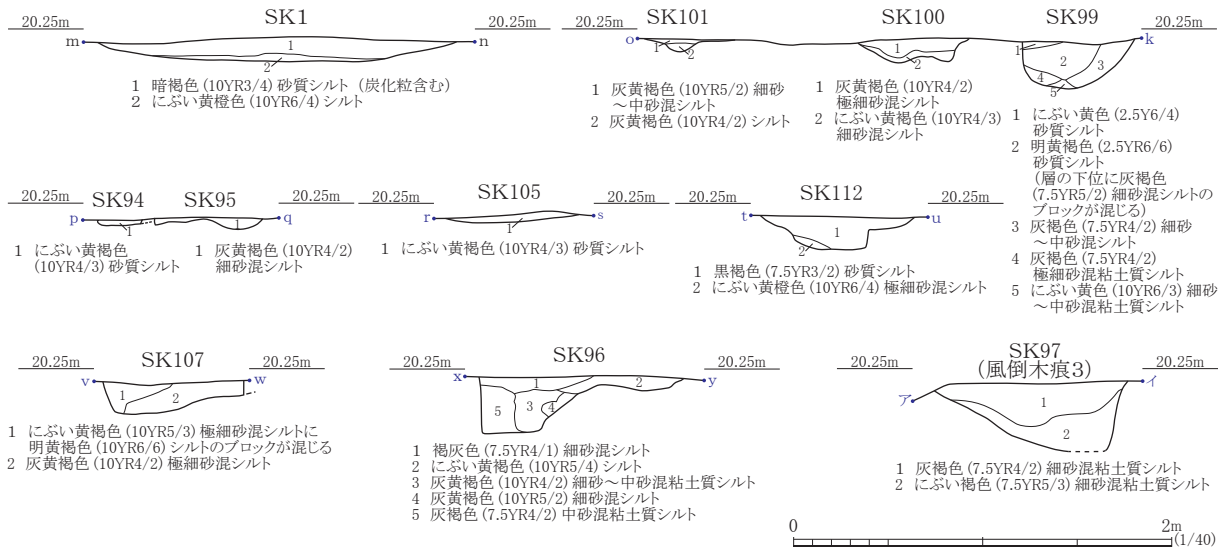


図21 調査区南西部遺構断面図

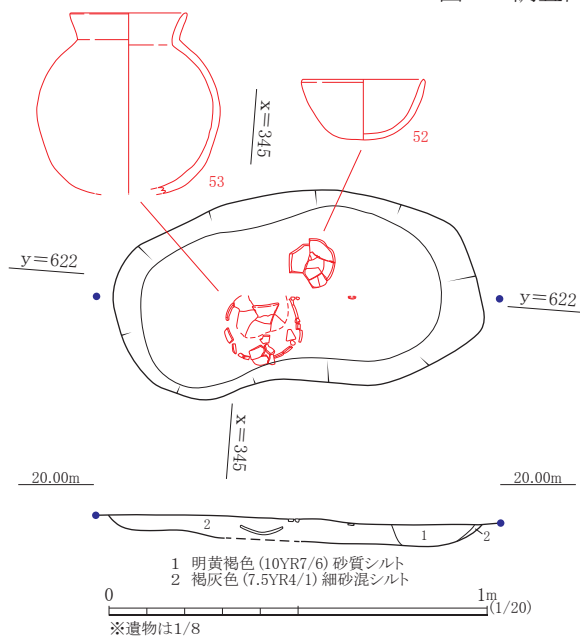


図22 SK113平面図・断面図



写真170 SK113半裁(遺物出土)状況(北東から)



写真 171 Pit350 (右) 半裁状況 (南東から)



写真 172 Pit325 半裁状況 (南東から)



写真 173 Pit305 半裁状況 (南東から)



写真 174 SK98 半裁状況 (南西から)



写真 175 Pit286 半裁状況 (南東から)



写真 176 Pit285 半裁状況 (南から)



写真 177 Pit308 半裁状況 (南東から)



写真 178 SK1 検出状況 (北東から)



写真 179 SK1 半裁状況 (南から)



写真 180 SK101 半裁状況 (南西から)



写真 181 SK100 半裁状況 (南西から)



写真 182 SK99 半裁状況 (南西から)



写真 183 SK94・95 半裁状況 (南から)



写真 184 SK105 半裁状況 (南西から)



写真 185 SK112 半裁状況 (南西から)



写真 186 SK107 半裁状況 (南西から)



写真 187 SK96 半裁状況 (南西から)



写真 188 SK97 半裁状況 (南から)

平成29年度 吉田構内(吉田遺跡)の調査

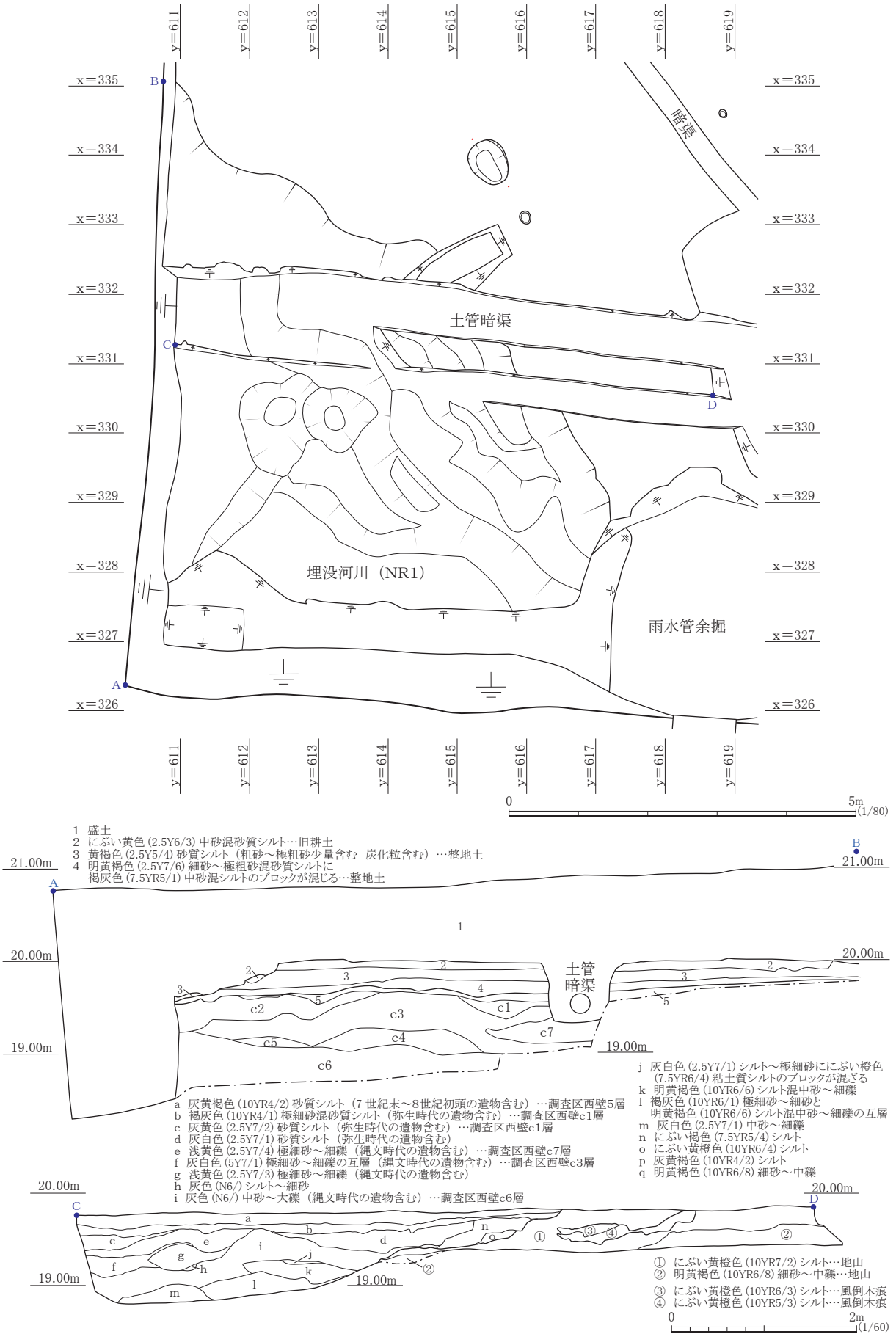


図 23 埋没河川 (NR1) 平面図・断面図



写真 189 NR1完掘状況 (南東から)



写真 190 NR1東西アゼ土層断面 (南東から)



写真 191 NR1東西アゼ土層断面 (南から)



写真 192 南西拡張区西壁NR1土層断面 (東から)

た。当遺構は竪穴式住居などの構造物の一部である可能性があることから、周辺遺構を精査したが、他に関連する痕跡を見つけることができなかった。

[自然痕跡]

自然河川(NR)1 (図23、写真66・74・189～192)

南西拡張区の南西部にて検出した河川跡である。南東から北西に走る河川の右岸を確認しており、東部と南部は既設雨水管により破壊されている。

調査区内での河川深度は最大約1.0mを測る。河川幅は、雨水管理設により大きく破壊されているために不明瞭であるが、残存部で右岸より2.5mの規模を有していること、底面に左岸側への立ち上がりが見られないことから、最低でも幅5mの規模は有していたものと推測される。また、地山とともに風倒木痕とみられるにぶい黄橙色(10YR5/3～6/3)シルトを削って河川が形成されていた。

河川埋土の基本層序は、

- 1層: 灰黄褐色(10YR4/2)砂質シルト～前述のように、河川が埋没した後の窪地に堆積した層で、調査では遺物包含層として掘削を行った。7世紀末～8世紀初頭の遺物を含む
- 2層: 褐灰色(10YR4/1)砂質シルト～土師器と弥生時代、縄文時代の遺物を含む
- 3層: 灰白色(2.5Y7/1)～灰黄色(2.5Y7/2)砂質シルト～弥生時代の遺物を含む
- 4層: 浅黄色(2.5Y7/3～7/4)～灰白色(5Y7/1)細砂礫、灰色(N6/)礫～縄文時代後～晩期の遺物を含む
- 5層: 4層下位の砂礫、シルト～無遺物層

であり、4層からは、縄文土器の碎片のほか石鏃、磨石、石錘などの石器も出土している。

以上の調査成果により、北東に古墳時代集落が営まれた時期には、河川の埋没はほぼ終えており、わずかに谷状の窪地として残されていたことが判明した。当河川の上流は、東北東約135m地点に位置

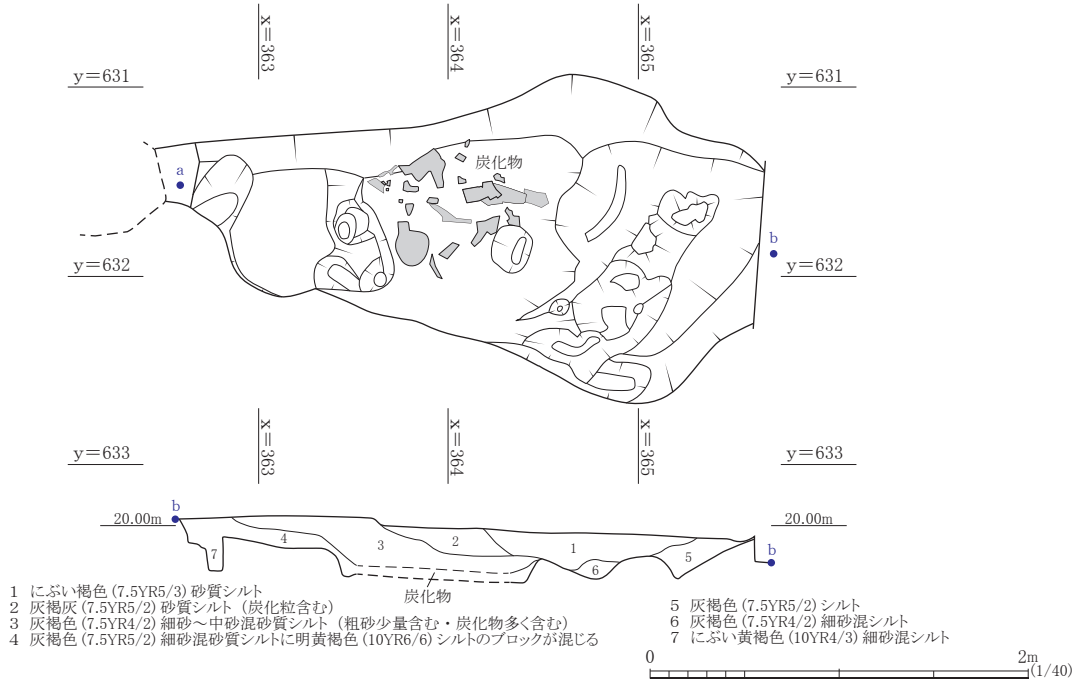


図24 SK71 平面図・断面図



写真193 SK71 半裁状況(南東から)



写真194 SK71 炭化物出土状況(東から)

する獣医学研究科棟敷地や、獣医学国際教育研究センター棟敷地にて検出された河川である可能性を有し、西約125m地点に位置する情報基盤センター棟敷地にて検出された河川に接続するものと推定される。

風倒木痕(図24、写真193～198)

遺構掘削開始期に煩悶したのが、大型の遺構に見えるが底面が追い切れず、埋土に遺物を含んでいない遺構群であった。徹底的にトレンチを入れて断面確認を試みたが、埋土状の褐色土が地山下に潜り込む様子が多数見受けられた(写真195～198)。調査途中にいずれも風倒木痕と認識し、以降実測図は残さず写真記録に止めることにした。

SK71は遺構掘削初期に記録に留めた風倒木痕である(風倒木痕9)。北端部を土管暗渠に、南端部を上層遺構に切られており、残存長320cm、最大幅164cmを測る。底面は複雑に凹みが生じているが明確な地山土に到達せず、炭化物が集中する地点が存在した(写真194)ものの、その下位には灰褐色(7.5Y5/2)が潜り込む層位となっていた。当遺構で注目されるのは、黒曜石の剥片(図36の101)が出土したことである。この遺物の出土と、風倒木痕を切り込む自然河川(NR1)の存在により、これらの風倒木群は、後期旧石器時代から縄文時代中期までの期間に生じた自然作用の痕跡と見なされる。なお、この黒曜石剥片以外、人類活動と結びつく遺物や痕跡は風倒木痕群から確認されていない。(横山)



写真 195 風倒木痕1土層断面 (北から)



写真 196 風倒木痕2断ち割り土層断面 (南西から)



写真 197 風倒木痕3断ち割り土層断面 (北から)



写真 198 風倒木痕8断ち割り土層断面 (南西から)

【註】

- 1) 出土時には腹部に焼成後穿孔とみられる小孔が存在した(写真98)ことから、土師器甕と考えられる。遺物取り上げ後、内部の土を除去する際に碎片化してしまい、復元時には孔の位置を確認できなくなってしまった。
- 2) 住居北西部はSK2およびSD8を切り込んでいるが、両者は風倒木痕と認められた(風倒木痕12)。
- 3) 現在まで科学分析を行っていない。また、最初に発見された小玉の折損原因は横山の不注意にある。修復と分析を終え次第報告を行いたい。
- 4) 豆谷和之(1994)「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X II』, 山口
横山成己(2018)「獣医学国際教育研究センター棟新営工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成25年度-』, 山口
- 5) 河村吉行(1488)「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VII』, 山口
- 6) 今回調査を実施した丘陵末端部は地質学的な見地から古期沖積面と見なされている(松尾征二(1992)「平川地区の地理的・地質的環境」, 山口市教育委員会(編)『山口市内遺跡詳細分布調査』山口市埋蔵文化財調査報告第1集, 山口)が、当調査区の東方約225m地点の洪積段丘上で実施した調査では、同じく風倒木痕とみられる遺構(SX6)埋土から、敲石の可能性のある丸石が出土しており(川島尚宗・横山成己(2021)「実習棟(動物病理解剖施設)新営その他工事に伴う予備発掘調査・本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成28年度-』, 山口)、関連が注目される。

(5)遺物(図25～37、写真199～207、表6～10)

[土器]

1号竪穴式住居跡出土土器(図25、写真199、表6)

1～3は1号竪穴式住居跡に伴うSK3から出土した土器。1は土師器甕の体部。甕の注口は、小破片が接合しきれず復元できなかった。体部最大径は中位よりやや上位にあり、径12.8cmを測る。体部外面には細かい斜め方向のハケが施されており、内面にはケズリと指頭圧痕が残る。2は土師器高坏の坏部。坏底部と口縁部との接合部の屈折は明瞭で、口縁部は外反気味にのび、端部は丸くおさめる。坏部内面及び基部外面にハケメが残る。3は土師器甕。復元口径は14.4cm。口縁部は短く外反し、端部は面をもつ。体部は倒卵形を呈し、最大径は24.8cmを測る。全体的に摩滅が著しく不明瞭ではあるが、体部外面にハケメ、内面にケズリが確認できる。頸部外面の一部に成形時の工具痕かと思われる痕跡が残る。

4～10は1号竪穴式住居跡床面から出土した土器。4～7は土師器高坏。4は坏部片と脚部片を図上で復元した。またSK3出土の破片と接合している。口縁部は直線的に斜め外方にひらく。全体的に摩滅が著しく、脚部内面の一部にナデがみられる以外は調整は不明。5は高坏口縁部片。口縁端部は緩やかに外反し、口縁部外面には斜めハケが残る。7は高坏脚部片。脚裾部は深く折り曲げられ、端部をわずかに跳ね上げる。8は土師器甕の口縁部片。短く外反し端部は明瞭に面をもつ。口径は17.8cmで、口縁部内外面に斜めハケ、頸部内面にケズリが残る。9・10は土師器甕の体部片と思われる。9は器壁がおおよそ0.25～0.3cmと非常に薄く特徴的である。10はSK3出土の破片とも接合している。

2号竪穴式住居跡出土土器(図26、写真199、表6)

11は2号竪穴式住居跡に伴う主柱穴1から出土したもので、土師器小型壺の頸一体部片。調整は体部外面はケズリ、内面はナデが施されている。

12は2号竪穴式住居跡の埋土から出土した土師器高坏の口縁部片。口縁は直線的に外傾し、端部は尖り気味に仕上げている。外面下端に坏底部と口縁との接合部の屈曲がわずかに確認できる。

13・14は2号竪穴式住居跡床面から出土した土器。13は土師器高坏の坏部片。口縁部と坏底部との接合部で剥離している。14は土師器甕の口縁一体部片。復元口径は16.0cm。口縁部は中位で外側に少し膨らむ。調整は口縁部は内外面とも横ナデが施されているのを確認できるが、体部は摩滅しており内外面とも不明である。

3号竪穴式住居跡出土土器(図27、写真199・200、表6)

15は3号竪穴式住居跡に伴う主柱穴3から出土した土師器小型甕の口縁一体部片。口縁部径13.0cm、体部最大径は15.8cmを測る。口縁端部は短く外反し、面をもつ。口縁部内面は横ナデ、外面は斜めハケ後ナデが施されている。体部の調整は外面に縦および斜め方向のハケ目が施され、内面上半は横方向のケズリ、下半はナデが施されている。

16は3号竪穴式住居跡壁溝から出土した土師器高坏の坏部片。坏底部と口縁部の接合部の屈折は明瞭で、口縁は直線的に外傾する。

17～20は3号竪穴式住居跡床面から出土した土器。17は土師器高坏の口縁部片。口縁は直線的にのび、端部は軽く外反する。18は土師器高坏の坏部片。内面には粘土の接合痕、外面下端部には坏底部と口縁部との屈曲がわずかに認識できる。19は土師器高坏の脚裾部片。脚部が裾部で折れ曲がり、裾端部で立脚する形態とみられる。20は土師器小型壺。復元口径は9.6cmで、口縁部は端部付近でわずかに内湾し、端部を丸くおさめる。口縁部内外面は横ナデ、体部外面はハケ目が施されており、体部

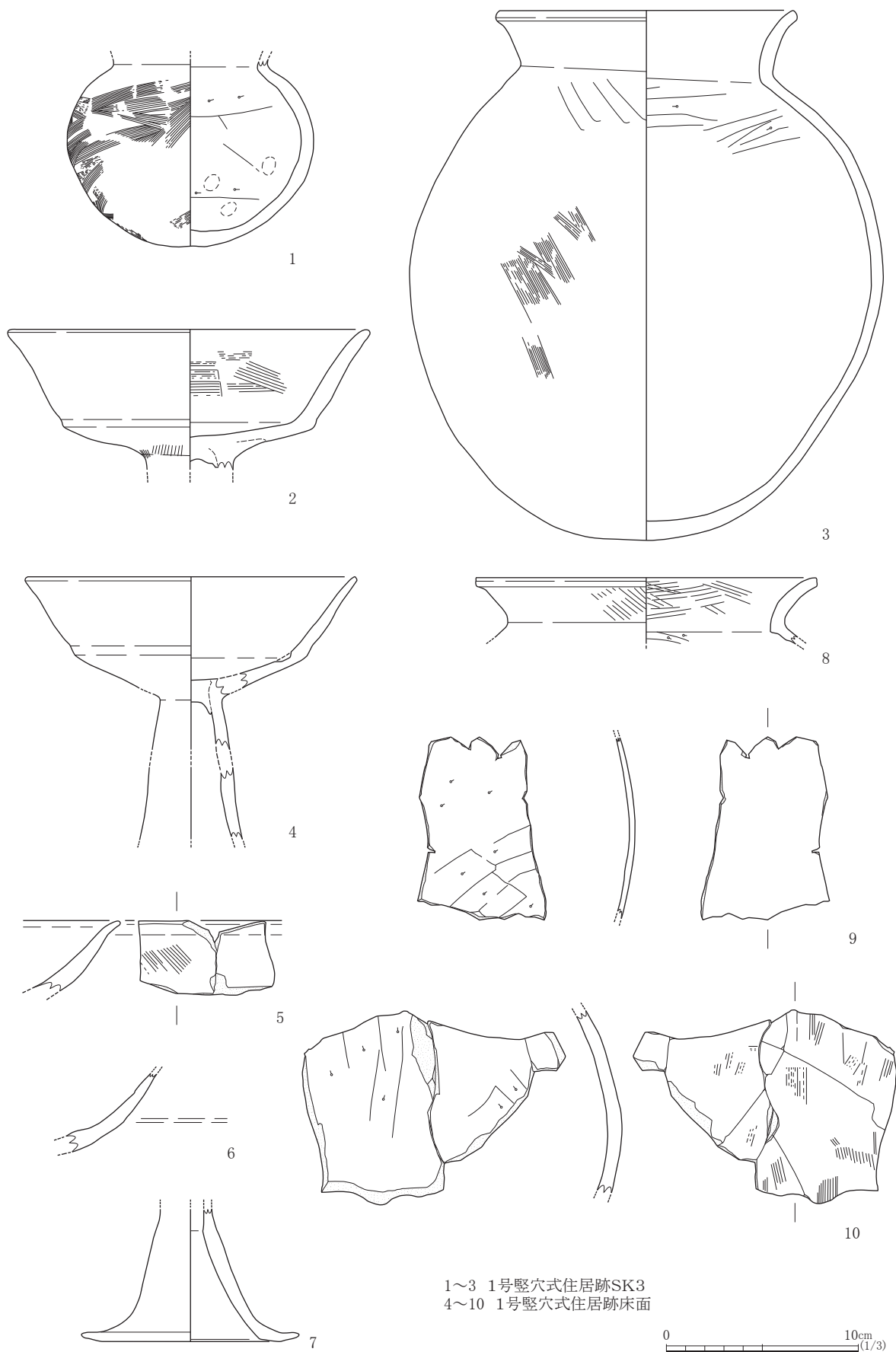
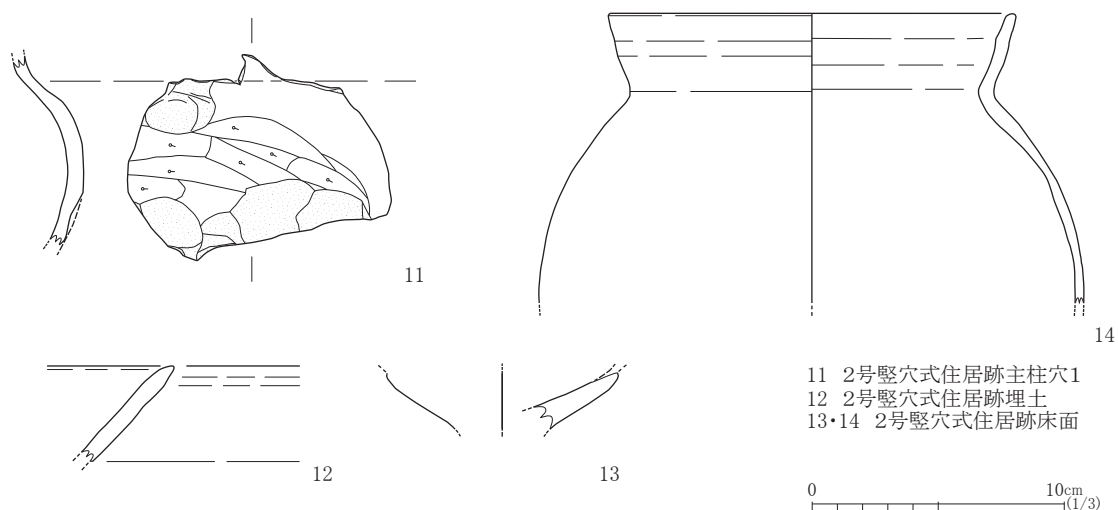
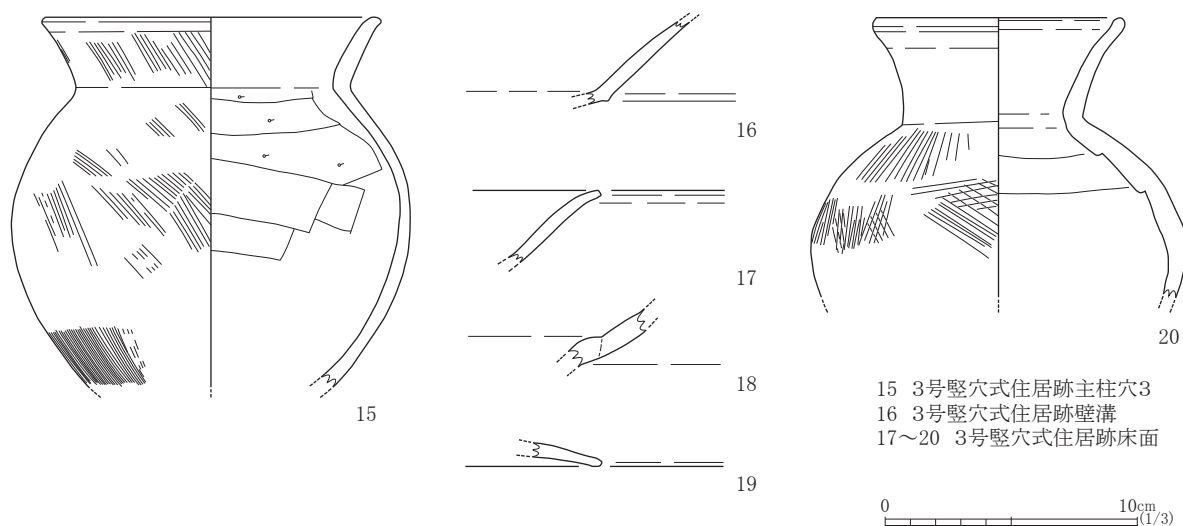


図 25 1号竪穴式住居跡出土土器実測図



11 2号竪穴式住居跡主柱穴1
12 2号竪穴式住居跡埋土
13・14 2号竪穴式住居跡床面

図26 2号竪穴式住居跡出土土器実測図



15 3号竪穴式住居跡主柱穴3
16 3号竪穴式住居跡壁溝
17~20 3号竪穴式住居跡床面

図 27 3号竪穴式住居跡出土土器実測図

内面には粘土の接合痕が残る。

4号竪穴式住居跡出土土器(図28・19、写真200・201、表6)

21は4号竪穴式住居跡内のSK1から出土した土師器高坏の坏部が剥離した脚部片。22は壁溝から出土したもので、土師器甕の口縁部片。内面には斜めハケが残り、外面には斜めハケ後横ナデが施されている。

23・24は4号竪穴式住居跡の調査に先だって埋積土の確認のために入れたサブトレンチから出土したもので、上部から掘り込まれたSK44由来のものも混在している可能性もある。23は土師器高坏の坏底一脚部片。24は土師器甕の口縁部片。

25~31・33・36~38・40・41は4号竪穴式住居跡の床面、32は4号竪穴式住居跡の埋土、34・35・39は断面観察の為に設定したアゼから出土した。

25・26は土師器高坏の坏一脚部片。ともに、同一個体と思われる破片から図上で復元した。25の口縁部は直線的にひらき、端部で外反する。26はSK44から出土した坏部片と復元している。25・26はいずれも摩滅のため調整は不明瞭である。27~29は土師器高坏の坏部。28・29は小片であるが、口縁と坏底部

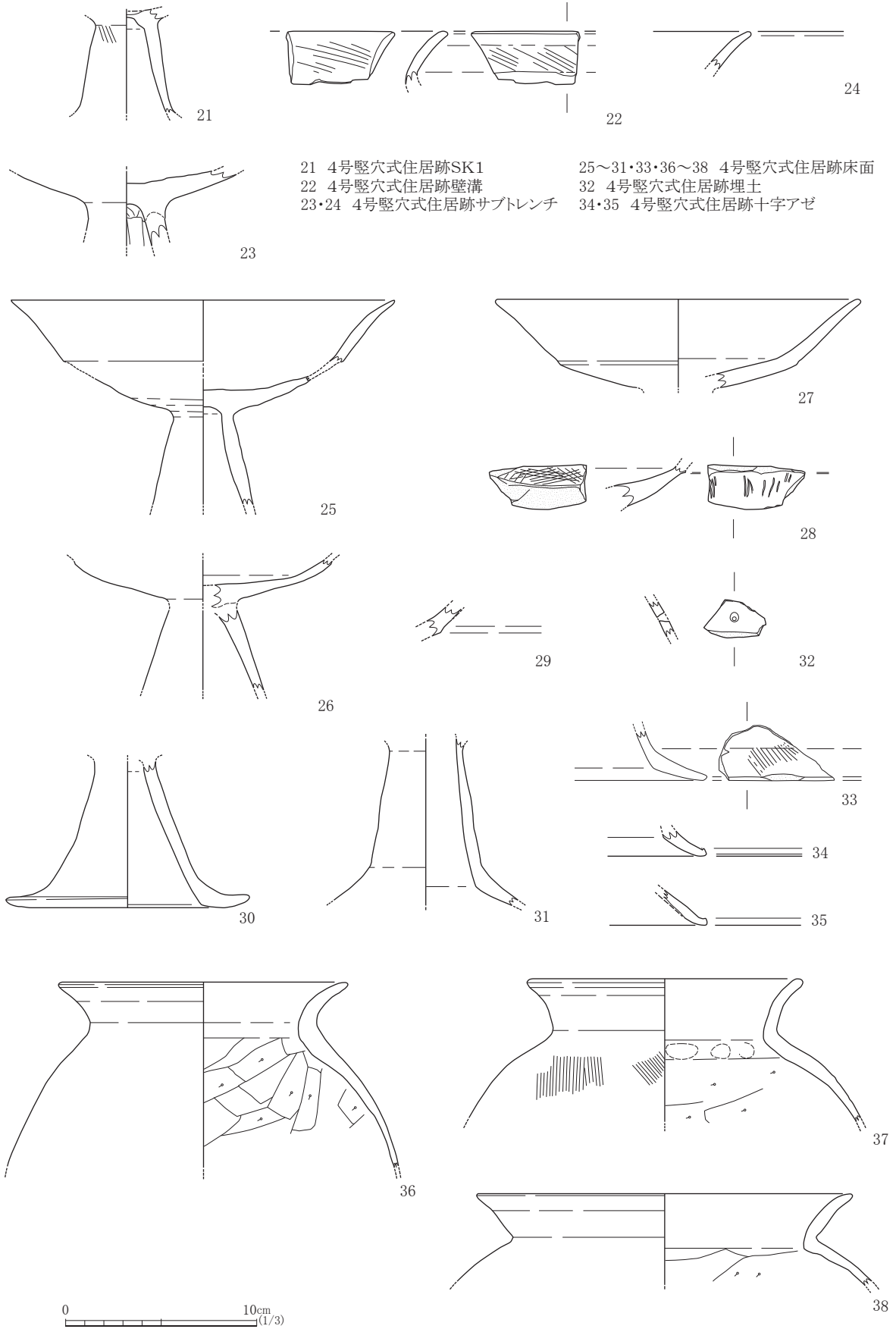
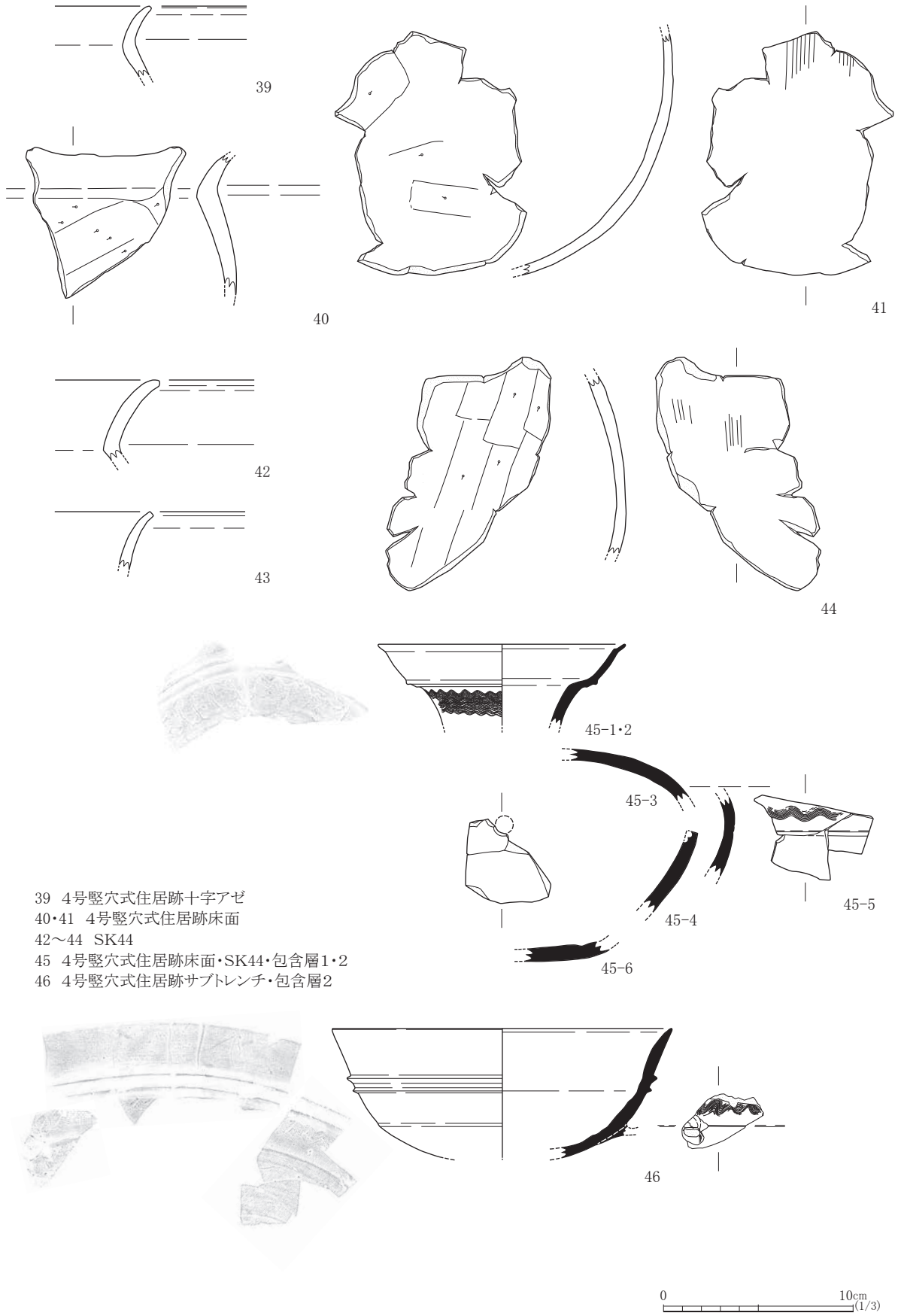


図 28 4号竪穴式住居跡出土土器実測図①



39 4号竪穴式住居跡十字アゼ
 40・41 4号竪穴式住居跡床面
 42～44 SK44
 45 4号竪穴式住居跡床面・SK44・包含層1・2
 46 4号竪穴式住居跡サブトレンチ・包含層2

図29 4号竪穴式住居跡出土土器実測図②

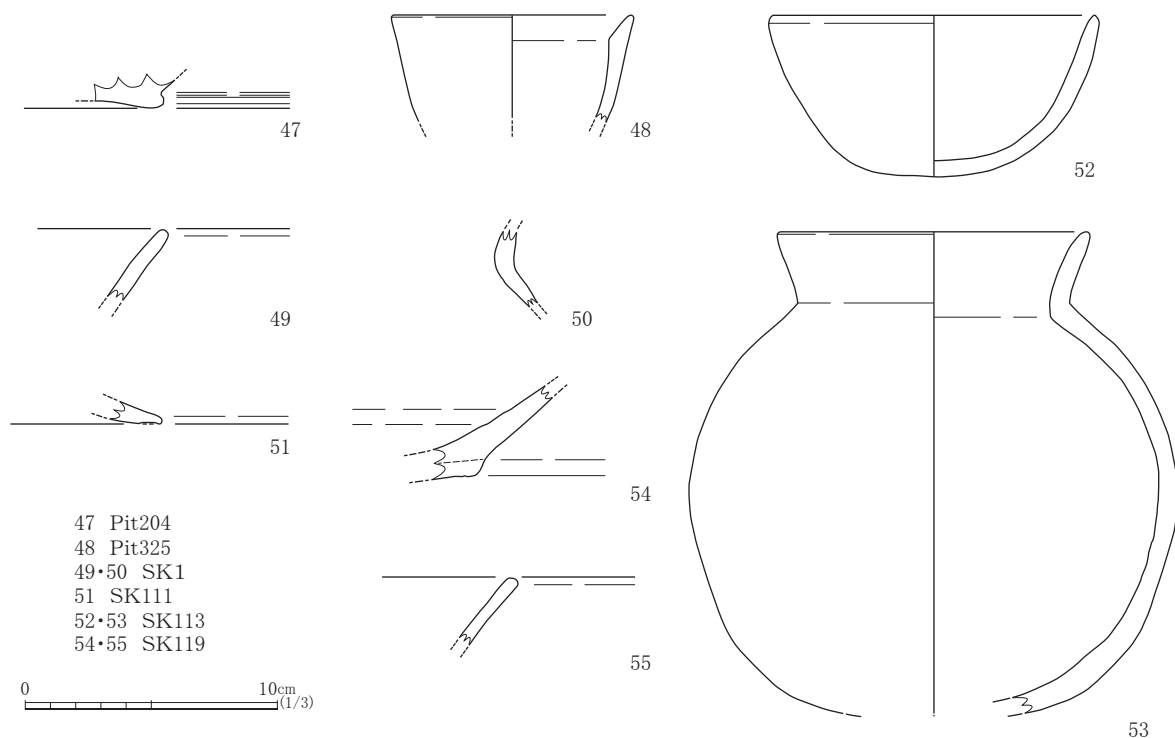


図30 遺構出土土器実測図

との屈曲が確認できる。**30・31**は土師器高坏の脚部片。**30**の脚部はラッパ状にひらき、裾部で強く屈曲してその内面で立脚し、端部は上に反らせる。**31**は裾部が斜め下方にひらいており、端部で立脚する形態とみられる。**32**は土師器高坏の脚部片で、透孔が残る。**33～35**は土師器高坏の脚裾部片。**33**の外面には斜めハケが確認できる。

36～44は土師器甕。摩滅により確認できない例もあるものの、ほとんどは肩一体部の内面にはケズリが施されている。**36**は口縁一体部片。口縁部は完存しており、口径は14.7cmを測る。口縁は短く外反し、頸部の器壁は厚く、体部に向かって極めて薄くなる。口縁部は内外面横ナデ、体部外面にケズリが施されている。**37・38**は口縁-肩部片。**37**の口縁部は中位でさらに外反し、端部は丸くおさめる。復元口径は13.9cm。肩部外面には縦および斜め方向のハケ、内面にはケズリが施される。口縁部は内外面とも摩滅しており調整は不明である。**38**はSK44出土品とも接合している。復元口径19.4cmで、口縁部の外面は少し膨らみ、端部にかけて短く外反する。**39**は口縁部片。内外面とも摩滅しており、調整は不明。**40**は頸一体部片。全体的に摩滅しており、口縁部内外面および体部外面は調整は不明であるが、体部内面にはケズリが確認できる。**41**は体-底部片。体部外面の一部に縦ハケが残り、内面にはケズリが施されている。

42～44は4号竪穴式住居跡の中央にあるSK44から出土した。SK44は住居廃絶後の掘り込みで住居跡に伴う遺構ではないが、4号竪穴式住居跡床面出土の土器片と接合したものや同一個体とみられるものがあり、出土遺物は住居跡に由来するものが含まれていると考えられる。このことから、4号竪穴式住居跡に関連する遺物として取り上げる。**42・43**は土師器甕の口縁部片で、ともに摩滅のため調整は不明である。**44**は土師器甕の体部片。全体的に摩滅しているが、外面に縦ハケがわずかに確認でき、内面にはケズリがみられる。

45・46は4号竪穴式住居跡床面・SK44・サブトレンチ・十字アゼ・包含層から出土した須恵器で、同一

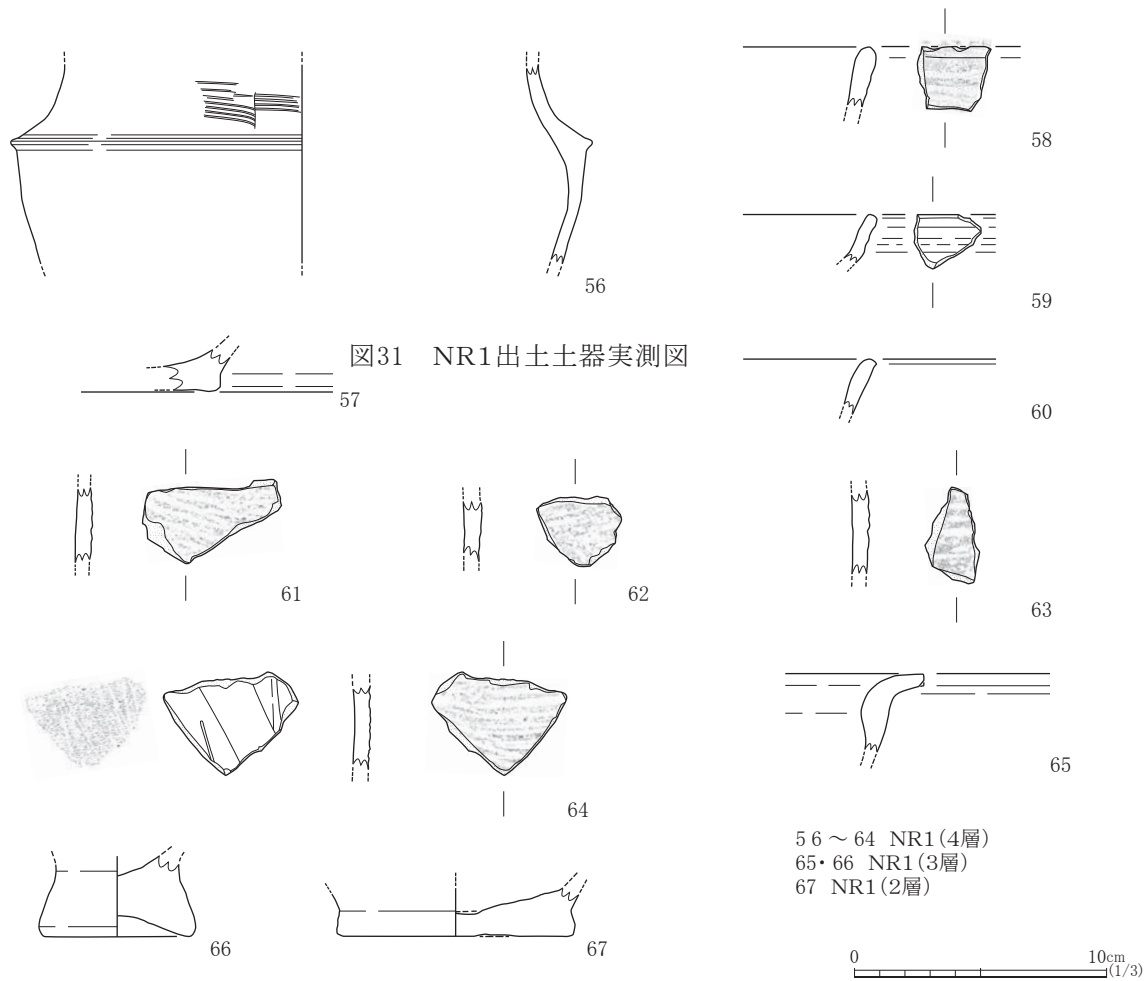


図31 NR1出土土器実測図

図31 NR1出土土器実測図

個体と思われる破片から図上での復元を試みた。

45は須恵器甕の口縁部から底部までの6点で、45-1・4は床面、45-2はSK44と十字アゼからの出土品が接合、45-3は包含層2とSK44からの出土品が接合、45-5・6はSK44から出土したものである。頸部は外上方にひらき、口縁部との境は強く屈曲し断面三角形の突線がめぐる。口縁部はさらに外上方へとひらき、口縁端部は尖り気味に外方へ突出する。復元口径は11.9cm。内面に回転ナデが確認できるが、全体的に焼成は不良で摩耗もしているため調整は不明瞭である。また、頸部と肩部に波状文が施されているが、薄く確認できる程度である。57-4には注口の一部が残る。

46は須恵器の把手付無蓋高坏の坏部。口縁部と把手部の破片に接点はないが図上で復元した。46-1・2はサブトレンチ・SK44から、46-3は包含層2から出土した。復元口径は17.8cmで、甕と比して焼成は良好である。口縁部と坏部との境に断面三角形の突線が2条めぐり、その下に波状文が施される。把手は波状文帯に取り付く。45・46は山口県下では出土例が少ない初期須恵器に該当し、注視される。

遺構出土土器(図30、写真201・202、表6)

遺構からの遺物の出土は非常に少なく、弥生土器も認められるが、そのほとんどは土師器の小片であった。そのうち図化できたものとして、ここでは9点提示する。なお、いずれの個体も摩耗しており調整は不明瞭である。

47はPit204から出土した土師器の壺と思われる底部片。48はPit325から出土した土師器鉢の口縁一体部片で、復元口径は9.4cm。口縁は緩やかに内湾し、端部は内傾する広い面をもつ。49・50はSK1から出土した弥生土器甕の口縁部と頸部片。51はSK111から出土した土師器高坏の脚裾部片。52・53はSK113から出土したもので、52は土師器鉢の口縁一底部片。復元口径12.7cm、器高6.4cmを測る。口縁部は斜め外方にひらき、端部は尖り気味におさめる。53は土師器甕の口縁一底部片。復元口径は12.1cm。体部は球形を呈し、体部の復元最大径は19.5cmを測る。54・55はSK119から出土した土器。54は土師器高坏の坏部。55は土師器甕の口縁部片。

NR1出土土器(図31、写真202、表6)

NR1は、4層から縄文土器・不明土製品・石器、3層から弥生土器、2層から弥生土器・土師器、1層から土師器・須恵器が出土している。56～64は4層から出土した縄文土器。56は深鉢の頸一胴部片。張り付け突帯にわずかに刻み目が残る。57は器種不明の底部片。58～60は器種不明の口縁部片で、58の口唇部には刻みが施される。61～64は胴部片で、外面には条痕が施されている。65・66はNR1の3層から出土。65は弥生土器甕の口縁部片。口縁は短く折れ、端部は面をもつ。内面は大きく肥厚する。66は弥生土器甕の底部片。67はNR1の2層から出土したもので、縄文土器深鉢の底部片。

南西部遺構検出中(図32、写真202、表6)

68・69は調査区南西部の遺構検出中に出土した土器で、68は陶器碗の底部片。69は陶器の器種不明の底部片。

北部上層遺構基盤層(図32、写真202、表6)

調査区北部域のみ遺構面が2面確認されており、70は上面遺構の基盤層から出土した弥生土器高坏の坏部片。外面に底部と口縁部との接合部の屈曲と思われる段差が認められる。内外面とも摩滅しており調整は不明。

包含層出土土器(図32、写真202、表6)

調査区の北部域には2層の包含層の堆積が認められる。包含層2からは、弥生土器・土師器・須恵器が、包含層1からは、土師器・須恵器・陶器などが出土している。また、南西拡張区の包含層からは土師器・須恵器が出土している。

71～74は北側包含層2から出土した土器。71は弥生土器高坏の坏一脚部片。全体的に摩滅しており調整は不明。72は弥生土器の垂下口縁壺の口縁部片と思われる。73は土師器高坏の脚部片。坏部と脚部との接合のための粘土の充填が確認できる。74は須恵器の高坏の坏部片と思われる。

75・76は北側包含層1から出土した土器。75は土師器高台付坏の底部片。76は須恵器坏蓋の天井一口縁部片で、7世紀後半から8世紀初頭。

77は南西拡張区の包含層から出土したもので、土師器高坏の坏底部片。

旧耕土・旧床土出土土器(図32、写真202・203、表6)

78～82は旧床土から出土した土器。78は土師器高坏の基部片。79は土師器高台付坏の底部片。80は須恵器坏蓋の口縁部片。口縁部付近で平らに屈曲し、端部は丸くおさめる。9世紀。81は須恵器の高坏の坏部片かと思われる。北側包含層2出土の破片と接合している。上部は欠失しているが、外面が屈折して器壁が薄くなる立ち上がりがわずかに残っている。波状文がめぐり、底部付近はヘラ削りが施されている。82は瓦質土器足鍋の脚部片。

83～85は南西拡張区の旧耕土・旧床土から出土した土器。83は須恵器坏蓋の天井一口縁部片。7世紀後半。84は陶器挿鉢の口縁部片。口唇部は折り曲げて肥厚させる。85は瓦質土器羽釜の口縁部片。

口縁に接して鏝が貼り付けられる。

86・87は調査区南西部の整地土の下で認められた旧耕土から出土した土器。86は磁器染付碗の底部片。87は白磁の紅皿。口縁端部は平らな面をもち、体部外面には菊花文を施す。

整地土出土土器(図32、写真203、表6)

88～91は調査区南西部の整地土中から出土したもの。88は陶器鉢の口縁部片。89・90は磁器染付碗の口縁部片。91は磁器染付碗の体一底部片。

[玉類](図33、写真204、表7)

92～94は、3号竪穴式住居跡で検出された炉跡の土壌サンプルの洗浄中に確認された。径0.3～0.4cmと小粒で肉眼観察での判断は困難であるため材質は不明。

[土製品](図34、写真205、表8)

95はNR1の4層から出土した不明土製品。径2～2.3cmの円柱状で、下部は欠失しているため全長は不明である。上端部は逆「ハ」字状に短くひらき、上面は僅かに凹む。

[金属器](図34、写真205、表9)

96は調査区南西部に認められる整地土下の旧耕土から出土したもの。釘か。

[石器](図35～37、写真206・207、表10)

97・98は住居跡から出土したもので、97は2号竪穴式住居跡の床面から出土した石英安山岩製の剥片。98は3号竪穴式住居跡の床面から出土した不明石器。石材は石英。

99・100はSK44から出土した。99はSK44の1層から出土した不明石器で安山岩製。100はSK44の2層から出土したもので、作業台かとみられる。火山礫凝灰岩製。

101はSK71から出土した黒曜石の剥片。

102～105はNR1の4層から出土したもの。102は石英安山岩(デイサイト)質溶結凝灰岩製の石錘。板状で平面菱形を呈する。103は火山礫凝灰岩製の磨石。104は凹基式の石鏃。安山岩製。105は安山岩製の剥片。

106は北側包含層から出土した安山岩製の石斧。

調査全体を通して出土遺物は少なく、また小片も多く、図化可能な個体が限られていた。特に遺構の検出数に対して遺構からの出土遺物は極めて少なく、主な出土遺物は4棟検出された竪穴式住居跡からのものとなる。竪穴式住居跡を除くと、SK113からの出土土器だけが全形がうかがえる資料で、古墳時代後期に該当するとみられる。

竪穴式住居跡の出土遺物については、土師器高坏の坏部が残存するものを見る限りでは、口縁部が直線的で内湾せず坏部が深くなる傾向がうかがわれないことから古墳時代中期中葉を下ることはないものと考えられる。土師器の坏の出土が確認されないことなどの特徴もその年代観についての証左の一つ^{註1} となると思われる。また、それぞれの出土遺物を見る限り、4棟の竪穴式住居跡には大きな時期差はないと思われる。

竪穴式住居跡からの出土遺物として特筆すべきものとしては、4号竪穴式住居跡から出土した初期須恵器が挙げられる。その形態的特徴からTK216－TK208併行期と考えられる。生産地については判然としませんが、大阪府陶邑窯跡群の可能性が高いのではないと思われる。

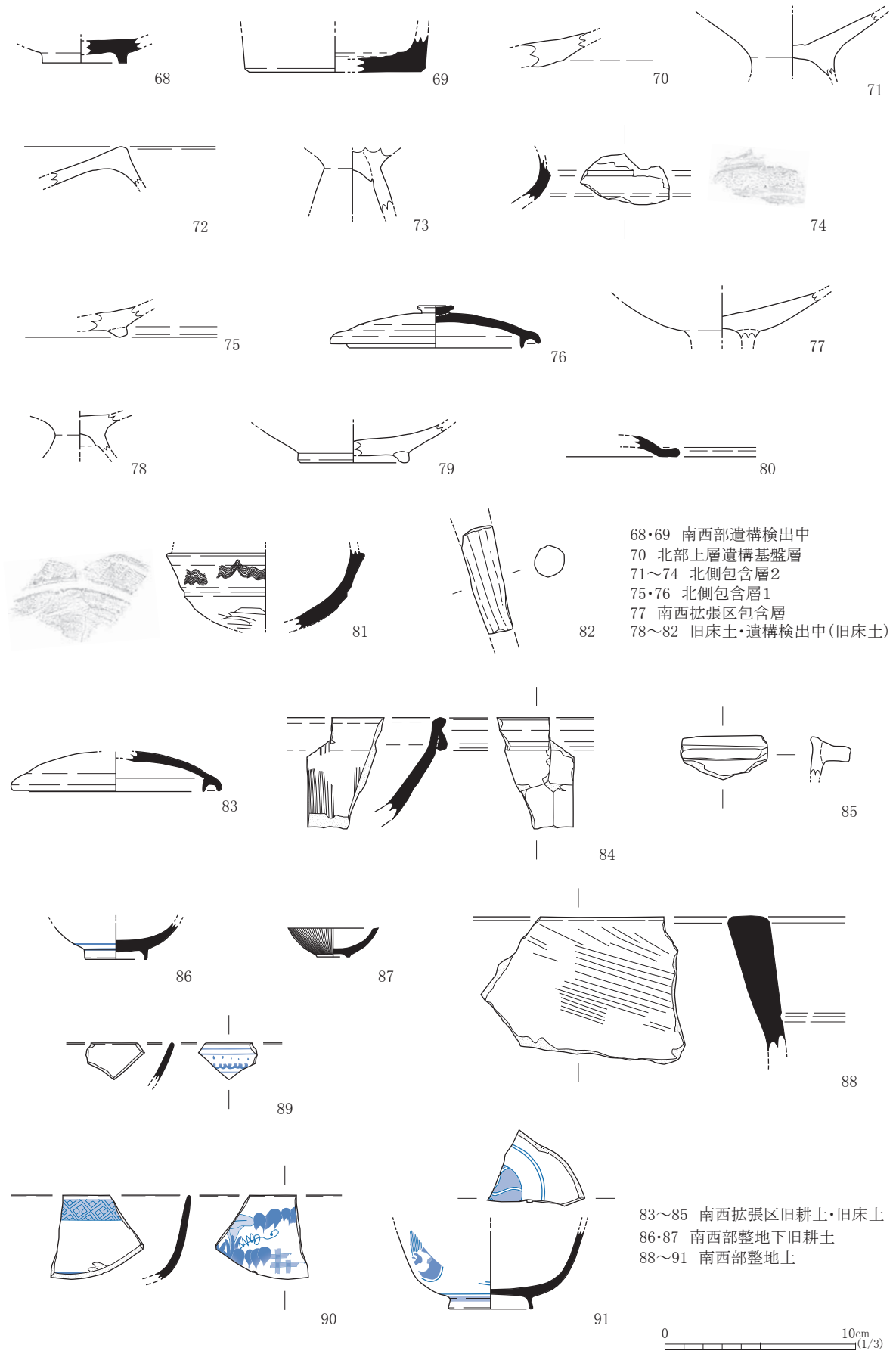
吉田構内(吉田遺跡)では、昭和46年に行われた吉田遺跡第I地区E区(第2学生食堂及びその前面道路)の調査で6棟の竪穴式住居跡が検出されており、その内の1棟(6号竪穴式住居跡)から須恵器

礎の口縁部片が出土している。^{註2}4号竪穴式住居跡出土の礎と同じくTK216-TK208併行期と考えられ、同時期に初期須恵器を有する住居が存在していたことがわっている。

なお、吉田遺跡周辺での初期須恵器の出土例として西遺跡と朝田墳墓群^{註3}が挙げられるが、西遺跡では胎土分析の結果から大阪府陶邑窯跡産もしくはその可能性が高いものと判定されており、朝田墳墓群^{註4}出土の須恵器はその形態的特徴から同じく陶邑産^{註5}と考えられている。本調査出土の初期須恵器の生産地を推考する参考となろう。(水久保)

【註】

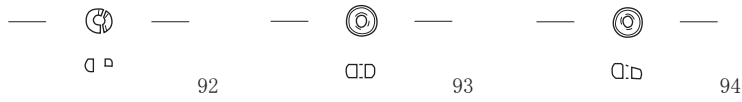
- 1) 山本一朗(1981)「防長の土師器」, 周陽考古学研究所(編), 『山口県の土師器・須恵器—集成と編年—』周陽考古学研究所報2, 光(山口)
小林善也(2008)「須恵器出現期以降の古墳時代集落出土の土器編年試論—周防西部地域—」, 小林善也・横山成己(編)『古墳時代集落遺跡出土の須恵器・土師器～5世紀から7世紀にかけての山口県の土器様相～』山口考古学フォーラム調査研究報告書1, 山口
- 2) 豆谷和之(1994)「付篇 I 第1章 吉田遺跡 I 地区E区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅻ』, 山口
- 3) 山口県教育委員会(1976)『朝田墳墓群 I 付木崎遺跡』, (山口県埋蔵文化財調査報告第32集), 山口
山口県教育委員会(1977)『朝田墳墓群 II 鴻ノ峰1号墳』, (山口県埋蔵文化財調査報告第33集), 山口
山口県教育委員会(1983)『朝田墳墓群VI』, (山口県埋蔵文化財調査報告第69集), 山口
山口市教育委員会(1986)『西遺跡』, (山口市埋蔵文化財調査報告第21集), 山口
- 4) 三辻利一(1986)「西遺跡出土土器の蛍光X線分析」『西遺跡』, (山口市埋蔵文化財調査報告第21集)
小田村宏・菅波正人・三辻利一・黒瀬雄士(1987), 「西遺跡(山口県)出土須恵器の産地推定」, 小田富士雄(編)『古文化談叢』第18集, 北九州(福岡)
- 5) 市来真澄(2014)「山口県の初期須恵器から見た地域間関係について」, 山口考古学会(編)『山口考古』第34号, 山口



68・69 南西部遺構検出中
 70 北部上層遺構基盤層
 71～74 北側包含層2
 75・76 北側包含層1
 77 南西拡張区包含層
 78～82 旧床土・遺構検出中(旧床土)

83～85 南西拡張区旧耕土・旧床土
 86・87 南西部整地下旧耕土
 88～91 南西部整地土

図32 出土土器実測図



92~94 3号竪穴式住居跡

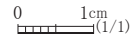
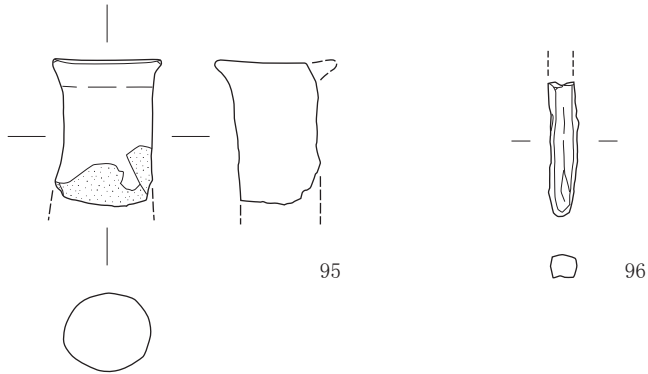


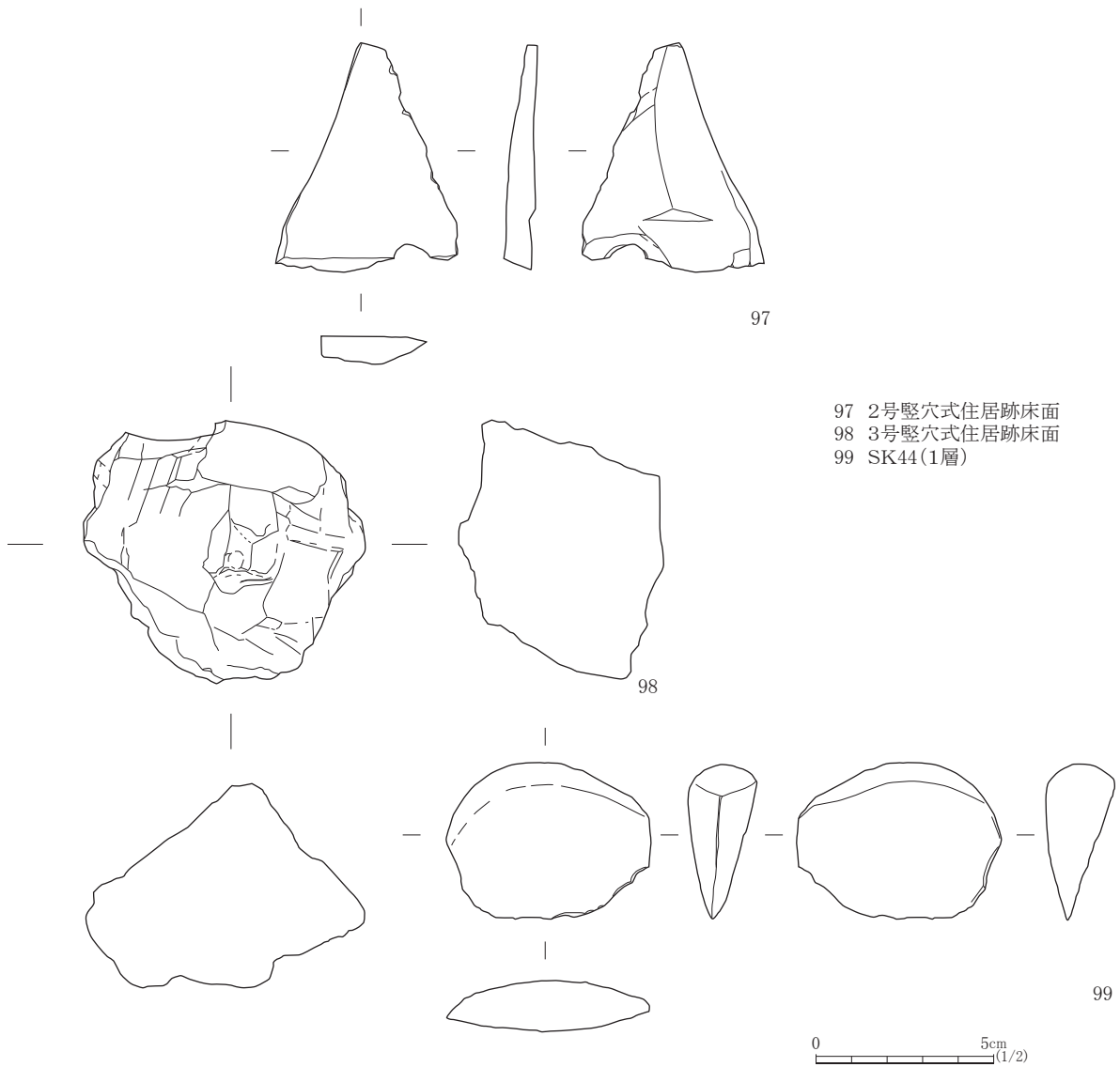
図33 出土玉類実測図



95 NR1(4層)
96 南西部整地土下旧耕土



図34 出土土製品・金属器実測図



97 2号竪穴式住居跡床面
98 3号竪穴式住居跡床面
99 SK44(1層)

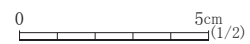


図35 出土石器実測図①

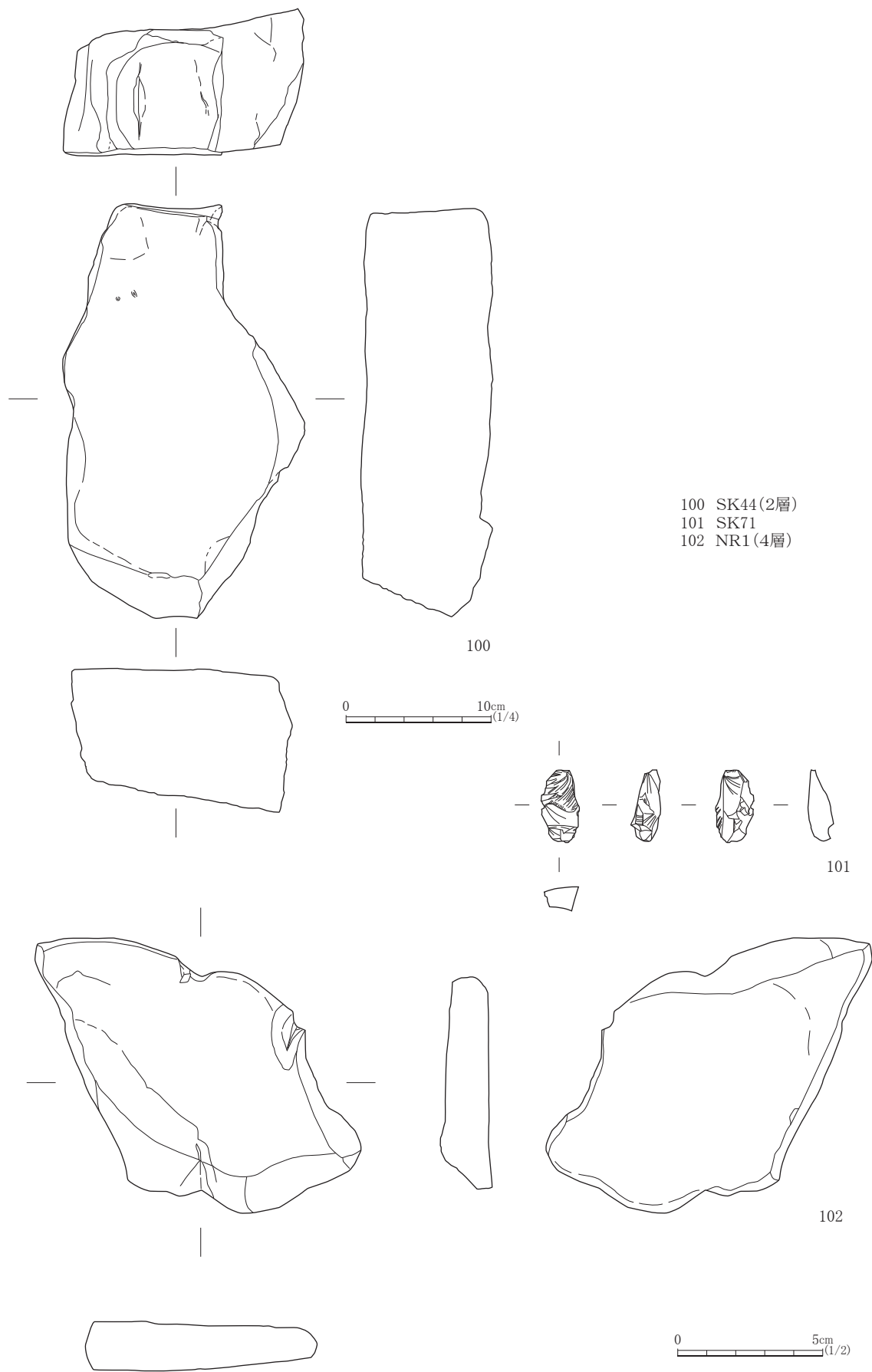


図36 出土石器実測図②

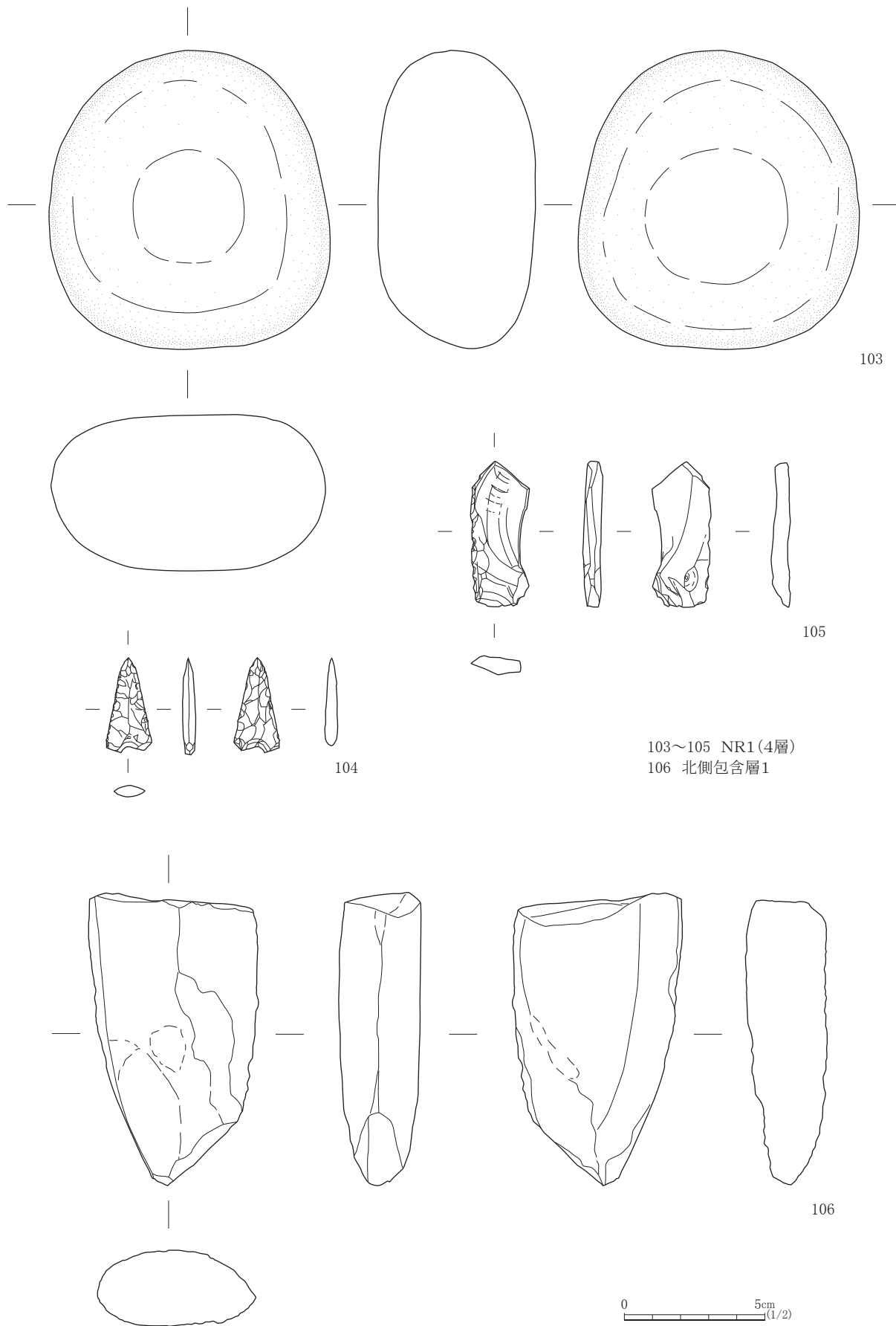


図37 出土石器実測図③



1



2



3



4-2



4-1



4-3



5



6



7



8



12



9



10



13



11



14



15

写真199 出土遺物(土器)①



写真200 出土遺物(土器)②



37



41



44



38



45-1



45-2



45-3



45-4



45-5



45-6



46



47



48



49



50



52



53



51



54

写真201 出土遺物(土器)③



写真202 出土遺物(土器)④

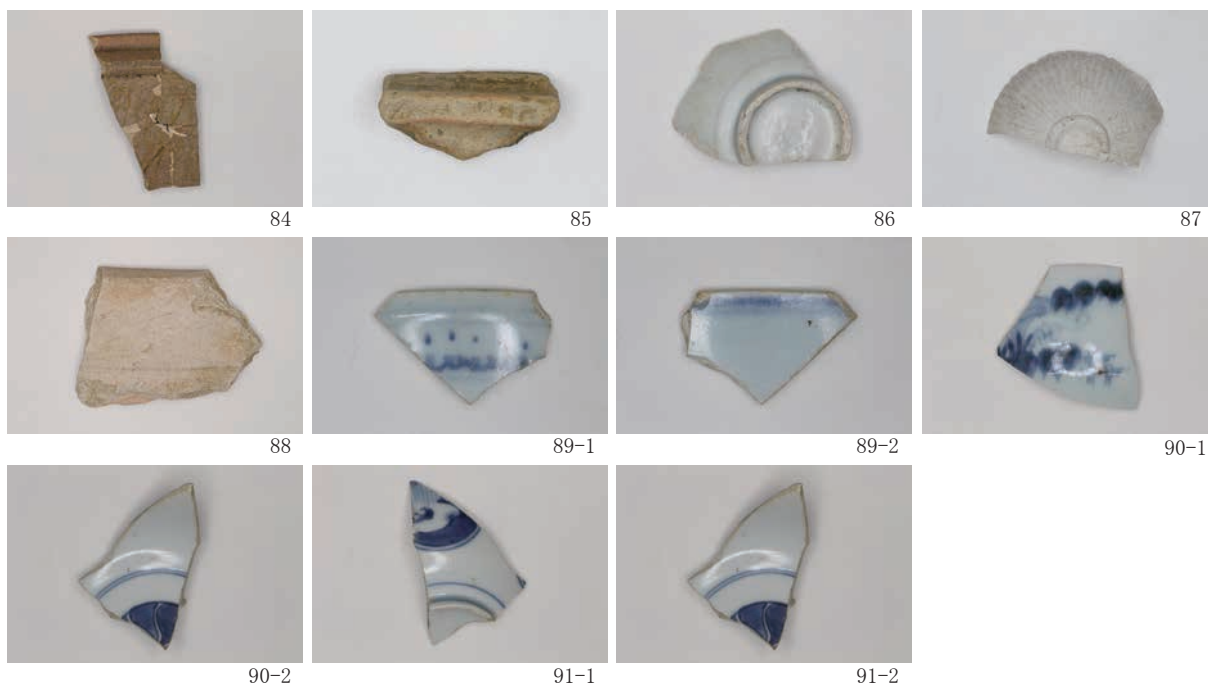


写真203 出土遺物(土器)⑤



写真204 出土遺物(玉類)



写真205 出土遺物(土製品・金属器)



写真206 出土遺物(石器)①



写真207 出土遺物(石器)②

表6 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調	胎土	備考
					①外面 ②内面		
1	1号住居 SK3	土師器 甕	体部	②(2.0) ②残高9.8	①灰白色(7.5YR7/1) ②橙色(7.5YR6/6) ③浅黄色(2.5Y7/3)	0.5~3mm φの長石・石英含 む	
2	1号住居 SK3	土師器 高坏	坏部	①(18.2) ③残高7.3	①にぶい橙色(5YR7/4) ②灰黄色(2.5YR7/2)	0.5~3mm φの長石・石英・ チャート含む	
3	1号住居 SK3	土師器 甕	口縁部 ~底部	①(14.4) ②3.0 ③27.6	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②橙色(7.5YR7/6) ③暗灰色(N3/) ④黒褐色(2.5Y3/1)	0.5~5mm φの長石・石英含 む	
4	1号住居 床面	土師器 高坏	坏部 ~脚部	①(17.0)	①②橙色(5YR6/6)	0.5~1mm φの長石含む	1号住居SK 3と接合
5	1号住居 床面	土師器 高坏	口縁部	③残高3.65	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.5~1mm φの長石含む	
6	1号住居 床面	土師器 高坏	坏部	③残高4.1	①②橙色(7.5YR7/6)	1mm φの長石含む	
7	1号住居 床面	土師器 高坏	脚部	②(11.3) ③残高6.9	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	0.5~1mm φの長石・石英含 む	
8	1号住居 床面	土師器 甕	口縁部	①17.8 ③残高3.6	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②橙色(7.5YR6/6)	0.5~1mm φの長石含む	
9	1号住居 床面	土師器 甕	体部		①明赤褐色(5YR6/3) ②黒褐色(2.5Y3/1)	0.5~1mm φの長石含む	
10	1号住居 床面	土師器 甕	体部		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②黒褐色(2.5Y3/1) ③浅黄色(2.5Y7/3)	0.5~1mm φの長石含む	1号住居SK 3と接合
11	2号住居 主柱穴1	土師器 小型壺	頸部 ~体部	③残高7.3	①にぶい黄褐色(10YR5/3 ~6/3) ②橙色(7.5YR6/6)	0.5mm φの長石含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
12	2号住居埋土	土師器 高坏	口縁部	③残高3.8	①橙色(7.5YR6/6) 褐灰色(7.5YR4/1) ②橙色(5YR6/6) 明赤褐色(2.5YR5/6)		0.5~1mmφの長石含む	
13	2号住居床面	土師器 高坏	坏部	③残高2.2	①明赤褐色(5YR6/3) ②橙色(5YR6/6)		0.1~0.3mmφの砂粒含む	
14	2号住居床面	土師器 甕	口縁部 ~体部	①(16.0) ③残高11.5	①にぶい黄橙色(10YR5/3) 黒褐色(2.5Y3/1) ②にぶい黄褐色(10YR5/4)		0.5~3mmφの長石・石英含む	
15	3号住居主柱穴3	土師器 小型甕	口縁部 ~体部	①13.0 ③残高14.7	①橙色(5YR6/6) 黒色(10YR2/1) ②橙色(5YR6/6) 褐灰色(10YR4/1)		0.5~5mmφの長石・石英含む	
16	3号住居壁溝	土師器 高坏	坏部	③残高3.25	①②明赤褐色(2.5YR5/6)		0.5~1mmφの長石・石英含む 5mmφのチャート含む	
17	3号住居床面	土師器 高坏	口縁部	③残高2.9	①明赤褐色(5YR5/6) ②明赤褐色(5YR5/8)		0.5~1mmφの長石・石英・チャート含む	
18	3号住居床面	土師器 高坏	坏部	③残高2.3	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)		0.5~3mmφの長石・石英含む	
19	3号住居床面	土師器 高坏	脚裾部	③残高0.9	①②橙色(7.5YR7/6)		0.5~1mmφの長石含む	
20	3号住居床面	土師器 小型壺	口縁部 ~体部	①(9.6) ③残高11.2	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)		0.5~2mmφの長石含む	
21	4号住居SK1	土師器 高坏	脚部	③残高5.55	①②橙色(5YR6/6)		0.5~2mmφの長石含む	
22	4号住居壁溝	土師器 甕	口縁部	③残高2.85	①②黄灰色(2.5Y4/1)		0.5~1mmφの長石含む	
23	4号住居南西区サブトレンチ	土師器 高坏	坏底部 ~脚部	③残高3.95	①橙色(2.5YR6/6) ②橙色(7.5YR7/6)		0.5~4mmφの長石・石英・チャート含む	
24	4号住居北東区サブトレンチ	土師器 甕	口縁部	③残高2.0	①②橙色(5YR6/6)		0.5~1mmφの長石・石英・チャート含む	
25	4号住居南西区床面	土師器 高坏	坏部 ~脚部	①(20.0)	①②明赤褐色(5YR5/6)		0.5~2mmφの長石・石英含む 0.5~5mmφのチャート含む	
26	4号住居床面	土師器 高坏	坏部 ~脚部		①明赤褐色(5YR5/6) ②にぶい黄色(2.5Y6/3) 明赤褐色(5YR5/6)		0.5~1mmφの長石・石英含む	SK44(2層)と接点なし同一個体
27	4号住居南西区床面	土師器 高坏	坏部	①(18.8) ③残高4.6	①橙色(2.5YR6/6) ②橙色(7.5YR7/6)		0.5~3mmφの長石・石英含む	
28	4号住居南西区床面	土師器 高坏	坏部	③残高2.7	①にぶい黄橙色(10YR6/3) 明赤褐色(2.5YR5/6) ②橙色(2.5YR6/6)		0.5~2mmφの長石含む	
29	4号住居床面	土師器 高坏	坏部	③残高1.55	①②橙色(5YR7/6)		0.5~1mmφの長石・チャート含む	
30	4号住居床面	土師器 高坏	脚部	②(10.1) ③残高7.7	①橙色(5YR6/8) ②橙色(7.5YR6/8)		0.5~1mmφの長石・石英含む	4号住居埋土、SD4と接合
31	4号住居南西区床面	土師器 高坏	脚部	③残高8.75	①②橙色(7.5YR7/6)		0.5mmφの長石含む	
32	4号住居南西区埋土	土師器 高坏	脚部		①橙色(2.5YR6/6) ②灰黄褐色(10YR5/2)		0.5mmφの長石含む	
33	4号住居床面	土師器 高坏	脚裾部	③残高2.85	①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(5Y8/2)		0.5mmφの長石含む	
34	4号住居十字アゼ	土師器 高坏	脚裾部	③残高1.3	①②浅黄色(2.5Y7/4)		0.5mmφの長石含む	
35	4号住居十字アゼ	土師器 高坏	脚裾部	③残高1.85	①浅黄色(2.5Y7/3) ②橙色(5YR6/6)		0.5mmφの長石含む	
36	4号住居床面	土師器 甕	口縁部 ~体部	①14.7 ③残高9.7	①灰黄色(2.5Y6/2~7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2) 暗灰色(2.5Y5/2)		0.5~3mmφの長石・石英含む	4号住居十字アゼと接合

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
37	4号住居 南西区 床面	土師器 甕	口縁部 ～肩部	①(13.9) ③残高7.5	①暗灰黄色(5Y4/2) 浅黄色(2.5Y7/3) ②暗灰黄色(2.5Y4/2) 浅黄色(2.5Y7/3)	0.5～3mmφの長石・石英・ チャート含む	4号住居南 北アゼ前落 土(おそらく 攪乱)と接合	
38	4号住居 床面	土師器 甕	口縁部 ～肩部	①(19.4) ③残高4.8	①灰黄褐色(10YR5/2) ②灰白色(10YR8/2)	0.5～3mmφの長石・石英含 む	SK44(2 層)と接合	
39	4号住居 十字アゼ	土師器 甕	口縁部	③残高3.7	①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.5～1mmφの長石・石英含 む		
40	4号住居 南西区 床面	土師器 甕	頸部 ～体部	③残高7.4	①浅黄橙色(7.5YR8/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.5～2mmφの長石・石英含 む		
41	4号住居 床面	土師器 甕	体部 ～底部		①赤褐色(2.5YR4/6) ②黒褐色(10YR3/1)	0.5～2mmφの長石・石英・ チャート・くさり礫含む		
42	4号住居 (SK44 2層)	土師器 甕	口縁部	③残高4.25	①にぶい橙色(2.5YR6/4) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	0.5～3mmφの長石・石英含 む		
43	4号住居 (SK44 2層)	土師器 甕	口縁部	③残高3.0	①②橙色(5YR6/6)	0.5～1mmφの長石・石英含 む		
44	4号住居 (SK44 2層)	土師器 甕	体部		①浅黄橙色(10YR8/4) 灰黄褐色(10YR4/2) ②浅黄橙色(10YR8/3) にぶい黄褐色(10YR7/3)	0.5～3mmφの長石含む		
45-1	4号住居 床面	須恵器 甕	口縁部 ～頸部	①(11.9)	①灰色(N6/) ②灰白色(7.5Y7/1) 灰色(N5/)	砂粒をほとんど含まない	SK44(1 層)と接合	
45-2	4号住居 (SK44 1層)	須恵器 甕	口縁部 ～頸部		①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	砂粒をほとんど含まない	4号住居十 字アゼと接 合	
45-3	北側 包含層2	須恵器 甕	肩部		①灰白色(N8/) 灰色(N5/) ②灰色(N4/)	5mmφのチャート含む	SK44(2 層)と接合	
45-4	4号住居 床面	須恵器 甕	体部 (注口)		①②灰色(N5/)	砂粒をほとんど含まない		
45-5	4号住居 (SK44 1・2層)	須恵器 甕	体部		①灰白色(N8/) 灰色(N5/) ②灰色(N5/)	砂粒をほとんど含まない		
45-6	4号住居 (SK44 2層)	須恵器 甕	底部		灰白色(5Y8/2) ②灰色(N5/) 灰白色(5Y8/2)	砂粒をほとんど含まない		
46- 1・2	4号住居 北東区 サブレン チ	須恵器 高坏	口縁部	①(17.8) ③残高6.8	①青灰色(5B5/1) ②灰色(N5/)	砂粒をほとんど含まない	SK44(1・2 層)と接合	
46-3	北側 包含層2	須恵器 高坏	把手部		①灰色(N5/) ②灰白色(7.5Y7/1)	砂粒をほとんど含まない		
47	Pit204	土師器 壺か	底部	③残高1.1	①灰黄色(2.5Y7/2)	0.5～3mmφの長石・石英・ チャート含む		
48	Pit325	土師器 鉢	口縁部 ～体部	①(9.4) ③残高4.75	①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	0.5～2mmφの長石含む 1mmφのくさり礫含む		
49	SK1	弥生土器 甕	口縁部	③残高2.85	①暗灰色(N3/) ②灰白色(5Y8/1)	0.5～1mmφの長石含む		
50	SK1	弥生土器 甕	口縁部	③残高4.1	①浅黄色(5Y7/3) ②橙色(7.5YR6/6)	0.5～1mmφの長石含む		
51	SK111	土師器 高坏	脚裾部	③残高0.9	①②橙色(5YR6/6)	0.5～1mmφの長石含む		
52	SK113	土師器 鉢	口縁部 ～底部	①(12.7) ②4.05 ③6.4	①橙色(5YR7/6) 灰白色(2.5Y8/1) ②にぶい黄褐色(10YR7/3) にぶい橙色(5YR7/4)	0.5～1mmφの長石含む		
53	SK113	土師器 甕	口縁部 ～底部	①(12.1) ③残高19.1	①にぶい橙色(7.5YR7/4) 褐灰色(7.5YR4/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4) 灰褐色(7.5YR6/2)	0.5～7mmφの長石・チャート 含む		
54	SK119	土師器 高坏	坏部	③残高3.7	①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄褐色(10YR7/2)	0.5～3mmφの長石・石英含 む		
55	SK119	土師器 甕	口縁部	③残高2.7	①橙色(5YR6/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.5～2mmφの長石含む		

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
56	NR1 4層	縄文土器 深鉢	頸部 ～胴部	③残高7.75	①褐灰色(10YR4/1) 灰黄褐色(10YR6/1) ②褐灰色(2.5Y4/1)		0.5～3mmφの長石・石英・ チャート含む	
57	NR1 4層	縄文土器 器種不明	底部	③残高2.65	①淡黄色(2.5Y8/3) ②灰色(5Y6/1)		0.5～2mmφの長石・石英・ チャート含む	
58	NR1 4層	縄文土器 器種不明	口縁部	③残高2.4	①灰褐色(2.5Y7/2) ②灰色(5Y4/1)		0.5～2mmφの長石・石英含 む	
59	NR1 4層	縄文土器 器種不明	口縁部	③残高1.9	①黄灰色(2.5Y4/1) ②オリーブ黒色(5Y3/1)		0.5～5mmφの長石・石英・ チャート含む	
60	NR1 4層	縄文土器 器種不明	口縁部	③残高2.2	①②オリーブ黒色(5Y3/1)		0.5～3mmφの長石・石英・ チャート含む	
61	NR1 4層	縄文土器 器種不明	胴部		①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②灰黄褐色(10YR4/2)		0.5～2mmφの長石・石英含 む	
62	NR1 4層	縄文土器 器種不明	胴部		①明褐色(7.5YR5/6) ②にぶい褐色(7.5YR5/4)		0.5～3mmφの長石・チャート 含む	
63	NR1 4層	縄文土器 器種不明	胴部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②オリーブ黒色(5Y3/1)		0.5～3mmφの長石・石英含 む	
64	NR1 4層	縄文土器 器種不明	胴部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②明褐色(7.5YR5/6) 黒褐色(2.5Y3/1)		0.5～5mmφの長石・石英含 む	
65	NR1 3層	弥生土器 甕	口縁部	③残高3.1	①淡黄色(2.5Y8/3) にぶい黄褐色(10YR5/3) ②淡黄色(2.5Y8/3)		0.5～4mmφの長石・石英・く さり礫・チャート含む	
66	NR1 3層	弥生土器 甕	底部	②(5.8) ③残高3.2	①浅黄褐色(10YR8/3) ②灰白色(2.5Y7/2)		0.5～2mmφの長石含む	
67	NR1 2層 (肩部)	縄文土器 深鉢	底部	②(8.9) ③残高1.9	①灰黄褐色(10YR5/2) ②淡黄色(2.5Y8/3)		0.5～3mmφの長石・石英・ チャート含む	
68	南西部 遺構検出 中	陶器 碗	底部	②(4.8) ③残高1.3	釉:暗オリーブ色(7.5Y4/3) 素地:灰白色(5Y7/1)		砂粒を含まない	
69	南西部 遺構検出 中	陶器 器種不明	底部	②(9.0) ③残高1.9	①釉:灰白色(2.5Y8/1) 素地:浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)		砂粒を含まない	
70	北部 上層遺構 基盤層	弥生土器 高坏	坏部	③残高1.85	①浅黄褐色(7.5YR8/3) ②浅黄褐色(10YR8/3)		0.5～4mmφの長石含む	
71	北側 包含層2	弥生土器 高坏	坏部 ～脚部	③残高3.3	①灰白色(10YR8/2) にぶい黄褐色(10YR7/4) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)		0.5～4mmφの長石・石英含 む	
72	北側 包含層2	弥生土器 壺	口縁部	③残高2.1	①②にぶい黄褐色 (10YR7/3)		0.5～1mmφの長石・石英含 む	
73	北側 包含層2	土師器 高坏	脚部	③残高3.0	①②淡黄色(2.5Y8/4)		0.5～1mmφの長石・くさり礫 含む	
74	北側 包含層2	須恵器 高坏	坏部	③残高2.7	①灰色(N4/ ②灰色(N5/ 灰白色(7.5Y7/1)		0.5～2mmφの長石含む	
75	北側 包含層1	土師器 高台付坏	底部	③残高1.6	①淡黄色(2.5Y8/3) 灰白色(7.5Y7/1) ②灰白色(5Y7/1)		0.5～2mmφの長石含む	
76	北側 包含層1	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	①(11.0) ③2.2	①②灰白色(N7/)		0.5～2mmφの長石含む	
77	南西拡張 区 包含層	土師器 高坏	坏部	③残高2.4	①灰黄色(2.5Y7/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)		0.5～2mmφの長石・石英含 む	
78	旧床土	土師器 高坏	基部	③残高2.0	①灰白色(2.5Y8/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)		0.5～4mmφの長石・チャート 含む 1～2mmφのくさり礫含む	
79	遺構検出 中 (旧床土)	土師器 高台付坏	底部	②(5.6) ③残高2.0	①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(5Y8/2)		2mmφの長石含む	
80	旧床土	須恵器 坏蓋	口縁部	③残高1.1	①②青灰色(5B6/1)		0.5～1mmφの長石含む	
81	遺構検出 中 (旧床土)	須恵器 高坏	坏部	③残高4.2	①灰色(10Y5/1) 灰白色(N8/ ②灰白色(N7/)		0.5～1mmφの長石含む	北側包含層 2と接合
82	遺構検出 中 (旧床土)	瓦質土器 足鍋	脚部	③残高5.6	①暗灰色(N3/ 灰白色(5Y8/2)		0.5～1mmφの長石・チャート 含む	

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
83	南西拡張区 旧耕土・旧床土	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	①(10.8) ③残高2.1	①②灰白色(N7/)		0.5～1mmφの長石含む	南西拡張区 遺構検出 中、北側包 含層1、NR 1アゼ(1層) と接合
84	南西拡張区 旧耕土・旧床土	陶器 播鉢	口縁部	③残高5.85	①にぶい橙色(7.5YR6/4) にぶい黄橙色(10YR6/4) ②灰褐色(7.5YR6/4)		1mmφの長石含む	須佐唐津
85	南西拡張区 旧耕土・旧床土	瓦質土器 羽釜	口縁部	③残高2.1	①浅黄色(2.5Y7/3) にぶい黄色(2.5Y6/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)		0.5～1mmφの長石・石英含む	
86	南西部 整地土下 旧耕土	磁器 染付碗	底部	②(3.2) ③残高1.85	①明緑灰色(10GY8/1) 明緑灰色(10GY7/1) ②明緑灰色(7.5GY8/1) 素地:灰白色(10Y8/1)		砂粒を含まない	
87	南西部 整地土下 旧耕土	白磁 紅皿	口縁部 ～底部	①(4.7) ②(1.7) ③1.5	①灰白色(10Y8/1) ②灰白色(5Y8/1)		砂粒を含まない	
88	南西部 整地土	陶器 甕	口縁部	③残高7.5	①灰白色(2.5Y8/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)		0.5～2mmφの長石含む	
89	南西部 整地土	磁器 染付碗	口縁部	③残高1.95	①②明青灰色(10BG7/1) 青灰色(5B5/1) 素地:灰白色(7.5Y8/1)		砂粒を含まない	
90	南西部 整地土	磁器 染付碗	口縁部	③残高4.4	①②明青灰色(10BG7/1) 青灰色(5B5/1) 素地:灰白色(10Y8/1)		砂粒を含まない	
91	南西部 整地土	磁器 染付碗	体部 ～底部	②(4.2) ③残高4.1	①明青灰色(5B7/1) 青灰色(5B5/1) 素地:灰白色(10Y8/1)		砂粒を含まない	

表7 出土遺物(玉類)観察表

法量()は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm) ①長さ②幅③厚④重量(g)	材質	備考
93	3号住居 炉跡サンプル	玉	①0.4 ②0.4 ③0.2 ④0.04	不明	
94	3号住居 炉跡サンプル	玉	①0.4 ②0.4 ③0.2 ④0.04	不明	

表8 出土遺物(土製品)観察表

法量()は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm) ①長さ②幅③厚④重量(g)	色調		胎土	備考
				①外面	②内面		
95	NR1 4層	不明	①(4.85) ②(2.85) ③(2.3) ④(25.73)	①浅黄色(5Y7/3) オリーブ黄色(5Y6/3)		0.5～3mmφの長石・石英・ チャート含む	

表9 出土遺物(金属器)観察表

法量()は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm) ①長さ②幅③厚④重量(g)	備考

表10 出土遺物(石器)観察表

法量()は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm) ①長さ②幅③厚④重量(g)	石材	備考
98	3号住居 床面	不明	①3.6 ②7.95 ③5.6 ④326.16	石英	
99	SK44 1層	不明	①(4.35) ②(5.75) ③(1.45) ④(49.99)	安山岩	
100	SK44 2層	作業台	①(28.7) ②(16.1) ③(9.1) ④(6520)	火山礫凝灰岩	
101	SK71	剥片	①(2.5) ②(1.3) ③(0.9) ④(3.08)	黒曜石	
102	NR1 4層	石錐	①9.5 ②8.0 ③1.7 ④176.64	石英安山岩(デイスait) 質溶結凝灰岩	
103	NR1 4層	磨石	①10.65 ②9.9 ③5.6 ④968.31	火山礫凝灰岩	
104	NR1 4層	石鏃	①3.35 ②1.65 ③0.45 ④2.04	安山岩	
105	NR1 4層	剥片	①5.2 ②2.0 ③0.6 ④8.12	安山岩	
106	北側 包含層1	石斧	①(10.4) ②(6.9) ③(2.9) ④(264.89)	安山岩	

(6)小結(図38～40)

当調査は、吉田構内の中心部に位置する「中央広場」敷地にて実施された。構内はその名のとおり中央広場を中心に各学部施設が配置されている。北に面する総合図書館、東に面する農学部および共同獣医学部、南東に面する理学部、南西に面する経済学部、西から北西に面する共通教育棟、そして北東に面する埋蔵文化財資料館を含め、いずれも埋蔵文化財保護を目的とした発掘調査が実施されていない^{註1}。換言すれば、総合図書館増築工事に伴う発掘調査^{註2}を除くと、吉田構内の中央部は長らく地下の様相が不明瞭のまま現在に至っていたことになり、重ねて換言すれば、そのために中央広場では地下の遺跡が破壊されず現在に至ったことになる。

このたび、その吉田構内中央部において、福利厚生施設(FAVO(山大生協運営):カフェレストランや売店、ブックストア、多目的ルームを併設)新営工事が計画されたことを受け、初めて本格的な発掘調査が実施されることとなった。

調査の結果、竪穴式住居跡や掘立柱建物跡からなる古墳時代中期中葉の集落が確認されるに至った。集落は吉田構内の南に聳える今山から北西方向に派生した丘陵端部に形成されたとみらる。集落の南西には北西に走る自然河川が検出されたが、集落が営まれた時期にはその機能は失われ、窪地に姿を変えている。一方集落の北方80mにも西流する自然河川が検出されており(総合図書館3号館敷地)、この河川は少なくとも平安時代まで機能し続けている。調査地は後世に大きく削平にされているため、当時の地盤高は推定しがたいものの、各竪穴式住居跡の床面高が25cmの差に収まっていることから、集落は南東から北西に緩やかに降下する尾根上に営まれたものと推測される。

検出された4棟の竪穴式住居跡は、出土遺物からは明確な時期差は見いだせず、同時期に営まれていたとみられる。住居跡は南北軸をそれぞれ違えているが、住居内焼土(地床炉)の位置や入り口施設とみられる痕跡から、4号住居跡を除くと、2号住居跡の南側空間に向けて建物を配し、掘立柱建物群は、空間の南西に設けられたと考えられる。

竪穴式住居跡は、1号および3号住居跡は4本主柱で、2号および4号は2本主柱である。3号住居跡は他の建物に比して平面積が小さく、床面の広範囲に焼土が広がることから、中央に柱を配せない理由があったのだろう。住居ではなく作業場や工房などの用途が推定される。ほぼ同時期と推定される集落跡で、2本主柱竪穴式住居跡を複数棟確認した朝田墳墓群Ⅶ地区の調査では、山口県内の古墳時代中・後期の竪穴式住居はほとんどが4本主柱であり、2本主柱が稀な存在であることが指摘されている^{註3}。両遺跡は榎野川をはさみ4kmの隔りがあるが、その出自由来については今後の課題となる。

県内では、竪穴式住居内の造り付け竈が普及するのは6世紀以降と考えられており、今回検出された各住居跡とも造り付け竈は確認されていない。注目されるのは、当調査区の北方140mの低丘陵部(第2学生食堂敷地北西部)にて確認された集落跡である^{註4}。昭和46年(1971)に山口大学吉田遺跡調査団によって実施された発掘調査では、6棟の竪穴式住居跡が検出されている。4本主柱とみられる第1号住居跡を除くと主柱の位置が明確ではないが、その内2棟で造り付け竈の存在が指摘されている(図38)。竈を有する第2号住居跡は第3号住居跡を切っており、同じく竈を有する第6号住居跡は両者にほぼ接していることから、同時存在は考えがたい^{註5}。各号住居跡出土遺物を見ると、二重口縁壺や小型器台など、中央広場住居跡出土土器に比してやや古い様相を示すようにも感じられるものの、6号住居跡から出土している初期須恵器壺と中央広場4号住居跡出土壺に時期差は見いだせないようである。また、調査団の調査精度やその後の出土遺物保管状況を考慮すると、直ちに集落間の先後関係に言及できる状況にない^{註6}、^{註7}。

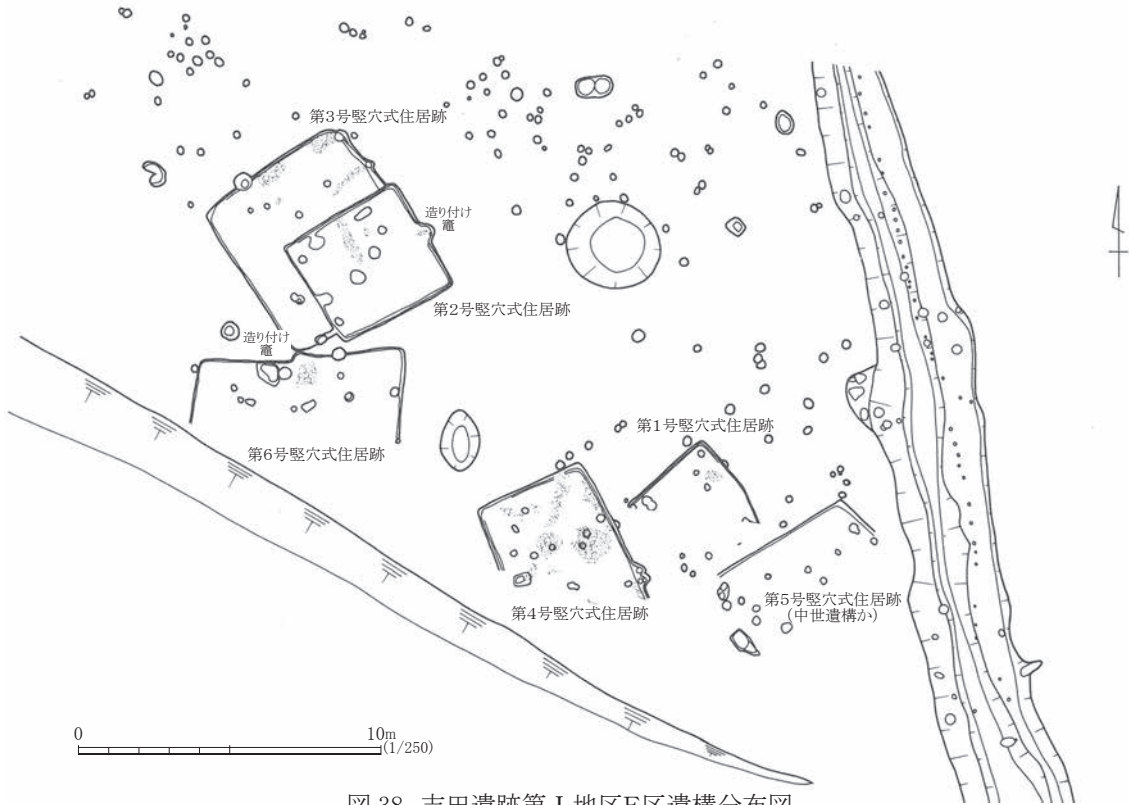


図 38 吉田遺跡第 I 地区E区遺構分布図

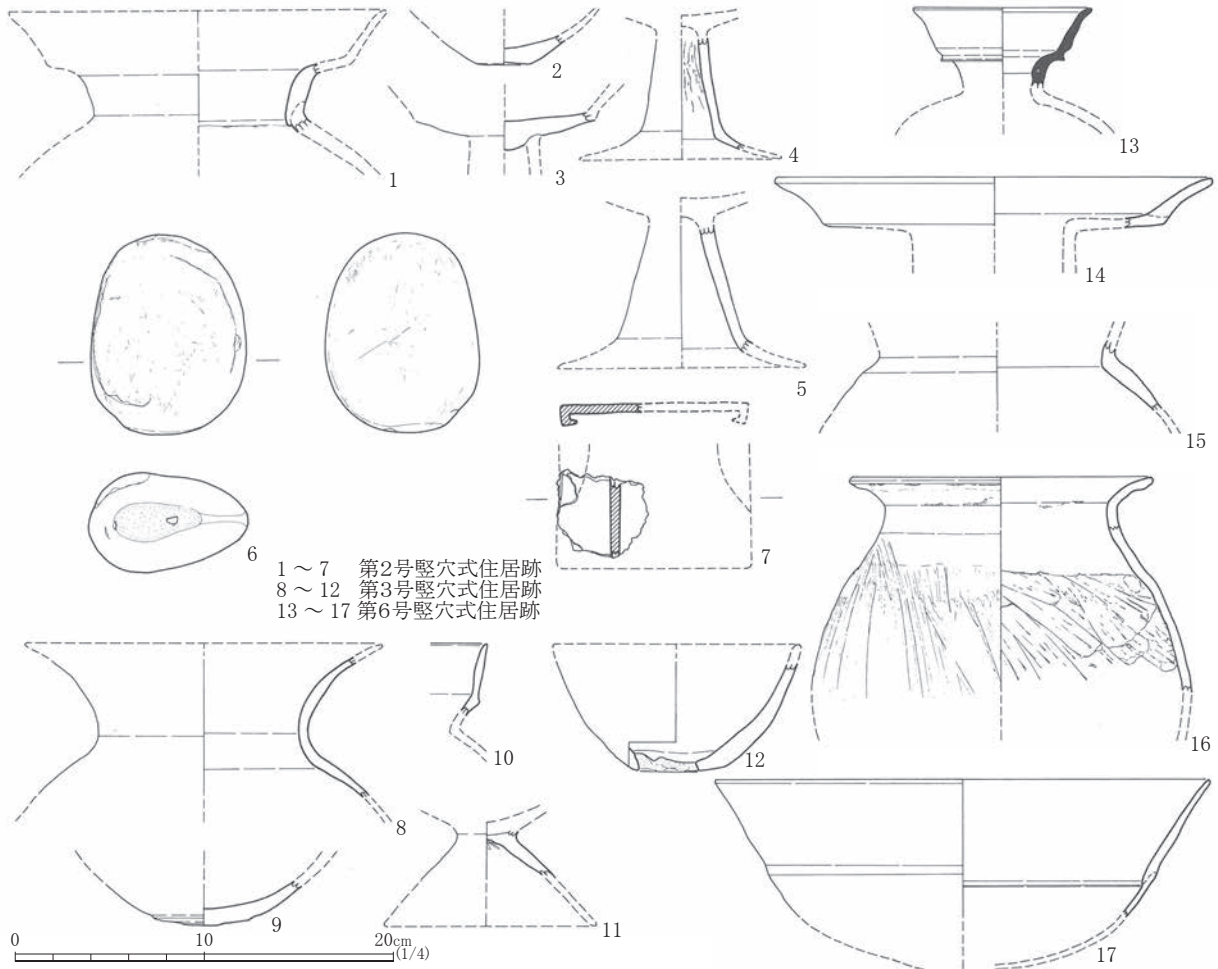


図 39 吉田遺跡第 I 地区E区竪穴式住居跡出土遺物

一方で吉田構内が存在する榎野川左岸の平川地区は、県内でも最初期に造り付け竈が出現する地域の一つに数えられている。吉田遺跡の南西1.25kmに位置する小路遺跡では、造り付け竈を有する竪穴式住居跡が2棟確認されている。柱の配置が不明確で、住居としては小型過ぎるように思える施設であるが、出土遺物に乏しいものの、古墳時代中期前葉に比定されている。吉田遺跡第2学生食堂敷地第6号住居跡は、それに次ぐ中期中葉の造り付け竈を有する住居となるが、中期後葉の竪穴式住居跡が検出されている西遺跡^{註9}や神郷大塚遺跡^{註10}など近隣の遺跡を概観すると、その後造り付け竈は定着せずに6世紀を迎えるようである。古墳時代中期の造り付け竈の出現は、当地域の生活様式を急速に大きく変化させる要素とはなり得なかった可能性が高い^{註11}。

初期須恵器に注目すると、4号竪穴式住居跡出土高坏・甗は、第2学生食堂敷地第6号住居跡出土甗口縁部片、総合図書館3号館敷地自然河川埋土出土甗底部片に次ぐ出土例となる。甗は焼成不良が著しく、産地は断定できないものの遠路はるばる運ばれたことに驚嘆する資料である。また、高坏脚柱部の欠落にも注目すべきであろう。後世の削平時に欠失したとも考えられるが、住居跡およびSK44埋土、そして遺構上部を覆う遺物包含層から小破片すら出土していないのは偶然であろうか。1号住居廃棄時祭祀遺構の可能性のあるSK3からは、人為的に脚柱部を欠失させた土師器高坏に小型壺が載せられた状態で出土している。現在となっては写真記録が残るのみだが、壺の腹部には焼成後穿孔が見られたことから、甗として用いられたと推定される。4号住居跡初期須恵器を強く連想させる状況であろう。憶測にはなるが、高坏脚柱部を欠落させることに何らかの祭祀的意義が存在した、もしくは初期須恵器高坏が当地にもたらされた際には既に脚柱部が欠落していたなどの可能性までもも考えておきたい。

最後に、再度4号竪穴式住居跡の埋め戻し保存について書き記しておく。本学では、教育研究の利便性を優先するため、近年は遺跡の現地保存が行えない状況が続いてきた。当開発計画は教育研究と直接的に関係しないことから、計画変更による現地保存が可能と軽々に考えた自分が許しがたく、遺跡に関し新たな知見が得られる喜び以上に陰鬱な現地調査が続いた。末筆ではあるが、遺跡の保存に理解を示し、自ら設計変更を提案してくれた山口大学生生活協同組合には、深く感謝の意を表したい。

(横山)

【註】

- 1) 本学が吉田構内において埋蔵文化財保護への取り組みを開始した昭和41年(1966)にすでに竣工していた農学部・共同獣医学部本館南棟は兎も角、その他の施設については、いずれも不十分ながら本学に埋蔵文化財保護体制が整えられた後に建設されている。その経緯に至る詳細な記録は残されていないが、「本学の教育研究のため」という辞柄のもと遺跡破壊が横行していたことは想像に難くない。
- 2) 河村吉行(1985)「中央図書館増築予定地M-16区の発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅱ』, 山口
横山成己(2016)「図書館改修工事及び環境整備(図書館周回道路迂回)工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成24年度—』, 山口
- 3) 小南裕一ほか(2009)『朝田墳墓群Ⅷ-Ⅱ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ地区の調査成果-』山口県埋蔵文化財センター調査報告第71集, 山口県埋蔵文化財センター館(編), 山口
- 4) 小野忠熙(1976)『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』, 山口大学吉田遺跡調査団, 山口
豆谷和之(1994)「付篇Ⅰ 第1章 吉田遺跡Ⅰ地区E区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅻ』, 山口
- 5) 註4文献(豆谷)で、第5号竪穴式住居跡は中世の遺構である可能性が指摘されている。

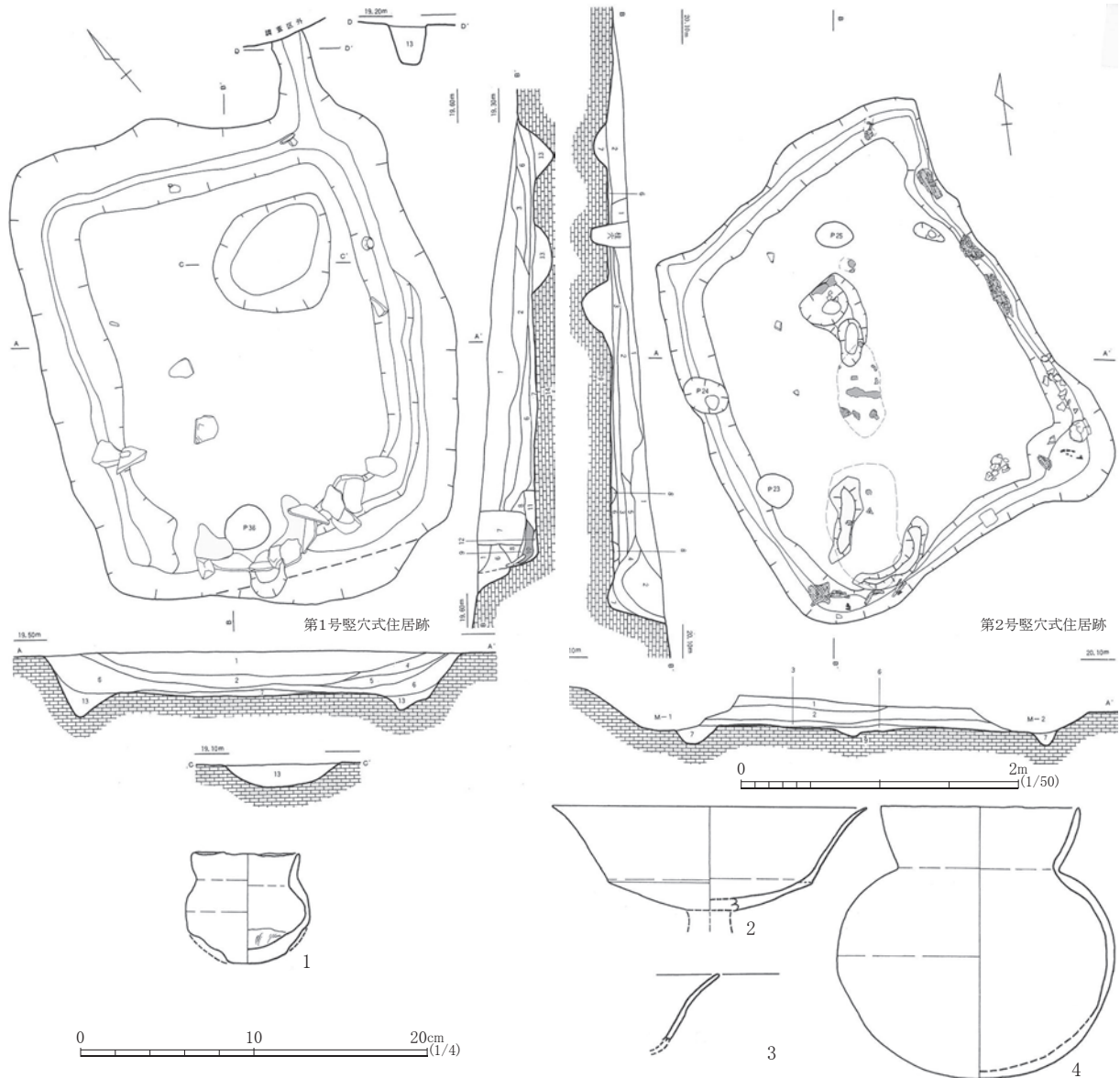


図 40 小路遺跡の竪穴式住居跡と出土遺物

6) 註4文献(豆谷)では、住居跡の切り合い関係と初期須恵器と土師器の対比から、2号→3号→6号の変遷を想定している。

7) 当館に残された吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査カラー写真を見ると、第2号竪穴式住居跡床面の北部に口縁が全周し、部分的に肩部まで遺存している須恵器甕に見える土器が写り込んでいる(田畑直彦(1998)『学内発掘20年の歩み』, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口)。当遺物は当館に残されていないことから、文献4(豆谷)では触れられていない。

8) 縄田潔(1991)『小路遺跡Ⅱ』山口市埋蔵文化財調査報告書第37集, 山口市教育委員会・山口市文化財センター(編), 山口

9) 石川克彦・菅波正人(1986)『西遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告書第21集, 山口市教育委員会(編), 山口

10) 増野淳一・杉原一恵(1991)『神郷大塚遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告書第38集, 山口市教育委員会(編), 山口

11) 総合図書館3号館敷地にて検出された自然河川南東流路最下層から、古墳時代前中期の土器とともに移動式竈が出土していることには注目しておきたい。

3. 教育学部附属特別支援学校ガス管引替工事に伴う立会調査



図 41 調査区位置図

調査地区 吉田構内C-21区 D-20・21区

調査面積 41.5㎡

調査期間 平成29年7月24・25日

調査担当 横山成己

調査結果

教育学部より、附属特別支援学校正門から教室棟Bまでのガス管を更新する工事計画が寄せられたことから、立会調査を実施する運びとなった(平成29年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会(5月11日(木)開催:メール審議)にて承認)。

計画地の南に隣接して行われた立会調査では、現地表下60cmに遺物包含層とみられる層厚10cmの黒褐色砂質土層を検出し、その下位には河川堆積と思われる砂礫土層が認められた(図41)。今回の掘削深度は50cmであったが、慎重を期して掘削が開始される南西部(A地点)からB地点まで2日間の工事立会を実施した。

その結果、既設ガス管との距離が近かったためか、全域で造成土下に既設管の巻砂が確認され、自然堆積層が検出されなかったことから(図42、写真208)、以北の工事区間の調査は中止することとなった。

【註】

- 1) 横山成己(2014)「教育学部附属特別支援学校雨水排水補修工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成22年度-』, 山口



写真 208 A地点土層断面(南西から)

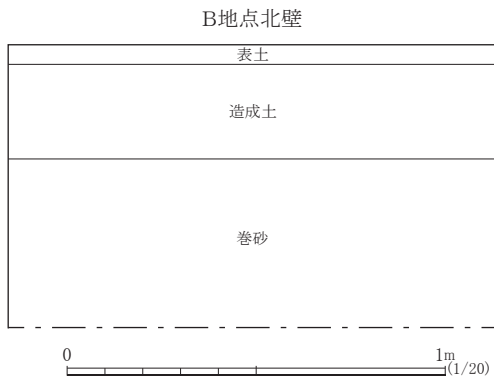


図 42 A地点土層断面柱状図

4. 解剖実習棟屋外環境整備工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内R-19区
 調査面積 40.3㎡
 調査期間 平成29年11月6・7日
 調査担当 横山成己
 調査結果

平成29年度に入り、共同獣医学部より解剖実習棟の屋外環境整備工事を行いたい旨相談があった。計画地は、古代官衙に関連する遺構や遺物が密に埋存する地域であり、慎重な埋蔵文化財保護対応が必要となるが、計画は本発掘調査が実施された解剖実習棟^{註1}の南側、動物医療センター2号館^{註2}の西側に近接してコンクリート土間を設置し(A地点)、実習等の北東部に動物の逃亡防止用フェンスを設置する(B地点)というものだった。B地点においても、北に隣接する果樹園で現地表下20~40cmで土壌や溝、ピットが密に分布することが判明していたため、平成29年度第2回埋蔵文化財資料館専門委員会(8月4日(金)開催)にて対応が審議され、立会調査を実施することが承認された(図43)。

調査の結果、A地点では解剖実習棟と動物医療センター2号館の本発掘調査区とみられる埋め戻し土が確認されたが、現地表下70cmで旧耕土、下位に旧床土が遺存している部分を確認することができた(図44、写真209)。B地点の掘削深度はわずか20cmであったが、10cmの表土下位に遺物包含層の可能性がある褐色土層を確認した。今後とも細心の注意を払い埋蔵文化財保護対応を行う必要がある。

【註】

- 1) 田畑直彦(2004)「平成7・10~14年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』, 山口
- 2) 横山成己(2019)「動物医療センター(リニアック室等)新営その他工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成26年度-』, 山口
- 3) 横山成己(2014)「農学部附属農場果樹園側溝新設工事に伴う立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成26年度-』, 山口

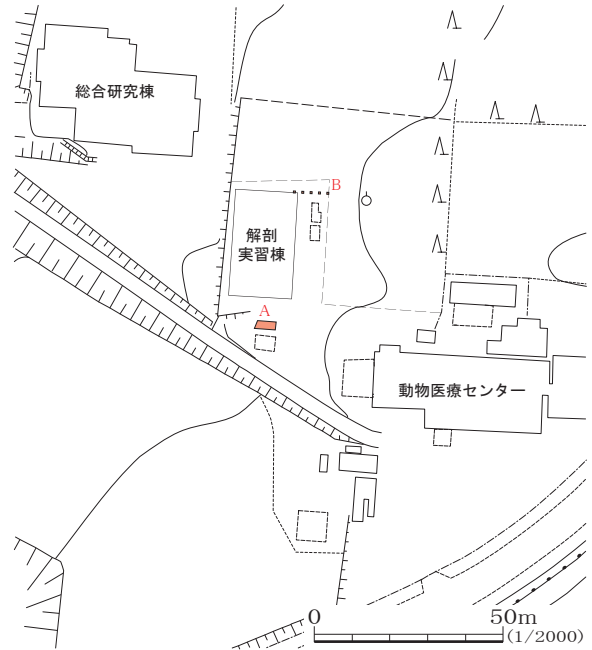


図43 調査区位置図



写真209 A地点北壁土層断面(南から)

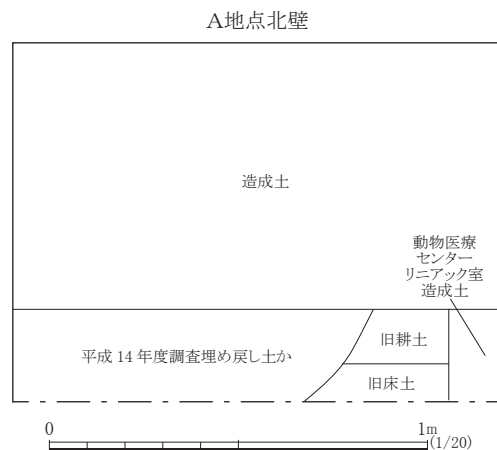


図44 A地点土層断面柱状図

5. 環境整備(ため池5)雨水改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内O-6区 K・L-10区 調査面積 18.5㎡
 調査期間 平成29年11月15・24日 調査担当 横山成己
 調査結果(図45、写真210・211)

吉田構内の正門東隣にある蓮池は、平成19年(2007)に山口市仁保の源久寺から古代(大賀)蓮約50株を分けていただき整備したもので、長らく学生や地域住民の目を楽しませてきたものの、近年は池への水回りが悪くあまり開花しない状態が続いていた。施設環境部よりため池5から蓮池への導水工事を行いたい旨相談があったのは、本来であれば蓮の見頃を迎える平成29年度の梅雨時期のことであった。

ため池5掘削地点(A地点)は周知の埋蔵文化財包蔵地外であるが、池の成立は古く、近世に作成された地下上申絵図「吉田村」にはすでに「山王堤」の名で描かれている。またビオトープに導水するB地点も新規掘削となることから、慎重を期し立会調査を実施することが第2回埋蔵文化財資料館専門委員会(8月4日(金)開催)にて承認された。調査の結果、両地点とも埋蔵文化財に支障は生じなかった。

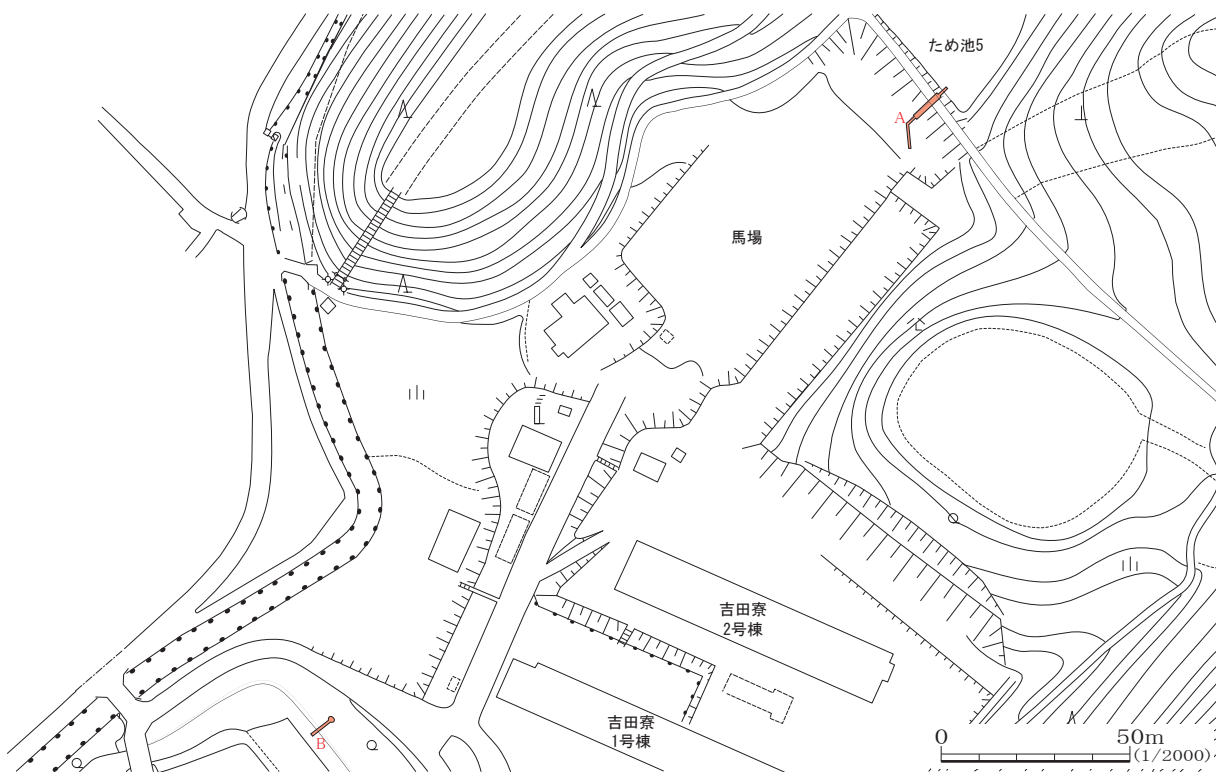


図 45 調査区位置図



写真 210 A地点土層断面(北西から)

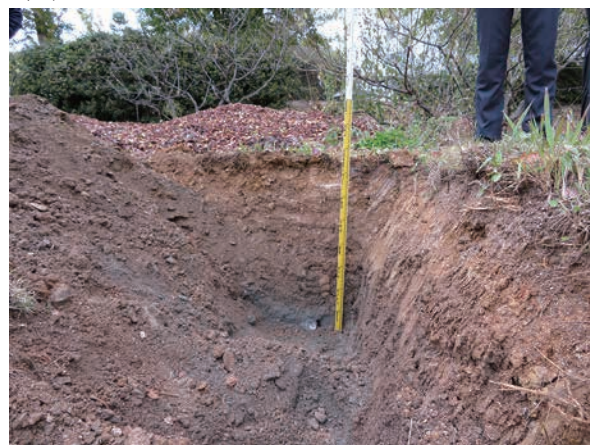


写真 211 B地点土層断面(南西から)

6. 理学部1号館駐輪場設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内N-20区

調査面積 約3.8㎡

調査期間 平成30年3月13日

調査担当 田畑直彦

調査結果

理学部1号館(人文・理学部管理棟)北側で駐輪場の屋根の新設に伴い、6箇所基礎部分の掘削工事が計画され、立会調査を実施することになった(平成29年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会(1月4日(木)開催:メール審議)にて承認)。

工事は基礎部分について平面形約80cm×80cm、現地表下約80cmまで掘削を行うものである。

調査の結果、現地表下17～23cmまでは造成土で、以下で弥生時代以降の遺構面形成層である明黄褐色(2.5Y7/6)シルトを検出した。統合移転前に存在した水田耕土と床土は検出されず、調査区内は削平されていることが判明した。

今回調査区の西側に位置する理学部駐輪場屋根新設工事に立会調査区^{註1}では、西半部では床土とみられるにぶい黄褐色(10YR5/3)粘質土が確認されたが、東半部では造成土直下で弥生時代以降の遺構面形成層である明黄褐色(2.5Y6/6)シルトが検出されたことから、今回調査区付近は構内造成時に削平されたと考えられる。

【註】

- 1) 横山成己(2020)「理学部駐輪場屋根新設工事に立会調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報—平成27年度—』, 山口

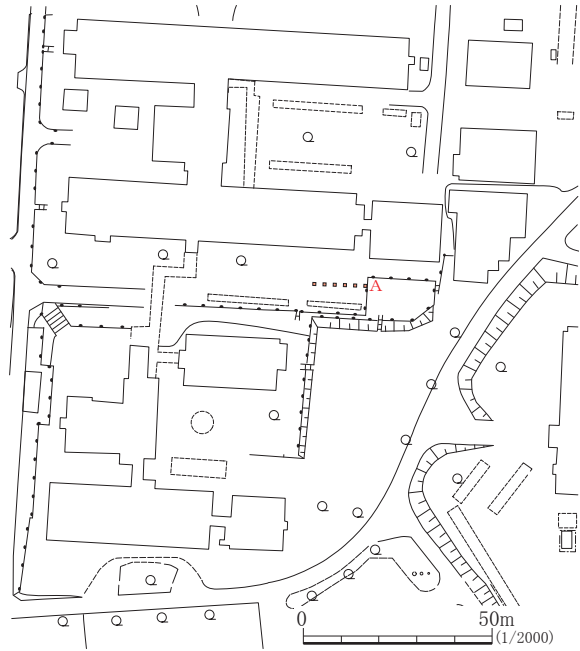


図 46 調査区位置図



写真 212 調査区全景 (南西から)



写真 213 A地点土層断面 (南から)